

博士論文

日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略と重訳の影響

一橋大学言語社会研究科

指導教員 糟谷啓介先生

副指導教員 イ・ヨンスク先生

ガラハーニー ファテメ

Gharakhani Fatemeh

LD121005

論文要旨

本論文は日本語のテキストから英語訳を通してペルシア語に翻訳された文(すなわち重訳された文)における翻訳方略と重訳の影響の分析ならびに解明を目的とした記述的な研究の報告である。

まず、第1章では本研究の背景と目的及び研究方法を紹介し論文の価値と独自性を述べる。

第2章ではヴィネイとダルベルネの方略が生み出された等価論を論じたうえで、ヴェヌスティの受容化翻訳と異質化翻訳を概観する。次に本研究の分析基準であるヴィネイとダルベルネによる七つの翻訳理論ならびに翻訳方略に言及する。また、テキストのメッセージ伝達に使用されるデノテーションとコノテーションという概念を紹介する。その後、イランにおける翻訳ならびに重訳の歴史に焦点を当て、日本とイランの交流歴史、また両国の通訳者によって使用された言語について検証する。こうして得た知見に基づき、翻訳の文学への影響及びペルシア語における言語の変更に関して述べる。また、岡田の講演記録を参照し、その視点からのペルシア語及び日本語の間、特にペルシア語から日本語における翻訳の問題点について述べる。これに加えて、日本語からペルシア語、ペルシア語から日本語への翻訳の際に最も使用され、翻訳に多大な影響を与えるペルシア語・日本語、日本語・ペルシア語現代ペルシア語辞典における問題点について説明する。最後に本研究において非常に重要な役割を果たす重訳の定義、またそれに対する様々な見解を概観する。

第3章においては、諸言語間翻訳における異文化に関する問題点を論ずる先行研究として、ポーランド語・英語や英語・ペルシア語、ペルシア語・フランス語間における文化要因の翻訳方略に関して行われた考察、またこれらの考察に見られる翻訳に対する批判、対照・比較に焦点を当てた研究を紹介する。また、日本語・英語そして英語・ペルシア語間における翻訳書全体を対象に、受容化・異質化の観点から考察された比較・対

照に関する研究ならびに考察を取り上げる。これに加えて、限られた数ではあるが、重訳にかかわる研究の一部を紹介する。最後に日本語とペルシア語間の翻訳についての現状を報告したうえで、こうした状況下における本研究の必要性について述べる。

第4章では本研究の分析対象である川端康成の『掌の小説』ならびに、吉本ばなの『ハードボイルド/ハードラック』について、文化的な要因が数多く含まれており、翻訳に問題が生じる可能性がある文学作品であるとの選定理由を紹介する。次に本研究で採用する分析基準及び分析方法を詳しく説明する。続いて、日本語・英語及び英語・ペルシア語のテキストを個別に対照し、分類したそれぞれのカテゴリーにおける受容化翻訳と異質化翻訳が実際にはどのように行われたのか、ならびにデノテーションとコノテーションとの伝達の可否を調べる。こうして得られた分析結果に基づいて、重訳が日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略にどのような影響を及ぼしているのかを調査する。さらに、重訳の対象と同一の日本語文を筆者が直接ペルシア語に翻訳し、得られたペルシア語訳文を、英語を経たペルシア語訳文と比較検討する。

続いて、第5章では第4章で示した分析方法に基づいた分析の結果を、1. 擬音語・擬態語、2. 色彩語彙、3. 社会言語学的次元の言葉（挨拶表現、呼称、一人称代名詞・二人称代名詞、尊敬語・謙譲語）、4. 異文化要素、5. 著者の特有表現の五つのカテゴリーにまとめ、各カテゴリー別に日本語とその英語訳、また英語から翻訳されたペルシア語のテキストから具体例を挙げながら使用される翻訳方略を分析し、受容化翻訳と異質化翻訳方略という観点から考察する。この分析結果を図示し、デノテーションとコノテーションの伝達、言い換えれば重訳の影響を探る。また、筆者が日本語から直接翻訳したペルシア語訳文を、英訳を経たペルシア語訳文と比較し、重訳によって捨象された要素と保持された要素とを調べる。

最後に、第6章では本研究の結論を以下のようにまとめる。上記の分析をまとめると、日本語（SL）から英語（EL）への翻訳および英語（EL）からペルシア語（PL）への翻

訳における方略がいずれも受容化であったカテゴリーは全 77 件中 74 例文であり、そこには擬音語・擬態語、色彩語彙、挨拶表現、一人称代名詞・二人称代名詞及び敬語表現に関する例文が含まれる。SL から EL への翻訳方略が受容化方略であるのに対して、EL から PL の翻訳には受容化と異質化を組み合わせた方略が用いられたのは 2 例文と少なかったが、これらの例文は文化要因並びに著者の特有表現に関わるものであった。SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化及び異質化の組み合わせであるのも 1 例文と非常に少なく、その対象となる要素は呼称表現であった。要約すると、全例文中の約 96%において、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳に受容化方略に至る間接的翻訳が使用されたことが判明した。また SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略がいずれも受容化及び異質化の組み合わせであるケースも 1 例存在した。いっぽう、SL から PL への翻訳および EL から PL への翻訳方略は 77 例文中 75 例文において同一であることがわかった。すなわち、受容化方略及び異質化方略に繋がる間接的翻訳と直接的翻訳の二つの全体的な翻訳方略観点からみると、SL から EL への翻訳及び EL から PL への翻訳方略の間に特に差が見られなかった。ただし、局所的な観点からみると、SL から EL への翻訳及び EL から PL への翻訳のいずれにおいても最も使用された翻訳方略は等価方略であった。

「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」のどちらが用いられたかは、デノテーションまたはコノテーションの伝達への影響はみられなかった。「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」はどちらも等価な訳出を生み出すために重要な方略であり、主に翻訳される起点言語及び目標言語の体系、また翻訳者の用いる手法によって異なる。翻訳方略以外に、各カテゴリーにおいて文意のニュアンスが伝達されなかった理由は、重訳によって生じた様々な問題であった。たとえば、SL から EL に翻訳された際、文化の差異によって相当する訳語が存在しない場合は、SL における要素が省略または一般化され、ある

いは配慮されなかった例が多かった。また、誤解が生じたケースも少なくなった。特に、擬音語・擬態語、一・二人称代名詞ならびに文化要素における翻訳においては省略や一般化または暗示化がなされた。これに加えて、敬語表現においてはさらなる誤解も生じたことがあった。文化の違いに起因して文意のニュアンスの伝達に支障が起こった例は、色彩語彙、挨拶表現、敬語表現、文化要素及び著者の特有表現のカテゴリーにおいて多くみられた。例えば、色彩語彙については、各文化圏において対応する色の認識やカバーされる色の範囲も異なるため、そのニュアンスが伝達されにくい。また挨拶表現の重訳においては、文化が日本語とは大きく異なる英語では敬意や親愛の意を示す挨拶表現などはあまり存在しないため、翻訳にそのニュアンスが捨象された結果、PLにも伝達されないという現象が見られた。異文化要素は文化に関連している記号であるため、SLにおける語彙に対応する訳語がELやPLに存在しない場合が多く、省略または一般化される、あるいは正確な訳出よりもその分類、または似ているものに翻訳されることによって、含意が伝達されない。呼称の翻訳の際には、親族以外の呼称、または英語圏と異なる場面において使用された呼称の翻訳はすべて文意伝達に支障が生じた。

筆者が直接SLをPLに翻訳した際には、まず重訳を経たことによって生じる省略または誤解の問題を避けることができた。さらに、日本とイランにおける文化相違を念頭に置いたうえで、両文化圏には類似する表現も多い挨拶表現、呼称また敬語表現の中から、最も適切な訳語を選ぶことができる。また、筆者には日本語および日本文化に関する知識があるため、色彩語彙、異文化要素、また著者の特有表現を更に適切に翻訳できる。これらに加え、擬音語擬態語、一・二人称、敬語表現、また文化要因のように、正確な訳語が存在しないカテゴリーにおいても、文脈にふさわしい手段を採用することにより、適切な訳ができたと考えられる。

翻訳では原著の生命が失われるだろうといわれる。特に重訳すなわち翻訳の場合には、さらに原著の生命が失われる恐れがある。外国語における文学作品の翻訳書を読む読者

には、その外国語圏における特有の文化や原著の生命を知りたがっている人が多い。特に川端康成によって書かれた、原作の日本語においてさえも理解が簡単ではない文学作品の翻訳においては、言語としての日本語にとどまらず日本文化圏の知識が深い翻訳者こそがその生命を伝達できるだろう。同じ一つの文学作品の三言語での表現を対象とする本稿における分析から、これらの三言語それぞれの特異性と、その背景にある文化を考察することができた。その結果、筆者は文学研究ではなく翻訳研究でしか見出すことの出来ない単独性というのは、たしかにあるのだとの確信を持つに至った。

本研究は、このように三地域における言語・文化に精通した筆者の資質に立脚するものであり、だからこそ、これまでに述べてきた貴重な知見を得ることができた。現在、筆者は本稿で採り上げたカテゴリーに加えて、主語、終助詞、授受表現と複合語彙等についても重訳が及ぼす影響を分析する作業に着手している。今後は、さらに視野を拡げ、川端康成のような解釈が困難な文章を対象に言語論も組み込む研究に取り組みたいと考えている。

目次

第1章 はじめに	9
1. 1. 研究の背景	10
1. 2. 研究の目的	10
1. 3. 論文の構成	10
第2章 翻訳理論	13
2. 1. 等価理論	13
2. 2. 翻訳方略	17
2. 3. 受容化・異質化	18
2. 4. ヴィネイとダルベルネによる翻訳方略	20
2. 4. 1. 直接的翻訳	21
2. 4. 2. 間接的翻訳	23
2. 5. デノテーションおよびコノテーション	27
2. 6. イランにおける翻訳の歴史	29
2. 6. 1. 文学への影響	31
2. 6. 2. ペルシア語における言語の変更	31
2. 6. 3. ペルシア語・日本語間における翻訳の問題点	32
2. 6. 4. ペ・日、日・ペ 現代ペルシア語辞典における問題点	36
2. 7. 重訳	38
第3章 先行研究	39
第4章 研究方法	43
4. 1. 分析対象	43

4. 2. 分析方法	44
第5章 分析と考察	45
5. 1. 擬音語・擬態語	45
5. 2. 色彩語彙	69
5. 3. 社会言語学的次元の表現	
83	
5. 3. 1. 挨拶	
84	
5. 3. 2. 呼称	
96	
5. 3. 3. 一人称代名詞、二人称代名詞	
109	
5. 3. 4. 敬語表現	
124	
5. 3. 4. 1. 日本語における敬語の定義	
124	
5. 3. 4. 2. 敬語と敬意表現	
125	
5. 4. 異文化要素	
142	
5. 4. 1. 生態 (Ecology)	
143	
5. 4. 2. 物質的文化(人工物) Material culture (artefacts)	149
5. 4. 3. 社会文化、仕事と余暇 (Social culture - work and leisure)	
155	
5. 4. 4. 組織、風習、活動、手順、概念 (Organisations, customs, activities, procedures, concepts)	159
5. 4. 5. ジェスチャー、習慣 (Gestures and habits)	
160	

5. 5. 著者の特有表現	166
第6章 おわりに	185
結論	191
謝辞.....	194
参考文献	195

第1章 はじめに

本研究では、日本語のテキストから英語訳を通してペルシア語に翻訳された文（すなわち重訳された文）を対象とし、日本語文におけるメッセージがペルシア語文に適切に伝達されたかどうかを検討する。また、同じ日本語文を筆者が直接ペルシア語に翻訳し、得られた文を英語を経て訳されたペルシア語文と比較することにより、重訳による影響の考察を試みる。

より具体的に述べれば、本稿では実際に出版されている重訳による翻訳例を使用し、日本語における表現が英語を通してどのようにペルシア語に翻訳されたかを追跡する。さらに、そのプロセスにおいて、翻訳しにくい箇所や誤訳等の問題が生じやすい箇所、またすでに誤訳されている箇所等を収集したうえで、受容化および異質化のいずれの翻訳方略が使用されたかを検討する。得られた結果を図表の使用を含めて記述し、重訳において問題点が生じている場合には、筆者による直接翻訳との比較を念頭に置いてその理由を探る。

本章では、本研究の目的を明らかにし、その背景と理論、研究の方法について簡単に説明する。最後に本論文の構成について述べる。

1. 1. 研究の背景

外国語習得や翻訳・通訳で最も重要な役割を果たしている語彙は、辞書を引くことだけで記憶され、適切に使えるようになるわけではない。というのも、ある外国語の単語の使用法が自国語の特定のことばのそれと、たまたまある場合に合致するからといって、自国語のその単語のほかの使い方にまでこれが当てはまるとは限らない事例があるからである。翻訳とは、受容体の文化で知られていない対象や物事に等価な語彙などを見つける方法である。起点言語¹において、目標言語²に存在しない概念がある場合が多いため、それらをどの方略で翻訳するのかが問題である。筆者の経験からみても、辞書に記載されていない語や自国語に存在しない語をどう訳せばいいかと苦慮することが多い。また、日本文学に関心を持つ筆者は、日本語の文学作品の原文のみならず、勉強のためペルシア語訳を読むことも多く、そうした折には原文の日本語を想像しながら、ペルシア語の訳を読む。その際、適切な訳と感じる部分や訳の脱落が疑われる箇所、更には、原文は何だったのか思いつかない場合も多い。その理由の一つとして、特に日本語の文学作品の場合、ほとんどが媒介語（英語やフランス語）を通してペルシア語に翻訳されたこと（すなわち重訳）が挙げられるように思われる。また川端の作品に数多く見られる複雑な心理描写は、原文である日本語で読む場合においてさえも解釈が難しく、しばしば誤解が生じる。こうした表現をペルシア語に翻訳する際には、さらに困難が生じるのではないかと考えられる。特に日本と大きく異なる文化を有する他言語への翻訳や、更に重訳を行う場合、こうした川端文学の特色が読者にどのような影響を与えるかは、筆者にとって興味深い。こうした自身の経験から、筆者は日本語の小説がどのように、ペルシア語に翻訳されるか、また重訳がどのように影響を与えるかに興味を持つようになった。

1. 2. 研究の目的

本研究は記述的な研究である。起点言語の日本語が第一目標言語の英語を通して第二目標言語のペルシア語に翻訳されるときに、相当変わるものや問題となる事象、つまり翻訳し難いものは何か探り、分類する。そしてそれらはどのように翻訳されているかを、ヴェヌティの「受容化翻訳」と「異質化翻訳」に繋がるマンデイ（Munday,

¹ Source Language と呼ばれる。以下、SL と略す。

² Target Language と呼ばれる。以下、TL と略す。

J.2001) に示されたヴィネイとダルベルネ (Jean-Paul Vinay and Jean Darbelnet) による「直接的翻訳」と「間接翻訳」という観点から分析、考察し、そこで用いられている方略を明らかにする。

したがって、本研究の目的は以下のとおりである。まず、日本語からペルシア語に翻訳されている書籍をもとに、翻訳しにくいと思われる言葉、語句や文を抽出し、分類する。次に、受容化・異質化のどちらの翻訳方略が使用されているかを探り、使用された方略を比較し、考察する。そして日本語の原文は重訳を通してどのようなペルシア語になっているか、つまり、分類したカテゴリーは英語を通して、どのようにペルシア語に変わったか、日本語文のメッセージが伝達されたかを把握し、また語彙、語句や文の的確性を調べる。

また、筆者が直接日本語をペルシア語に翻訳し、そのペルシア語訳文を、英訳を経たペルシア語訳文と比較する。

1. 3. 論文の構成

本論の構成は以下のとおりである。まず、第1章では本研究の背景と目的および研究方法を紹介し論文の価値と独自性を述べる。

第2章ではヴィネイとダルベルネの方略が生み出された等価論を論じたうえで、ヴェヌティの受容化翻訳と異質化翻訳を概観する。次に本研究の分析基準であるヴィネイとダルベルネによる七つの翻訳理論翻訳方略に言及する。また、テキストのメッセージ伝達に使用されるデノテーションとコノテーションという概念を紹介する。その後イランにおける翻訳ならびに重訳の歴史に焦点を当て、日本とイランの交流歴史、また通訳者によって使用された言語について検証する。こうして得た知見に基づき、翻訳の文学への影響およびペルシア語における言語の変更に関して述べる。また、岡田の講演記録を参照し、その視点からのペルシア語および日本語の間、特にペルシア語から日本語における翻訳の問題点について述べる。これに加えて、日本語からペルシア語、ペルシア語から日本語への翻訳の際最も使用され、翻訳に多大な影響を与えるペルシア語・日本語、日本語・ペルシア語現代ペルシア語辞典における問題点について説明する。最後に本研究における非常に重要な役割を果たす重訳の定義、またそれに対する様々な見解を概観する。

第3章においては、諸言語間翻訳における異文化に関する問題点を論ずる先行研究について述べる。様々な言語の間における文化要因の翻訳方略に関して行われた考

察、またこれらの考察に見られる翻訳に対する批判、対照・比較に焦点を当てた研究を紹介する。または、日本語・英語そして英語・ペルシア語間における翻訳書全体を対象に受容化・異質化の観点から考察された比較・対照に関する研究ならびに考察を取り上げる。これに加えて、限られた数ではあるが、重訳にかかわる研究の一部を紹介する。最後に日本語とペルシア語間の翻訳についての現状を報告したうえで、こうした状況下における本研究の必要性について述べる。

第4章では本研究の分析対象に選定した川端康成の『掌の小説』ならびに、吉本バナーの『ハードボイルド/ハードラック』について、文化的な要因が数多く含まれており、翻訳に問題が生じる可能性がある文学作品であるとの選定理由を紹介する。

次に本研究で採用する分析基準および分析方法を詳しく説明する。

続いて、日本語・英語および英語・ペルシア語のテキストを個別に対照し、分類したそれぞれのカテゴリーにおける受容化翻訳と異質化翻訳が実際にはどのように行われ、デノテーションとコノテーションとの伝達の可否を調べる。こうして得られた分析結果に基づいて、重訳が日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略にどのような影響を及ぼしているのかを調査する。さらに、重訳の対象と同一の日本語文を筆者が直接ペルシア語に翻訳し、得られたペルシア語訳文を、英語を経たペルシア語訳文と比較検討する。

続いて、第5章では第4章で示した分析方法に基づいた分析の結果を、1. 擬音語・擬態語、2. 色彩語彙、3. 社会言語学的次元の言葉（挨拶表現、呼称、一人称代名詞・二人称代名詞、尊敬語・謙譲語、4. 異文化要素、5. 著者の特有表現という五つのカテゴリーにまとめ、各カテゴリー別に日本語とその翻訳の英語、または、英語の翻訳のペルシア語のテキストから具体例を挙げながら使用される翻訳方略を分析し、受容化翻訳と異質化翻訳方略という観点からの考察を行い、図表で表しながらデノテーションとコノテーションの伝達、言い換えれば重訳の影響を探る。また、筆者が直接日本語をペルシア語に翻訳し、そのペルシア語訳文を、英訳を経たペルシア語訳文と比較し、重訳で消えた要素と残った要素を調べる。

最後に、第6章では本研究の結論をまとめ、SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略は受容化方略と異質化方略のいずれかを検証する。さらに、「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」が使用されたことは、デノテーションまたはコノテーションの伝達に影響を与えたかどうかを調べる。そして各カテゴリーにおいて原文のニュアンスが伝達されたかどうか、ま

たその伝達に及ぼす重訳の影響を考察したうえで、筆者による直接翻訳と比べた結果を報告する。最後に、筆者の今後の課題を述べる。

第2章 翻訳理論

普遍的に言えば、翻訳とは異なった二つの言語の間の言語変換であると考えられている。翻訳理論の分野では、それをどのようなやり方で行うかという思想、具体的にはどのような「翻訳方略」を利用するかといった議論が「等価」概念を中心に展開されてきた。

河原(2014)は、翻訳理論の基底的概念は「翻訳等価性」(translation equivalence)であると述べ、それに大きく関わる「翻訳方略」(translation strategies)について、海外の先行研究を批判的に分析し、翻訳理論のなかでの意義や位置づけを再考した。翻訳理論における根本的な概念は等価論と言われているのはまさにその通りであり、翻訳議論において等価概念は主なコンセプトであると筆者が考えている。

河原(2014:121)の観点からは、翻訳理論における一般的な翻訳ストラテジーには広義および狭義の定義が存在する。広義の定義においては、翻訳ストラテジーとは「翻訳する状況によって定まる目標を達成するために翻訳者が使う最も効果的な、一連の緩やかに定式化された規則ないし原則」である。一方狭義の場合は、翻訳ストラテジーとは翻訳対象のテキストによって生じる特定の問題や翻訳タスクを遂行するうえでの特定の問題を解決する際に使う手続きや方法 (cf. Krings 1986:175; Lörcher 1991, p. 76; Chesterman 1997:92) と定義される (Palumbo 2009:132)。こうした先行研究によれば、広義の定義による翻訳では、読者のニーズ、つまり周りの状況等広い意味での条件を考えることによって、このニーズに適合する規則を考えて翻訳する。それに対して狭義の翻訳においては、テキストの中のさらに狭い状況を考えて翻訳方略を決める。筆者もこうした見解を支持している。

2. 1. 等価理論

言語間における変換という翻訳思想、特に起点言語における異質性をいかに取扱い、どのような方略で目標言語に変換するか、すなわち等価をどう超越するかという問題は、等価概念を基底にして考えるべきである。

等価理論とは、起点言語における要素またはテキストとそれを別の言語に翻訳した要素やテキストは、同等の価値を持ち、つまり等価関係を持つべきであるとの論である。すなわち、等価理論とは、翻訳理論の基礎的な概念であり、起点言語と目標言語が同一であるという基準を定めるのではなく、その価値が同等になりえると定める理論である。翻訳理論の分野では、snell-Hornby (1988) のように、等価概念は有害だと批判する研究者もいるが、一方では等価という翻訳理論は避けて通ることができないと主張する研究者 (Nida and Taber 1969, Catford 1965, Toury 1980, Pym 2010) も存在する。したがって、等価という概念を翻訳理論から抹消するのは不可能であると思われる。等価理論において、起点言語および目標言語が同一ではなく、価値が同等であると指摘されているが、言語構造、言語文化の異なる言語間において起点言語と目標言語が同一になるわけではない。仮にそうであったとしても、同様な場面で使用しない場合は、つまり等価な価値を持っていない場合は文意が伝達されないと思われる。したがって同一を目指す翻訳よりも等価な翻訳が妥当である。

翻訳には、様々な定義が存在するが、本稿では翻訳とは、起点言語のテキスト中の要素を、目標言語における等価の要素に置き換えることであるとの定義 (Catford 1965: 20) を基盤に置く。また、翻訳は起点言語のテキストから、できる限りの等価性を持つ目標言語のテキストへ向かうものであり、元の文章の内容・スタイルに対する翻訳者の理解を前提としている (Wilss 1982:62) との視点も援用する。

翻訳におけるスタイルも重要だと思われる。特に詩文における翻訳は内容とともに韻律も配慮し、詩らしく翻訳するのは重要である。ただし、その作業はきわめて困難であると思われる。

以下に先行研究における「等価」という概念の定義を紹介する。それぞれの定義において、「等価」という用語は目標言語側のみを指している。「置き換える」、「導き出す」、「再現する」等 Nida and Taber によると、翻訳のプロセスはまさに方向性のあるものである。つまり翻訳は、一方の側から他方の側へ向かうが、再びその逆方向に向かうものではない (Muranaga 2010:81)。しかし、翻訳は逆方向に向かわないとは断言できないと筆者は考える。というのは、辞書等による単なる語彙の置き換えなどを除外すれば、等価な概念を中心に翻訳されたものは、逆方向への翻訳もまた成立するのではないかと思われる。この点の証明を試みるため、本研究では、日本語から翻訳されたペルシア語文を、筆者が実際に日本人の読者が理解できるように、日本語に再度翻訳する。

上述の定義を念頭に置き、Muranaga (2010) は翻訳における「等価」とは自然性と方向性（すなわちバランスのとれた双方向の動きの可能性）を前提とするとの観点から、従来の等価理論を以下のように批判する。

等価理論の定義の場合、自然性もしくは方向性どちらにしても、言語間のコミュニケーションにおいてなされ得る書き直し、解説、要約、パロディー等他の全てのものから翻訳を区別する「等価」という一つの用語があることが、長所である。一方で、短所は、この関係が一方のみでなければならない場合もあれば、双方向でなければならない場合もある理由をほとんど説明していないことである。更に、等価であるということは言語内での位置または価値と等価なのか、メッセージ、テキストの内容あるいはスタイルと等価なのか、もしくはこれら全てとその時々で等価になるのか、多くの場合不明確である (Muranaga 2010: 83, 84)。

このMuranagaの指摘については、筆者は、等価とは位置、価値、メッセージ、テキストの内容、あるいはスタイルの全てを包含するものであるとの立場をとる。

ベイカー (2013) は翻訳という行為を、「異なる言語・文化間でコミュニケーションを成功させようとする営為」と定義する。翻訳は言語的な行為だけでなく、文化的な行為、文化を横断するコミュニケーションの行為でもあると言える。また、平子 (1999) は翻訳を「意味の等価的伝達」と定義している。すると翻訳において意味とは何か、言語とは何かという言語学の根本的問題に直面するが、実際翻訳は単なる語彙の置き換えではなく、異なる二つの言語体系つまり文化の間のコミュニケーション、すなわち「異文化コミュニケーション」であると主張している。したがって、このコミュニケーションをうまく取るためにどのような翻訳理論をもとにし、つまりどのような翻訳方略を選ぶかがもっとも重要なことである。

Pym (2010) は「等価というのは、簡単にいえば、原文と翻訳で同等の意味を達成できるという考え方に近い」と主張する。これまでに、等価に基づいた翻訳に関する様々な研究が発表されており、その例として、Jakobson 1959; Catford 1965; Nida and Taber 1969; House 1977; Toury 1980; Baker 1992; Pym 1992; Koller 1995; Vinay and Darbelnet 1995 が挙げられる。

等価は様々なレベルで考えられるが、ベイカー (2013) によると、コラーは一般的にそれを 1. 指示的 (referential) 等価、2. コノテーション (connotative) 等価、3. テ

キスト規範 (text-normative) 等価、4. 語用論的 (pragmatic) 等価、5. 形式的 (formal) 等価という五つに分類している。

Nida (1964) は「翻訳とは受容言語において、起点言語のメッセージに最も近い自然な等価を生み出すことである」と主張しており、それを形式的等価 (formal equivalence) と動的等価 (dynamic equivalence) とに区別した。形式的等価はメッセージの形式と内容の両方に焦点を当てる。Nida は起点テキストに意識を集中させ、目標言語におけるメッセージをできる限り正確、ならびに妥当に起点言語のさまざまな要素に一致させるべきであると述べる (Nida and Taber 1969: 22-8)。Nida は翻訳の受容者とメッセージの関係は、原書の受容者とメッセージの間に存在した関係と実質的に同一のものとする。Nida が動的等価において重要視したのは起点言語のメッセージに対して最も密接で自然な等価を追求することである (Nida 1964: 166, Nida and Taber 1969: 12)。メッセージが受容者の言語的ニーズと文化的期待を満たした翻訳書を生み出さなければならない。したがって、表現の完全な自然さを狙い、「自然さ」は Nida にとって重要な要件である。目標言語には起点言語からの干渉の跡が見えてはならず、起点文化の異質性を最小限にとどめなければならない (Nida 1964a: 167-8)。

こうした見地からは、原文と翻訳文に対する読者の反応を等しくするために、翻訳文の読者の文化的なニーズや期待に合わせた自然な翻訳文を作り出さねばならない。斉藤 (2010) によると、Nida は布教を目的とする聖書翻訳者の立場から、翻訳聖書が読者に自然に読まれ、受け入れられることを重要視したと考えられる。したがって、Nida の主張する方略は、文学作品などの聖書以外のジャンルでの翻訳には必ずしも適用できるわけではないことに留意する必要があるだろう。

また、Newmark (1981) は翻訳理論における起点言語重視の翻訳および目標言語重視の翻訳の間のギャップを埋めるべく、意味重視の翻訳 (semantic translation) とコミュニケーション重視の翻訳 (communicative translation) という二つの方略を提唱している。ニューマークによると、意味重視の翻訳とは、目標言語の意味的・統語的構造に可能な限り近いかたちで、オリジナルの正確な文脈的意味を訳そうとすることである。コミュニケーション重視の翻訳とは、原文の読者が得た効果にできる限り近い効果を翻訳の読者に与えようとするものであり、Nida の動的等価と同じものであると思われる。

上記に概観した従来の翻訳理論における「等価」の定義や問題意識を念頭に置いた上で、本稿における「等価」概念の把握を以下に述べる。

等価理論においては、起点言語および目標言語が同一ではなく、価値が同等であると指摘されているが、意味的または統語的構造の異なる言語間において起点言語と目標言語が同一になりえない。同一ではあるが、等価な価値を持っていない翻訳においては文のメッセージが伝達されない恐れがある。したがって等価な翻訳を重視すべきである。

また、すでに述べたように翻訳におけるスタイルを守る必要もある。とりわけ、詩文の翻訳においては、内容とともに韻律にも注意を向け、詩文のスタイルで翻訳するのが最適であろう。等価は位置、価値、メッセージ、テキストの内容、あるいはスタイルの全てにあてはまるといえよう。メッセージが受容者の言語的ニーズと文化的期待を満たした翻訳書を生み出すべきであると Nida が述べるが、ニーズは受容者によって異なるため、文学作品などのジャンルの翻訳において起点文化の異質性を極めて小さくすることによって、逆に受容者の文化期待を裏切るのではないか。翻訳理論の分野では、受容化方略が評価される比率が高いと考えられる。しかし文学作品の分野においては、翻訳作品の読者は、自国の書物とは異なる雰囲気をもつ作品を読むことによって起点言語の文化等について知識を得ようとしていると思われる。そうでなければ、翻訳書ではなく、自国語の文学作品を読んだのであろう。したがって、受容化方略の限界を認識しておかねばならない。これが本論文の問題意識である。

2. 2. 翻訳方略

矢田 (2013) によると、「翻訳とは、二つの異なる文化と言語の間に立ち、文化や言語の違いから起こりえる解釈のずれが生じないように、目標言語で解読できるコードに再構築するものである」という考え方である (Guiraud, 2004:63-64) (矢田 2013)。この「コードの再構築」は、翻訳者が採択する「方略」によって形成されるもので、方略は目標言語文化におけるコードへの「変換方法」と考えられる。

矢田 (2013) は翻訳方略について以下のように説明する。

本来、言語と文化が異なる言語において「その意味」を通じさせる「術」であり、翻訳者が様々な要点を踏まえながら、意味を伝えるための「苦肉の策」として採られるものである。しかし、最善の翻訳を試みても目標言語に

においては翻訳者が望むようには認識されるとは限らない。その要因となるのが、言語差であり、文化差である。この言語差・文化差を超えてどのように意味が伝えられているのかを実際の字幕を分析することで、翻訳方略と意味の認識・理解の傾向を突き止めることができる。方略分析は、つまり、どのような「術」を用いているのかを定義するだけでなく、言語差や文化差を踏まえた上での「コミュニケーションとしての翻訳」を検証する為のものである。(矢田 2013:20)

言語差および文化差に起因し、たとえ最善の翻訳を行ったとしても、目標言語において翻訳者の期待通りの成果は得られない場合が多いと推定される。特に、頻繁に起こる「誤解が生じる」という問題を避けるべく、細心の注意を払うべきである。

篠原(2013)は訳出の過程で生じる問題に対処するための方法は頻繁に方略(strategies)と呼ばれるが、この用語は翻訳行為全体の様々なプロセスに関する説明にも使用されることがあると述べる(篠原 2013:83)。実際、現段階では翻訳方略に関する用語や区分は研究者によって異なり、「用語的な混乱状態 (terminological mess)」(Pym 2011: 92)にある。

Pym (2011) は方略を、翻訳の目的を達するための行為を系統立てる「マクロテキスト的な計画あるいは考え方 (macrotextual plans or mind-sets)」、すなわちテキスト全体を対象とした方策を指す用語として用い、翻訳の問題を解決に導く一連の行為には「手続き (procedures)」という語を当てている。翻訳方略に対して、術、手続き、狭義の翻訳における方策など様々な考え方がある。しかし、これとは対照的に、Pedersen (Pedersen 2011: 69-70) は狭義の翻訳における個々の方策を「方略」とし、テキスト全体の訳出志向に関するものには「方法 (method)」という語を当てている。前者のようにマクロテキスト的な視点で「方略」という語を使用する例としては、Venuti (1995) の論考がある。Venuti は翻訳者が自らの仕事に取り組む姿勢や目標に対して「方略」という語を用い、「異質化 (foreignization)」と「受容化 (domestication)」という方略を提案する。これに対して、後者のように「方略」を訳出における個々の方策とする考察には、Vinay & Darbelnet (Vinay & Darbelnet 1958) や Ayora (Ayora 1977) などがある。Venuti は全体的、すなわち大局的な視点に立つが、Vinay & Darbelnet は局所的な

観点から考えていると思われる。

2. 3. 受容化・異質化

目標言語重視翻訳が自然な翻訳文を生み出すことを目指す一方、シュライアーマハー (Friedrich Schleiermacher 2004) やヴェヌティ (Lawrence Venuti 1958/2000) は、非自然的な翻訳、つまり外国語の響きを残す方略を重視する。

Schleiermacher は、翻訳者には、「できるだけ著者を動かさずに読者を著者に近づけるか、それともできるだけ読者を動かさずに著者を読者に近づけるか」の二つの方略しかないと述べている (Schleiermacher 1992:41-2)。

金によると、Schleiermacher によって取り上げられたこの概念は Venuti (1995/2005) の主張する「翻訳者の不可視性 (invisibility of the translator) 」とともに発展したようである (金 2008:10)。こうした潮流に沿って、Venuti は Schleiermacher の論理を下敷きに、受容化翻訳 (domestication) と異質化翻訳 (foreignization) という二つの相反する翻訳方略を提案する。受容化方略は目標言語重視であり、異質化は起点言語重視の翻訳方略である (斉藤 2010:89, 90)。

金は Venuti の「domestication」自国化、そして「foreignization」異国化を以下のように定義する。

受容化翻訳とは、TT (Target Text)の読者には異国的で見慣れない ST (Source Text)の言語・文化的要素などを TT の文化と慣習に合わせて翻訳する方法で、TT の文化に親しい表現に書き換えたり、TT の言語慣行に合わせて書くことで、TT の異質感を最小限にして読者の理解を高める戦略である。これに対し、異質化翻訳とは、読者が TT を読むとき、それが TT であることがはっきり分かるようにし、TT の読者に ST の文化の異質感を感じさせるように訳す方法で、TT の文化の言語・テキスト的慣行に従わない不自然な訳や ST の文化をそのまま残すなど手法を用いて TT の異質感を最大化する戦略である (金 2008:10-11)。

Venuti は、この二つの概念を用いて、翻訳者の透明性 (invisibility) について論じる (Venuti 1995: 231)。受容化方略が用いられる場合、起点テキストの異質性は尊重されず、目標文化に馴染むような目標テキストが生み出される、こうして得られた翻訳テ

クストは翻訳作品であることが認識され難くなり、翻訳者は翻訳テキストの読者にとって透明性の高い存在となる。つまり、翻訳者の介在はその翻訳作品の制作において意識されにくくなる。一方、異質化方略が用いられた場合は、目標言語、また目標文化の規範から外れる訳出法が取られ、翻訳対象となる作品を選ぶ段階においても目標言語の文化が支配的である作品は通常好まれず、目標言語の文化による影響が排除された作品が選ばれる傾向がある。Venuti は、アングロ・アメリカの文学界においては支配的である受容化方略を批判し、代わりに異質化方略を取るべきだと述べ (Venuti 1995, p. 234-235)、自文化が排除してきた他文化の作品を選ぶことや、翻訳者が透明とならないような方略を取ることで、受容化方略に対抗しなくてはならないと主張する (Venuti 1995, p. 309)。

翻訳理論の分野では、受容化方略が評価される比率が高いと考えられる。しかし先述のとおり、文学作品の分野においては、翻訳作品を読む読者は自国の書物とは異なる雰囲気をもつ作品を読むことによって起点言語の文化等について知識を得ようとしていると思われる。そうでなければ、翻訳書ではなく、自国語の文学作品を読んだのであろう。そのため、Venuti が示す通りに異質化方略を採ることによって、読者の要望に沿う機会が与えられる。しかし、異質要素をそのまま目標言語に用いるのではなく、それに関する紹介や説明を加える必要があると思われる。

篠原は異質化と受容化という方略を訳出における個々の方策とする考察には、Vinay & Darbelnet (1958) や Ayora (1977) などがあると述べ、異文化要素を翻訳する方略として Vinay & Darbelnet (1958) が提案している方略を支持する (篠原 2013:83, 84)。斉藤 (2010:90) によると、Vinay & Darbelnet は、直訳によってよい翻訳が作り出されるが、直訳が構造的な理由などにより不可能な場合は、間接的翻訳の方略を採用すべきだと主張した。

2. 4. Vinay & Darbelnet による翻訳方略

翻訳作業においては、意味重視または形式重視のどちらかの一つにとどまらず、翻訳者は語の形式、句、文など様々なレベルや状況に応じて適切な手順を選ぶことになる。一つの文章を翻訳するには、多くの方略を組み合わせなければならず、単一の手順のみを一貫して用いて翻訳するのは不可能なことである。

翻訳の歴史においては、古代から既に逐語訳、または直訳に対する意識または自由訳という二つの概念から観た翻訳方略が考えられた。当時は *literal* および *free* という

翻訳の概念が研究者の関心を集めていた。現代になると、起点言語と目標言語のどちらかを重視するかという原理的な翻訳概念を提唱した翻訳学者が現われた。その中心的な研究者として Nida、Munday、Schleiermacher、Venuti が挙げられる。上述の通り、Venuti は受容化翻訳 (domestication) と異質化翻訳 (foreignization) に関して論証した。Venuti の全体的な翻訳方略に対して Vinay と Darbelnet は局所的な翻訳方略を提唱した。全体的な翻訳方略とは目標言語のテキストを重視するか軽視するのを選択するより一般的なレベルの翻訳方略である。これに対して、局所の方略とは主に言語構造や語彙項目に注目する翻訳方略である。

Vinay と Darbelnet が提案した翻訳方略はまず直接的翻訳および間接的翻訳の二つの大きな概念に分けられる。直接的翻訳とは逐語訳または直訳の系統に属し、間接的翻訳とは意味対応訳または自由訳の流れを汲むと考えられる。

全体的に Vinay & Darbelnet の翻訳方略は、人工的あるいは標識なものから漠然としてはいるが自然なものまで含み、自然な等価だけでなく、翻訳者が他の訳も創造する現実的な必要性をも視野に入れている。直接的な翻訳方略から間接的翻訳方略までを1番(借用)から7番(翻案)までとすれば、1番が最も直訳的で、7番は最も意識的な方略である。現在の翻訳においては、恐らく7番の方略が最も多用されていると考えれば、論理的にある程度の整合性が見られる。

Munday (2008: 56) によると、Vinay と Darbelnet が著した“*Stylistique comparée du Français et de l’anglais* (英仏比較文体論)” (1958/95) が示す分類は極めて広く影響を及ぼした古典的モデルである。

Vinay & Darbelnet による一般的な翻訳の方略は、直接的翻訳 (direct translation) と間接的翻訳 (oblique) という二つの概念である。直接的翻訳には「借用 (borrowing)」、「語義借用 (なぞり、calque)」、さらには「直訳 (literal translation)」が含まれる。間接的翻訳は Free translation に該当するものであり、「転移 (transposition)」、「調整 (modulation)」、「等価 (equivalence)」、「翻案 (adaptation)」からなるものである。

Vinay & Darbelnet が示した分類一覧に「省略」は含まれていないが、Bastin (George L. Bastin 1998) による受容化および異質化分類一覧における「omission」や、Aixela (Aixela, J.F 1996) による分類一覧における「deletion」を参考に、筆者は「省略」を本研究の分析方法の一部となる翻訳方略に加える。したがって本研究においてとられる分析翻訳方略は、ヴィネイとダルベルネによる7つの翻訳方略に、「省略」を加え合わせて8つの方略である。直接的翻訳は直訳に当てはまり、間接的翻訳は自由翻訳に

当てはまるとすると、直接的翻訳に含まれる方略は全体的なヴェヌティの異質化翻訳概念、また間接的翻訳に含まれる翻訳方略は受容化翻訳概念に適応できると考えられる。

2. 4. 1. 直接的翻訳

直接的翻訳には、起点言語と目標言語の間には、通常の翻訳手順では容易に埋めることのできない空白が生じることがある。これに対して、翻訳者がどう対応したらよいかのかが重要である。言語間で起こる構造的およびメタ言語的な並列性のために、起点言語のメッセージを1つ1つ目標言語に転置することによって、起点言語と目標言語との間におけるギャップ（または隙間）を克服することができる」と述べる。このような場合は、翻訳者は目標言語における隙間を意識した際、起点言語の意味を伝達するために、同一的なカテゴリーまたは同一的なコンセプトを使用することができる。これは、ヴィネイとダルベルネによる直接的な翻訳方略のいずれかによって実行できる。

直接的翻訳は以下の三つのカテゴリーに分けられる。

(1) 借用 (Borrowing)

通常はメタ言語的な空隙を克服するために、借用が最も簡単な翻訳方法である。起点言語 (Source Language、以下 SL) の文化的な雰囲気を導入するために、SL の言葉はそのまま直接的に目標言語 (Target Language) に転移される。これは新しい技術や未知の概念などを示す場合によく使われる手順である。

借用：

例 1. 英語：dollars, party

例 2. 日本語：Sashimi, tsunami

例 3. ペルシア語：bāzār, kāravān

古くから借用されてきた結果定着したいくつかの言葉は、あまりにも広く使用されてきたため、目標言語の独自の言葉と思われるようになってきた。その例として、英語における「menu」、「carburetor」、「hanger」、「chic」という言葉が挙げられる。

(2) なぞりー語義借用 (Calque)

これは起点言語の表現や構造がそのまま転移され、要素が文字通りに翻訳される特殊なタイプの借用と言われる。

例 4. 英語の「airport」は日本語で「空港」と言われる。

フランス語の「Pomme de terre」(土のリンゴ=ジャガイモ)はペルシア語で「sīb-zamīnī」(土のリンゴ)となる。借用と同様に、長期間にわたって使用された結果固定した語義借用は目標言語の不可欠の一部となる。

(3) 直訳 (Literal translation)

直訳には様々な意味がある。一つは「意識」と対比的な意味で用いられる。すなわち、外国語の原文におけるそれぞれの単語や語句、またそれぞれの語法をそのまま忠実に翻訳することである。より詳細に述べれば、それぞれの単語などを辞書に掲載されたまま使用して逐次的に置き換え、語法の場合も目標言語の性質を無視し起点言語のそれを放置する翻訳の一種である。こうした手法は「逐語」訳(「word-for-word translation」とも呼ばれる。基本的に、原文の単語と直訳の語とは文法または慣用上に一对一の対応関係を忠実に守る。比較的単純な逐語訳を意味する直訳は、同系の言語の間では可能である。しかし、語彙、語法、統語法等は似ている言語同士においても、数多くの単語が異なる機能を持つため、直訳が使用できないケースも多い。

この対応関係は可逆的であり、それ自体で完結するため、根源的な意味では唯一の解である。言い換えれば、目標言語から訳しても起点言語と同じ訳文ができるはずである。Vinay & Darbelnet はフランス語とイタリア語のような同じ系統と文化に属する言語間の翻訳においては、直訳が最も一般的なものであると述べている。

日本語の文構造とペルシア語の文構造はともに SOV であるため、単文の場合は、少なくとも統語法上は直訳が可能かと思われるが、形容詞や接続詞などの場合は逆順になるので、以下の例に示すように、実際には直訳は適用できない。さらに両文化の大きな差異が直訳をほぼ不可能にしている。

単文の直訳：

例 4. 日本語：彼 は 先生 です。

ペルシア語： u ... ostād ast.

例 5. 日本語： 昼ごはん を 食べた。

ペルシア語： nāhār rā xordam.

修飾語を含む文の直訳：

例 6. 日本語： 黒いマーカーをカバンの中に入れた

ペルシア語： māžīk-e siāh rā dar dāxel-e kīf-am

マーカー.EZ 黒い POSTP.を に/で PREP 中.EZ カバン.PRON.SUF.1SG

gozāštam.

入れる.IND.PAST.1SG

➤ 黒いマーカーを私のカバンの中に入れた。

2. 4. 2. 間接翻訳

直訳が不可能なケースでは、間接的翻訳の方略を取るべきである。言語間の構造的およびメタ言語的な相違のために、対象言語における語彙または構文的順序を混乱させることなく、特定の文体的な効果は得られない。そのような場合は、起点言語のテキストの意味を伝達するために、より複雑な方法を使用しなければならない。ざっと目を通す所では、見た目はかなり洗練されており、また異常のように見えるかもしれないが、間接的な翻訳方略を使用することにより翻訳者は自らの努力の確実性を厳密に規制しうる。

(4) 転移 (Transposition)

転移とはテキストのメッセージ内容の意味を変えずに、単語の類別を置き換えることであり、文法上の分類においても転位が生じるケースもある。転移は翻訳だけではなく、一つの言語内においても使用される。例えば、従属動詞は名詞に転移される場合もある。以下の文句は単語の類別が異なっているが、内容の意味は同じである。

起点語から目標言語への転移：

英語：

例 7. I like reading books.

I like to read books.

日本語：

例 8. 本を読むことが好きです。

本を読むのを好む。

同一言語内における転移：

英語の場合：

例 9. As soon as he comes back

After his return

日本語の場合：

例 10. 家に帰った後に

帰宅後に

転移には、「義務的翻訳」と「選択的な翻訳」との二つがある。

(5) 調整 (Modulation)

調整とは、起点言語における視点の変更によって、目標言語における意味の形式が変更されることであり、様々な言語的慣用を調整すると言われる。

調整：

例 11. 日本語：「いただきます」と言って昼ご飯を食べ始めた。

英語：I said “thanks” and started eating lunch.

例 12. 日本語：嫌なら、やらないでください。

ペルシア語：agar dust nadārī, anjām nade.

もし 好む.NEG.IND.PRES.2SG やる.NEG.IND.INT.2SG

➤ 好きじゃないなら、やらないで。

転移と同様に、調整も、「義務的調整 (obligatory modulation)」と「選択的調整 (optional modulation)」に分けられている。

(6) 等価 (Equivalence)

同じ状況が、異なる言語間ではまったく異なった文体的や構造的な手段によって記述されることを等価という。また、Nidaによる、語順や文法などの形式と内容との両面において、メッセージ自体に注意を集中する逐語訳に対し、翻訳の受容者とメッセージの関係が原文の受容者とメッセージの間に存在した関係と実質的に同一でなければならない意識のことを指摘する。すなわち、目標言語における意味の再現を重視するということで、目標言語の意味的また統語的構造に可能な限り近い形で、文脈の意味を正確に写し取ることである。

等価は様々な語彙等、特に擬音語・擬態語、イディオム、ことわざや可能句などの翻訳に有用である。

等価：

例 13. 日本語：コケコッコ

英語：doodle-do

ペルシア語：ququlī ququ

例 14. 日本語：ニャー

英語：miew

ペルシア語：myaw

例 15. 日本語：時は金なり

英語：Time is money.

ペルシア語：vaqt talā-st.

時 金-COP.IND.PRES.3SG

➤ 時はゴールドである。

例 16. 日本語：弘法筆を選ばず

英語：A bad carpenter quarrels with his tools.

ペルシア語：

arus	balad nīst	beraqse
花嫁	できる.口語.NEG.IND.PRES.3SG	踊る.口語.IND.SUBJ.PRES.3SG
mīge	zamīn	kaj-e.
言う.口語.IND.PRES.3SG	地面	曲がった ADJ-COP.IND.PRES.3SG.口語

➤ 花嫁は踊ることができないけど、地面が曲がっていると言う。

(花嫁は踊れないのを地面が曲がっているせいにする。)

(7) 翻案 (Adaptation)

起点言語のある単語や語句などが目標言語に存在しない場合や、また起点文化が目標文化にとって未知な場合は、文化的に同じ価値のある状況を生み出さないとはいけない。

翻案は、概ね等価である文化的機能を持つ、異なった事柄を利用する。例えばフランスにおける人気のスポーツ「cyclism(自転車競技)」はイギリスでは「cricket(クリケット)」、アメリカでは「baseball(野球)」に相当するようである。

翻案：

例 17. 日本語：村から一里の距離に果樹園がある。

英語：There is an orchard at a distance of 1 ri from the village.

ペルシア語：	bāq	dar	masāfat-e	hodud-e	1/6 kīlumetrī
	果樹園	PREP	距離.EZ	ほぼ.EZ	1.6 キロメートル
	az	rustā	vojud dārad.		
	から PREP	村	存在する.IND.PRES.3SG		

➤ 果樹園は村からほぼ 1.6 キロメートルの距離にある。

「一里」は日本古代の条里制における距離を示す単位であり、ペルシア語に存在しない単位である。1 マイルは米英における陸上の距離であって、正確に 1609.344 メートルを指し、一里 (～ 3.93km) に相当ではない。しかしながら、目標言語ではイメー

ジしやすいことになる。

2. 5. デノテーションおよびコノテーション

本稿では、考察の対象（すなわち、SL から EL を経て PL に重訳されている例文）、
について、デノテーション（denotation）の伝達の成否、ならびにコノテーション
（connotation）の伝達の成否の視点から分析を行う。ただし敬語表現だけについて
は、敬語は文脈に関わらず一定の意味を有するため、それをコノテーションとして扱
うのは適切ではないと思われ、上記から除外した。

デノテーションおよびコノテーションに関しては、まずその意味を確認する。

フランスの記号学者バルト（Barthes 1972）は、デノテーションとコノテーションを
以下のように定義している。記号は表面的に表れた明示的な意味（デノテーション）
と、内示的に示された意味、文化的な意味（コノテーション）を有する。言い換えれ
ば、デノテーションとは、辞書に示されているような、ただちに明確に意味が分かる
メッセージを指すことに対して、コノテーションはその文化を知らないと解読できな
いようなメッセージも含んだ内示的、文化的、派生的な意味を表す。

デノテーションおよびコノテーションの用法、また概念は人によって様々である
が、概略を述べれば、デノテーションは、中心的意味、客観的意味、指示的意味、外
延、外示と理解されている一方、コノテーションは、文化、社会または個人によって
異なる補足的価値と考えられている（木藤 1991:1）。上記の定義や説明が示すように、
デノテーションおよびコノテーションは、一体となって言語の意味を形成している。

本稿においては、デノテーション（すなわち、文字通りの意味、外示、普遍的な意
味、顕在的な意味、明示など）を意味している記号、およびコノテーション（すなわ
ち、言外の意味、語感、共示、含意、内包、内示的な意味、潜在的な意味、また暗示
など）を表す記号を取り上げ、それぞれの例文を「D： デノテーションが伝達されて
いるか否か」、「C: コノテーションが伝達されているか否か」という二つのファクター
に基づいて分類する。これにより、全ての例文を以下の4パターンに当てはめること
ができる。

1. D: ○ C: ○

2. D: ○ C: ×

3.D: × C: ×

4.D: × C: ○

上記の各パターンは、次のように説明できる。1の場合は、デノテーションとコノテーションの両方が伝達され、原文のメッセージが適切に伝達された。2の場合は、デノテーションは伝達されたが、コノテーションが伝達されなかった。3の場合は、デノテーションおよびコノテーションが両方とも伝達されず、原文のメッセージは全く伝えられなかった。そして4では、デノテーションは伝達されなかったが、コノテーションが伝達されたというケースで、一般的には存在しない組み合わせと思われるが、場合によってありうるのではないかと想定し、分析パターンに加えた。

このように、コノテーションは2および3の両方において伝達されていないこととなる。バルトが指摘しているように、コノテーションの作用が決定的に重要である文学作品（例えば小説）という領域では、そこに語られている行為や出来事がなんらかの高次の意味を発生させないかぎり、作品の言語的価値はほとんど無である。したがって、2ならびに3のパターンのように、デノテーションが伝達されたか否かにはかわからず、コノテーションが伝達されなかった場合には、原文のメッセージが伝達されなかったと捉えてもいいと考えられる。

翻訳においては、デノテーションについては一対一の対応が成立するとしても、コノテーションによって一対部分の対応や部分対部分の対応になりがちである。またある言語の文体に特徴的なコノテーションは、別の言語と一対一には対応しないため、翻訳者はテキストレベルでコノテーションに最適に対応する言語、文体の可能性を実現しなければならない（木藤 1991:17）。そのため、原文のメッセージを正しく伝えるためには、翻訳者はデノテーションとコノテーションの双方を伝達することは当然ながら、デノテーションを正確に伝えたいうえで、さらにコノテーションに焦点を当て適切に翻訳するように心がけるべきである。

2. 6. イランにおける翻訳の歴史

翻訳は、二つの異なる形式における二つの概念ベースの間の架け橋となるだけでなく、科学や芸術も捉えられる。優れた翻訳では、目標言語において起点言語に対する最も相当な概念を適用することである。

Azerang (2015) は、イランにおける翻訳の歴史的経緯を以下のように述べる。イラ

ンにおける翻訳の起源は紀元前の 2000 年代にアリア民族がイランのナジュド³高原に入った時点にさかのぼると言われる。紀元前 1000 年代から 700 年代の間にはメディア人およびペルシア人がイランの西部に居住し始めた。メディア人は、アッシリアという侵略帝国と対立し、彼らを消滅させるために、言葉が異なる近隣の国々と交流し始めた。紀元前 559 年にアケメネス朝時代が始まり、多様な言語を使用する様々な国民や民族を統合した帝国を発展させる時期が始まった。

紀元前 600 年代に政治に関する書類などの公文書を記録するため、アケメネス帝国が三言語よりなる標準語を制定した。

紀元前 521 年にダレイオス 1 世がアケメネス朝ペルシアの王に就任したことを記念して建立された、ビーソトゥーン⁴碑文には、彼の戦いの物語がアラム語、バビロニア語および古代ペルシア語の三言語を用いて約 1200 行にわたって刻まれている。

この碑文は古代ペルシア語の現存する最古の碑文であり、最も歴史のある翻訳文である (Azerang 2015:359)。アケメネス朝時代には、標準語が一つではなく、二つか三つの場合が多かったようである。碑文に刻まれている三言語が全て同じ時期に刻まれたとすれば、それらは翻訳されたものではなく、その時代に全国的に使用されていた三言語が並記されたものと認められる。しかし調査の結果、実際にはこれらの三言語が彫刻された時期が異なることが判明した。したがって、これらの三言語のうちの一つが起点言語であり、残りの二言語は翻訳であると推定される。また、彫刻された時代が同一ではないため、第三の言語は第二の言語を経て翻訳された、すなわち重訳された可能性が高いと思われる。

641 年 (陰暦 21 年) にササン朝は敗北を認め、侵略してきたアラブ人に支配されることになった。743 年 (陰暦 125 年) 以後はそれまで法廷で使用された言葉が廃止され、宮廷の使用言語はアラビア語に変わった。7-8 世紀において、アラビア語を始め、以前の使用言語であるヨーロッパの言語、中国語やヒンディ語などの起点言語からアラビア語に翻訳された多くの文書などが、改めてペルシア語に翻訳された (Azerang 2015: 362- 363)。上述の通り、イランにおいては、古代から重訳がなされており、特にササン朝時代には新しい帝国が創設され、権力を握った。こうした状況下において、まわりの国々と交流を深めるため、また国の政治や科学的な発展などのため翻訳が栄えたと言える (Azerang 2015:12)。

³ Najd

⁴ Bisotun という世界文化遺産

アラブ人が征服した領域において統治が安定した後、アラビア語は支配的な地位を獲得し、宮廷や政治の場のみならず文化、科学あるいは商業等においても使用される言語となった。その結果、ササン朝時代において広く使用されたパフラヴィー語⁵はアラビア語への交代を余儀なくされた。すなわちそれまでは、限られた地域や部族にしか使用されなかったアラビア語が、突然征服された領域で使用されることになったのである (Azerang 2015: 92,93)。その時期に、多くのインドの文学作品がアラビア語に翻訳された。しかし、それは原語のサンスクリット語からではなく、パフラヴィー語訳から翻訳された。ギリシャ語、またラテン語の作品も直接アラビア語に翻訳されたのではなく、パフラヴィー語を経由して、アラビア語に翻訳された (Azerang 2015: 96)。このように、この地域では、当時は媒介言語からの重訳作品が圧倒的に多く、文化や科学等の伝達に重要な役割を果たしていたことが明らかである。その中でも、**Kalileh o Demneh** (カリーレ・オ・デムネ) は名作として世界中に知られている。紀元前3世紀頃に作られたと言われる原作の **Panchatantra** (パンチャタントラ) は、西暦570年にパフラヴィー語に翻訳され、750年にペルシア人のアブドッラーヘブネモガッファによってアラビア語に翻訳され、6世紀においてはペルシア語に翻訳された (Azerang 2015:70-71)。このようにイラン (当時はペルシアと呼ばれていた) においては、はるかに昔から翻訳が行われており、その中でも重訳が圧倒的な比率を占めていたと言えよう。

一方、日本語とペルシア語間の翻訳の起源については、記録が定かではない。両国の交流は約136年前にさかのぼる。当時、農商大臣である佐野常民はアジアに位置している国々、特にイランと商業的な関係を深めようとの意向を有した。それにしたがって、両国間に通商協定を結ぶ機運が生まれ、交易の準備として、まずは商況調査のための使節団が日本からイランに向けて派遣された。特使に選ばれた外務省御用掛の吉田正春を団長とする使節団として、参謀本部から派遣された古川宣譽、また英語が堪能な大倉組副社長の横山孫一郎など、7名の使節が任命された。彼らは1880年に、インド洋での演習に向かう軍艦「比叡」でイランに向かい、テヘランでペルシア国王ナーセロッディン・シャーと面会した。その後、国王ナーセロッディン・シャーも日本を訪ねた (Rajabzadeh 他 2005: 1-2)。上記のように、イラン側と日本側が交流するために用いられたのは日本語でもペルシア語でもなく媒介言語の英語であり、横山は

⁵ 中世ペルシア語の一種 (middle Persian)

そのために同行したようである。1925年にイラン在日領事館が創立され、1929年に日本の特命全権大使、カザマ・アキオ（風間昭夫）がイランを訪ねた（Rajabzadeh 他 2005）。当時は、イランでは第二外国語としてフランス語が流行していた時期であったため、通訳はフランス人が務めたようである。上記のように、この時点までのイランと日本との交流においては、起点言語と目標言語の間に媒介言語が存在しており通訳がリレー⁶通訳という形でなされたことが明らかである。

2. 6. 1. 文学への影響

1906年から1911年にかけて勃発した立憲革命をきっかけに、イランではそれ以前は歴史、政治や哲学の作品に限られていた翻訳対象の範囲が、アートや文学作品にまで広がった。その結果、立憲文学と呼ばれるヨーロッパ近代思想の自由主義や民族主義等を基に形成された文学が普及した。こうした立憲文学は、単純な文章により構成されることを特徴とし、それ以前には新聞や雑誌また欧文の翻訳において使用されてきた詩や韻文よりも話し言葉を含んだ散文が隆盛となった。

このような社会の激しい変化の結果、宮殿で使用されていた難解な文学は一般の国民によって使用される口語文学に変化した。

2. 6. 2. ペルシア語における言語の変更

翻訳がイランに導入されたことによって、新たな文学的な言語が創造されたのは最も注目に値する。翻訳によって、小説などがペルシア語で読まれるようになり、それにつれて翻訳作品だけではなく、イラン人の文学者や作家などが西洋的な小説をペルシア語で執筆し始めた。

イラン人の作家は、最初は西洋の言語から翻訳された小説などの構造を取り入れて自分の小説を書いたが、それでもイランの伝統的なストーリーの雰囲気は流れている。

2. 5. 3. ペルシア語・日本語間における翻訳の問題点

ここでは2017年5月8日にテヘラン大学外国語・文学学部において開かれた「ペルシア語・日本語間における翻訳の問題点」という講義において、ペルシア語・ペルシ

⁶ Relay

ア文学の研究者、イラン学者、翻訳者である岡田恵美氏が取り上げたペルシア語および日本語の間において生じる翻訳の問題点について論じる。

岡田は「どの言葉の翻訳においても問題が生じ、私が専門としているペルシア語の古典文学で非常に難しかったのは様々な言語表現の翻訳であった」と述べた。またそれを具体的に示すために、岡田氏は次の二つの事例を挙げて説明を加えた。

1. 「kafe daste pādešah mesl-e abr-e bārān ast」という文は直訳が「王の掌はまるで雨雲のようだ。」すなわち、「王様は祝福、または褒美を与える人だ」という意味である。ペルシア語では、雨雲は恵みだと考えられる。しかし、日本人にとって雨雲は恵みではなく災害である。そのため上記の意味はイラン人にとって分かりやすいが、日本人はこれが理解できない。このように、表現や詩を翻訳するのは難しい。特に詩の場合には、その意味を理解させるために、読者が分かるように翻訳し、それを説明しようとしたら、詩の韻律が壊れてしまう問題が生じる。

2. 「Bā dast-e xanjar (刀のような手)」という表現は太陽に対して使用される。イランにおいては太陽の光はとても強いため、両手に刀を持っているというイメージがあるが、そのまま日本語に翻訳すると分かりづらい。なぜなら、日本においては、太陽は母に例えられるような優しいイメージで捉えられており、上記の意味とは結びつかないためである (岡田 2017)。

同様の問題は、詩文だけではなく、韻文などが日本語からペルシア語に翻訳される場合も生じる。例えば日本語には存在するがペルシア語には存在しない「障子」という文化要素、または「いただきます」や「よろしく申し上げます」と言った挨拶の言葉などの翻訳は難しい。特に重訳の場合、例えば、日本語における「炬燵」という文化要素は英語圏に存在しないため「stove」と翻訳されてしまい、「炬燵」に相当するペルシア語が存在しているにもかかわらず、そのまま「boxāri (暖房)」と翻訳されるといった問題が生じる。敬語表現における重訳も同様であり、ペルシア語には日本語の敬語に当たる表現が存在するにもかかわらず、英語を経たために消失してしまう事態が見られる。当然ながら、言語の翻訳において起点言語ならびに目標言語における知識は不可欠である。重訳の場合は、第二目標言語への翻訳者に原語、すなわち第一起点言語の知識がない場合が多いため、得られた翻訳書に誤解が生じる可能性が

さらに高い。

これについて岡田氏は以下のように主張した。

イランという国をよく知らないと翻訳はとても困難である。言語の背景には大変多くのエリアがあるため、そのエリアをよく理解しないままに、言葉を言葉に写すだけでは翻訳にはならない。言葉の背後に潜んでいる要素として、気候、社会、感情や政治に関わるものを挙げられる。一つの言葉には非常に大きなエリアが存在しているため、翻訳をする時によく考えて、翻訳すべきである（岡田 2017）。

翻訳とは単なることばの置き換えではなく、文法構造等のみならず、岡田氏が述べたように、ことばの背後に潜んでいる様々な要素を知らなければ難しい。特に岡田氏が主張したのは、「詩を詩に翻訳する」ということであった。日本語における詩はペルシア語程の詩ほどは豊かで複雑ではないが、とにかく詩を翻訳するのは難しいと思われる。例えば俳句を詩の形でペルシア語に翻訳する場合は、韻律を守るべきである。また、俳句において使用される季節のことば等は、日本の文化においては知られているが、そのままペルシア語に翻訳される場合は分かりにくいので、説明が必要となる場合が多いと思われる。もちろん岡田氏が示すように、「日本語およびペルシア語の間には同様な感情が存在する場合もあれば、しない場合もある。『Del be del rāh dārad』というペルシア語の諺は、直訳すれば『心と心の間に道がある』、すなわち『以心伝心』に相当する。」

岡田氏はもう一つの諺を例として挙げ、「『pā ro be andāze-ye gelīm derāz kardan』というペルシア語の諺は『絨毯の長さだけ足を伸ばす』、すなわち『分を知りなさい』という日本語の表現になる。それを意識するのはとても重要なことである」と主張した。

また、岡田氏はイラン人の特徴として、「長く、たくさんしゃべる」といことを挙げ、「言葉が非常に短く、少ない」日本人と比較した。岡田氏によると、イラン文学の中で特に日本人が好きなのはルバイヤートであり、その理由として、短くて分かりやすいことが挙げられる。修飾語や比喩が少ないルバイヤートの詩は 20 世紀に英語を経由して日本語に訳されたが、現在の日本において広く愛されているようだ。岡田氏は明確に説明するために、ルバイヤートの詩の一例を挙げ、次のような日本語の訳を加えた。

Gar bāde xorī to bā xeradmandān xor

Yā bā sanamī lāle roxi xandān xor

besyār maxor verd makon fāš masāz

kam kam xor andak xor penhān xor.

もしお酒を飲むならば賢い人（賢人）と飲みなさい

そうでなければチューリップの頬をしたかわいい女の子と飲みなさい

たくさん飲んではいけない、習慣になっではいけない、人に分かる程飲んではいけない

少し飲みなさい、ソーッと飲みなさい、隠れて飲みなさい

岡田氏はルバイヤートについて以下のように説明した。

ルバイヤートの詩はハーフェズやサアディの詩のように比喩、またはメタファーがなく、短く分かりやすい。ルバイヤートのこの特徴は日本の詩である俳句や短歌に類似している（岡田 2017）。

上記の説明によると、ペルシア語の詩においては比喩、またはメタファーなど母国語者にとっても分かりにくいところがきわめて数多くあるため、翻訳するのは難しいと思われる。

岡田氏は異文化要素を翻訳する方略の一つとして「文中では言葉の説明は最小限にとどめ、脚注にその説明を加える。特に、詩の場合は、文中の説明が長くなると、詩の韻律が壊れてしまうので、詩の翻訳はさらに大変である。」と説明した。

また岡田氏は翻訳および翻訳方法を以下のように説明した。

翻訳とは単にある言葉から別の言葉への変換ではなく、適切な翻訳を行うためには、言語また言葉の背景を理解することがもっとも重要である。

言語の背景を知るために、該当する地域に根を下ろして住まい、色々な社会階級の人と会うことが重要である。住んでみれば、気候と文化なども分かるようになる。イランの乾燥と日本の乾燥とは異なることは、実際に住んでみないと分からない（岡田 2017）。

岡田氏自身はイランの女性の生活を知るため、女性に関する詩を翻訳し始めたと指摘述べた。すなわち、岡田氏はニザーミーの『ホスローとシーリーン』を1977年、ニザーミーの『ライラとマジヌーン』を1981年、グルガーニーの『ヴィースとラーミン ペルシアの恋の物語』を1990年に翻訳した。

岡田氏による上述の指摘は、日本語からペルシア語の翻訳の場合にも当てはまる。岡田氏は「イランにある日本語からの翻訳は99パーセントが間接的な翻訳である。つまり英語やフランス語、一部はロシア語から翻訳されたが、そのような翻訳の特徴は何でしょうか。」と質問された際、以下のように返答した。

日本語の文学においては、特別な意味を有する言葉が多く、日本に特有の色合いを帯びていると言われる。もちろん、原文の日本語で読むことが理想的であるが、読者は日本語が理解できないため、その翻訳を読まなければならない。間接的な翻訳によっては、原文が多少変わってしまうので、直接日本語から翻訳すべきである。日本語には文字に特有の特徴や漢字の持つ意味など、言語としての独自の色彩が存在するが、間接的な翻訳を経ると、こうした色彩が消えてしまう（岡田 2017）。

また、岡田氏は日本語・ペルシア語の翻訳について、「イラン人と日本人の間には精神性が深いという共通点があるため、直接的な翻訳が分かりやすく成功を収める。川端康成や谷崎純一郎の著書は神秘性を秘めているため、ペルシア語への翻訳に適している」と付け加えた。

上述の岡田氏の指摘どおり、詩などの翻訳はとりわけ困難であり、言葉の背景、すなわち文化を知らなければ無理である。したがって重訳には多くの問題点が伴うため、直接的翻訳がより好まれるようである。こうした状況下において、本稿では重訳によって具体的にどのような問題が生じるかの解明を目指す。

2. 6. 4. ペ・日、日・ペ 現代ペルシア語辞典における問題点

日本語からペルシア語、ならびにペルシア語から日本語への翻訳の際最も使用され、最も翻訳に影響を与えるペルシア語・日本語、日本語・ペルシア語現代ペルシア

語辞典は黒柳恒夫によって執筆された『ペルシア語・日本語、日本語・ペルシア語現代ペルシア語辞典（合体）』（1925-2014）である。本節ではこの辞典をとりあげ、Hosseini (2017) による考察ならびに評価に基づいて、その問題点について論じたうえで、日本語・ペルシア語間の翻訳において辞典が果たす役割と重訳との関連について論じる。

この辞典は『現代ペルシア語辞典』と『日本語ペルシア語辞典』の合体・縮刷版である。黒柳は、本辞典は「ペルシア語・日本語」「日本語・ペルシア語」の合体ポケット版というかつてあまり例を見ない体裁をとると主張する。この辞典はイランにおいて最も広く使用される日本語・ペルシア語、ペルシア語・日本語の辞典として知られている。

Hosseini (2017)が挙げるこの辞典の問題点の中で、本研究に関連する点として以下の(1)から(6)を紹介する。

(1)日本におけるペルシア語学習者などを対象にし、彼らの要求に応じることを主目的とするため、イラン人の日本語学習者にとって使い難い点がある (2017: 99)。

(2)漢字の正字法に関して全ての種類が記載されていない場合が多い。例えば「すべて」という言葉について、日本語の辞典では「全て」、「凡て」、「総べて」、「統べて」という漢字が記載されているのに対して、この辞典には「凡て」しか記載されていない (2017:103)。

(3)見出し語について、質的ならびに量的の両面からの問題点が多い。日本語の見出し語が、ペルシア語の見出し語に比べて30%少ない。また、それぞれの見出し語の発音表記、品詞、基幹、スタイル使用に関する情報の記載がない。日本語の辞典等に漢字を読みやすくしてするために用いられている振り仮名が、この辞典では使用されていないため、漢字の発音を知らない場合は、語彙を調べるのは大変である (2017: 104)。

(4)見出し語は数が少ないだけでなく、その選択基準も不明である。記載されていない見出し語⁷については、特別な基準にしたがって記載されなかったのか、単に抜け落ちたのか判断できない (2017:105)。一例をあげれば、イランの州名は三分の一しか記載されず、日本の地名は東京しか記載されていないことが分かった (2017:105)。

さらに、ペルシア語・日本語の双方において、見出し語に対する訳語や意味がふさわ

⁷ 専門用語、一般用語など

しくない場合が多い。例えば、ペルシア語で *xarčosāne* という悪臭を放つ虫について、ゴキブリという日本語が充てられているが、それに相当する語はカメムシであり、ゴキブリはペルシア語の *susk-e garmābe* に相当する。また、日本語辞典にカメムシという見出しが存在せずに、ゴキブリの訳語として *susk-e garmābe* が使用されている。また、ココ椰子に対して *nārgīl* が使用されているが、*nārgīl* とはココナツであり、ココ椰子は *deraxt-e nārgīl* (ココナツの木) に相当する。さらに、対応する語彙が存在するにもかかわらず、新しい語がつけられている場合もある (2017:211)。このように、見出し語に対する説明において、イディオムや比喩的な意味を含めた総合的な配慮がなされていないようである (2017:111)。

(5)語彙の選択などに関する情報が与えられていない。また、見出し語の整合性のある決定基準が存在しない。この辞典は、単に先行する辞書や著者のメモ等を合体させたものにすぎないのではないかとの疑問が持たれる (2017: 105)。

(6)発音表記に一貫性が見られず、また日本語辞典において語彙に音節の強勢がついていない (2017:116)。

現在入手可能な日本語・ペルシア語辞典の中では、この辞典は見出し語数が多く、比較的正確な訳語が掲載され、また多くの言語学的な情報などが得られ有益であるため、現在まで最も正確なペルシア語・日本語、日本語・ペルシア語の辞典としてイラン国内において使用されてきた。しかし上述のように、日本人学習者のニーズに合わせてつくられたため、イラン人学習者らにとっては使用しにくい。また、この辞典は辞典編集の新技术ではなく伝統的な手法を用いて編集された結果、上記の問題点(1)から(6)が不可避免的に生じた。Hosseini (2017:119) が指摘するように、両言語の専門家の協力や、最新の編集技術の導入によってさらに正確な辞典が作成されることが強く望まれる。

現時点では日本語ペルシア語、ペルシア語日本語の電子辞書はなく、また市販されている紙の辞典も上記のように完璧ではない。したがって、日本語・ペルシア語間における翻訳に際しては、日本語・英語辞典、英語・ペルシア語辞典、またペルシア語・英語辞典および英語・日本語辞典を使用するのが一般的である。筆者もこうした方法を用いることが多く、それに加えて例文や日本語・日本語の辞典を併用する。こうした点を考慮すると、日本語からペルシア語への翻訳の過程においては、たとえ一見すると直接翻訳であるかのように見える場合においても、その過程ではそもそも英

語を経由する重訳の手法が採られてきたとも言えよう。

2. 7. 重訳

「重訳」とは原文を翻訳した外国語の文をさらに別の言語に翻訳することである。日本語の「重訳」という語には「訳を重ねる」というイメージがある。フランス語においては「la double traduction」すなわち重ねられた訳と呼ばれ、意味的に日本語と類似している。ドイツ語の重訳に相当する言葉は「eine Übersetzung aus zweiter Hand」であるが、それは「間接的な翻訳」というニュアンスがある。しかし、英語の「retranslation」や中国の「再訳」という表現には「重訳」以外にも元の言語に戻す「反訳」、または翻訳し直すことも含まれ、「重訳」のみを意味する言葉は見当たらない(齋藤 2010:175)。ペルシア語の場合は、「重訳」に相当する過程は「tarjome az zabān-e vāsete」と言われ、「媒介言語から翻訳すること」と理解されている。齋藤(2010)は重訳を以下の通りに定義する。

重訳は「オリジナル」から遠く、誤解や間違いをより引き起こしやすい点で情報という面からはマイナスの影響があるが、そうであるからこそ、翻訳され、さらに翻訳され、あるいはさらにもう一度翻訳され、他言語が重なり合う過程で、自己から飛躍できる可能性が増える。重訳は作者自身にも何が起こるか分からない冒険なのだ。またそれは「言語が一つの意味と結びついている」という幻想を揺るがせる(齋藤 2010:172)。

グエン(2013)は、「重訳」、または間接翻訳(Indirect translation)とは、翻訳されたテキストのさらに別の言語への翻訳であると定義し「学術的に無視されてきたが、近年重訳は注目を浴びる領域になりつつある」(グエン 2013:79)と述べている。

重訳によって生じる問題については、齋藤(2010)が次のように述べている。

重訳は決して生産的な翻訳研究から除外されるものではない。重訳されたために、抜け落ちたものだけではなく、新たに生み出されたものもあるのに比べて、その間にあった翻訳のテキストが明示されていない、あるいは複数ある等、突き止めにくいことにある(齋藤 2010:162)。

ベイカー (2013) は齋藤 (2010) と同様に、重訳とは、翻訳された訳文を別の言語に翻訳することであるが、時には再翻訳の一部とみなされる場合もあると述べている。Dollerup (2000) は重訳をさらに間接翻訳 (indirect translation) と補助翻訳 (support translation) とに区別することを提案した。彼は、間接翻訳は出版目的ではなく次の翻訳の足掛かりでしかないとし、一方補助翻訳を新たに翻訳する際に既訳を参考にすることであると、後者は再翻訳である点が前者と相違すると述べている (ベイカー 2013:180)。

同氏は、重訳の歴史に関して以下のように述べる。

重訳の歴史とは、文化の伝播の歴史であり、時空を経た異文化交流の歴史そのものである。仏教も、サンスクリット語から漢語を経て日本へと伝わった。ギリシャ文化もまたアラビア語に保存されてルネサンスへと続いていく (ベイカー 2013:180)。

文学的交流を特に歴史的に考察するには、重訳という手段抜きには考えられない Ringmar (op.cit: 4)。同様の視点から、「翻訳史を理解するためには、直接翻訳だけではなく、歴史の長い重訳を無視していけず、かつてのベトナムと日本の繋がりが薄い文化また、言語の間でも交流を始めることが出来たのは重訳のためであった」とグエン (2013:80) が述べている。

ただし、翻訳学の分野においては重訳に関する研究は稀である。その数少ない例としては、21世紀に入り、He (2004) と Zilberdik (2004) によってなされた二つの調査が挙げられる。この調査では、重訳がせいぜいのところ必要悪にすぎないというステレオタイプな考えに沿って、重訳に含まれる問題と誤訳を減少させる方法に焦点を当てている (ベイカー 2013:183)。

上述の通り、多くの言語の翻訳において繰り返し重訳が行われてきたため、それに伴う問題や誤解等は少なくないと思われる。しかしその一方、それは不可欠な手段であり、重訳を通して文化や言語間の交流がなされてきたことも考えられる。

第3章 先行研究

文化要因の翻訳やそれに対する翻訳方略、または foreignization および domestication

(本稿では受容化および異質化と記載)は、古くから非常に注目を浴びた研究だと言えよう。

Newmark や Aixelá は、異文化要素を分類し、様々なカテゴリーを提案した主唱者として挙げられる。上述のテーマは様々な言語や様々な分野において取り上げられてきた。以下に文学作品や行政・社会機関における文化要因に対する翻訳方略に関する研究の例をいくつか紹介する。

Magdalena (2005) はポーランド語・英語間翻訳、Abdolhamidi (2012) はジェーン・オースティンの『高慢と偏見』の英語およびその三種類の異なるペルシア語翻訳、また

Athari.Nikazm ほか (2013) はイランの文化に直接関わっており、文化要因が多く含まれている『mehmān-e māmān』(母親のゲスト)というペルシア語の文学作品(小説)を対象に文化要因の翻訳方略に関する分析、考察を行った。

しかし、これらはすべて異文化要素のみに焦点を当てた研究であり、また日本語・ペルシア語間の翻訳を研究したものは一つも存在せず、まして重訳については一切言及されていない。

Zare.Behtash 他 (2009) は 1988 年にヴェヌティ (Lawrence Venuti) が論じた受容化 (domestication) と異質化 (foreignization) という二つの翻訳方略の差異を基に、1950 年代から 2000 年代までの 60 年間にわたる英語からペルシア語に翻訳されたヘミングウェイの六冊の文学作品における支配的な翻訳方略を探り検証した。彼らは翻訳者の概念形態の前提における正確性や適切性を判断するのではなく、文化的翻訳方略を分析・説明する記述的翻訳調査を行った。最後に彼らは、受容化は異質化とともに適応した文化的な翻訳方略であるが、両者の中でも受容化の方がより適応している方略だという結論を出した。

これらの研究においては、日本語・英語そして英語・ペルシア語間における翻訳書を対象に受容化・異質化の観点から考察された。Zare.Behtash 他の研究では、いずれの方略がより適応するか調べられた。

このように、翻訳を対象とする学術分野においては、これまでに、様々な言語間の翻訳における問題、異文化要素すなわち異文化要素の翻訳における問題および翻訳方略、また異文化要素の翻訳における受容化および異質化方略の使用と翻訳書における比較・対照に関する研究ならびに考察が行われてきた。

また、篠原 (2013) は異文化要素の定義を述べたうえで、異文化要素の処理に当た

って採用される翻訳方略と、その分類の多様性、および研究で採用する分類の枠組みを示した。次に（Pedersen 2011）の方略分類に基づいて、日本の映画『おくりびと』の梗概を記述し、起点テキストから抽出した異文化要素とそれに対応する英語字幕を記して、その方略を同定した。その結果、同作品では異文化要素の翻訳志向は起点志向と目標志向のほぼ中間にあると結論付けた。または、金（2008）は異文化コミュニケーションとしての翻訳行為について、機能主義翻訳理論に基づき、日本語の原文と韓国語と英語の翻訳文の文学作品を四つ対象にし、自国化翻訳と異国化翻訳という観点から考察した。その結果、金は自国化翻訳と異国化翻訳という翻訳のスコープは、八つのカテゴリーで発生し、各カテゴリー別に自国化・異国化翻訳のある傾向が見られる、異文化コミュニケーションとしての翻訳行為の結果とも言える異文化間交流の拡大が、再び自国化翻訳と異国化翻訳という翻訳方法の選択に影響を及ぼしていると指摘している。

篠原（2013）の研究において字幕を対象に、すでに提案されている異文化要素の分類における受容化と異質化翻訳が調べられている一方、金（2008）の研究においては、原語の日本語とその翻訳書の英語と韓国語を比較しながら、翻訳のスコープのカテゴリーを設定、それぞれにおける受容化と異質化の考察が行われている。

また、金は翻訳研究の領域を少し広げ、博士論文として、以下の研究を行った。金（2011）は翻訳規範の変化と異文化コミュニケーションとの関連性を探るため、1960年代から最近にいたるまでの日本語を起点言語とする複数の韓国語訳を対象に、以下に示す観点から通時的に分析した。日本文学の翻訳にはどのような規範が作用してきたのか、どのような翻訳方法が用いられているのか、時間の流れとともにその方法に変化が見られるのか、変化があるとしたらどの時期に起きているのか。金はこれらの分析対象の具体例を挙げて示し、その結果、翻訳規範およびその変化を実証的なデータを通じて客観的に示した。さらにその結果を基に、金は日本文学の翻訳にはどのような規範が作用してきたのか、その規範に変化が見られたとしたらどの時期に起きているのか、規範の変化と異文化コミュニケーションとの関連性を見出すことはできるのかを解明し、社会文化的行為としての翻訳のあり方を改めて検証した。上述の通り、金の新しい研究により、日本語と複数の韓国の翻訳書の間における翻訳規範の作用ならびに歴史上における変化等が明確にされ、言葉のグループ分けもなされている。しかし、金の研究は日本語から韓国語への直接翻訳を題材とするものである。金の解明した事実が重訳にはどのように作用するかについても、検証が待たれるが、今

までなされてきた重訳に関する研究は多くない。

一方、数少ない重訳にかかわる研究の一つとして、グエン (2013) を挙げることができる。グエン は、ベトナムにおける日本文学の重訳を、歴史的経緯と関連づけ、時代背景が日本文学の翻訳にどのように反映されているかを検討した。そのため、グエン はまず先行研究を踏まえて、ベトナムにおける日本文学翻訳の位置づけを論述し、次に、1945-2001 年という日本文学の重訳が盛んにおこなわれた時期に限定して、その時代の歴史的背景を辿りながら、日本文学の翻訳事情を整理した。実際に重訳された作品とそこで用いられた手法に関して、グエンは、媒介言語の影響、および日本の固有名詞と伝統的な衣食住をさす名詞、ならびに漢語という異文化要素の翻訳方法に焦点を当てて、具体例を比較分析した。こうして、グエンは抽出した各要素における重訳の歴史的経緯と翻訳における媒介原語の影響とを調べた。このような分析を経て、グエンはベトナムにおいて、日本語への重訳のための媒介言語として用いられた言語が中国、ロシア語、英語、フランス語等多種多様であり、訳される文学の種類およびジャンルも時代とともに変化して行くことに関連性も見出した。また、既に重訳された日本文学の作品はかなりの量にのぼり、その中には時代による制限や誤りが多数含まれるとはいえ、日本文化を伝えるために相当の貢献をなしていることから、グエンは重訳は歴史的に重要な役割を果たしてきたと結論づけた。

以下に本研究の特徴ならびに意義について、上述の先行研究と比較しながら述べる。従来の翻訳分野において、日本語から中国語、韓国語などアジアの諸言語、そして英語はもちろんのこと、フランス語、ドイツ語やロシア語などヨーロッパの諸言語への翻訳に関する研究が数多くなされている。または、英語などからペルシア語への翻訳研究も少なくない。しかし、これまでに日本語からペルシア語への翻訳研究はなされていない。本研究は、これまでに取り上げられていなかった日本語からペルシア語への翻訳を対象とし、なおかつ英語を経由する三つの言語の間で行われる重訳という斬新な視点に立つ。また本研究では、今まで翻訳における問題点として述べられてきた「文化要因」に関して、上記の先行研究によって提唱された言語と文化は非常に密接な関係を持つという問題意識を共有しつつも、これに加えて社会言語学的次元の表現や擬音語・擬態語、色彩語彙など、筆者により新たに考案された分類法を提示する。本稿では、こうして分類されたカテゴリーを日本語から英語を経てペルシア語に重訳されたテキストを通して提案する。さらにペルシア語を母語としかつ日本語・英語に堪能な筆者が、日本語の原文を直接ペルシア語に翻訳し、上記の重訳との比較を

試みる。こうして得られた知見は日本語からペルシア語の直接の翻訳や他言語における翻訳を考察する際にも有益であると期待できる。

現在、第二言語や様々な外国語に堪能な人々が社会に数多く存在する中で、重訳つまり、ある原文を翻訳した外国語の文をさらに別の言語に翻訳するという手法はさほど意味があるとは思われないかもしれない。しかし、可能であれば直接翻訳が最良ではあるが、現時点では重訳もやむをえない（ベイカー 2013:180）。日本語とペルシア語間の翻訳についても、現在日本人のペルシア語学者、または特にイラン人の日本語学者が非常に少ないため、今後も数年間は重訳を行わざるをえないと思われる。モガッドムキヤ (2009) によると、イランでは、古くから日本の法律学・政治学・科学技術・経済学などに強い関心が持たれ、日本文化の学習に向けた様々な努力がなされてきた。また、テヘラン大学には日本語・日本文学科が1994年に設立された。しかし、これまでに発表された日本語関係の論文は五本のみである。20年以上にわたる上記の努力が、日本文化を学ぶために欠くことのできない日本語教育に貢献していないのは理解しがたい（モガッドムキヤ:315）。このように、イランでは日本語学者が非常に少ないために、日本語からペルシア語への翻訳がほとんどなされず、日本語の書籍などは英語やフランス語などを通してペルシア語に翻訳される場合がほとんどである。こうした状況においては、本研究は直訳翻訳ならびに重訳翻訳の両方にとって大いに参考になると思われる。

上記に考察を重ねたように、本研究では従来の翻訳学において提起されてきた翻訳方略を踏襲し、かつ筆者により新たに付け加えられた方略や分類様式を分析手段として使用する。また、本研究で取り上げる対象は、日本語からペルシア語への翻訳という従来の研究報告の数がきわめて限られている分野であり、さらに日本語から英語を経由してペルシア語に翻訳された重訳作品である。したがって、二言語間での翻訳においては発生しないような問題点が散見される。本稿では、そうした問題点を筆者による日本語からペルシア語への直接翻訳と比較して考察するという、従来にない斬新な分析手法を使用した。このような視座に立つ本研究は、新規性と希少性の両視点から非常に有益な知見をもたらし、翻訳学の分野にとどまらず、社会言語学の分野の発展や、ひいては日本とイランとの文化的交流に一定の貢献を果たせるものと考えている。

第4章 研究方法

4. 1. 研究対象

本研究における分析対象には、文学作品の小説を選んだ。その理由は、他のジャンルを比較して文学作品の小説においては、社会の一般人を対象にし、文化的な要因が数多く含まれているため、翻訳に問題が生じる可能性があるからである。また、文学テキストの場合、翻訳者の解釈が翻訳テキストに介入することになるが、翻訳方略もその解釈によって決定されることになるからである。そのため、他のジャンルの翻訳よりも文学テキストの場合に、翻訳方略が重要な役割を果たすはずである。

日本語から直接ペルシア語に翻訳されている文学作品は非常に少なく、しかも俳句などに限られている。しかし、英語やフランス語などを通してペルシア語に翻訳される日本の小説は少なくない。したがって、本研究では、日本語の原文とその英語訳、そしてペルシア語訳を対象に用いて分析を行う。

本稿では、川端康成の『掌の小説』、吉本バナナの『ハードボイルド/ハードラック』とそれらの英語訳とペルシア語訳を対象に分析を行う。これらの作品を対象に選んだ理由は、まずイランにおいて川端康成は日本の有名な小説家のひとりとして知られており、テヘラン大学、日本語・日本文学科の文学の授業において川端の作品が教材として採用されているからである。そして、『掌の小説』は多くの短い小説からなっているので、様々な話題が取り上げられ、それにしたがって多様な雰囲気を感じられる。また、吉本バナナの『ハードボイルド/ハードラック』は、英語を通してペルシア語に翻訳された僅かな作品のなかで、ペルシア語訳の起点となった英訳が明確に記載され、また翻案が多くないため、分析対象に適していると考えて選択した。

小説における翻案という翻訳方略はイランにおいて頻繁に選択される場合が多い。有名なイラン人の翻訳者、特にもともと小説家である人は、原文にある状況などがペルシア語の文化などに存在しない場合の方略として、翻案をよく使用する。

Jahangard (2011) は、イランにおけるカージャールー朝 (1796-1925) 時代に、ヨーロッパの文学作品はトルコ語を通してペルシア語に翻訳されたが、ほとんどの場合はヨーロッパ作品の原本性の保証のためトルコ語を媒介にペルシア語に翻訳されたことが述べられなかったと主張する。この習慣は、現在でもまだ残っていると思われる。日本語の文学作品のペルシア語訳書を見ても、大半が直接翻訳されていないことは述べられていない。しかし、翻訳者の経歴などを調べることで、日本語の知識があるかどうかを把握することができる。ここで新たに生じる問題は、原文の日本語がどの言語を通してペルシア語に翻訳されたかということである。上述の通り、重訳を経た小説の中で第一目標言語が明示されているものは非常に限られているため、

分析対象の選択は困難であった。

4. 2. 分析方法

本研究においては、次のような方法にしたがって分析を行う。まず、SL の日本語とその翻訳の TL1 の英語、または、英語の翻訳の TL2 のペルシア語のテキストの全文を対象に、翻訳しにくく、問題になっている個所や誤訳されやすい個所やすでに誤訳されている個所を収集し、分類する。

次に、日本語・英語および英語・ペルシア語のテキストを個別に対照し、分類したそれぞれのカテゴリーにおける受容化翻訳と異質化翻訳が実際どのように行われているか調べ、同じ要因が異なる言語でどの方略で翻訳されているか見てみる。つまり、英語訳書とペルシア語訳書における受容化翻訳と異質化翻訳の選択が一致しているか、一貫性が見られるのかを検証する。そして、重訳が日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略にどの影響を及ぼしているのか、言い換えれば、英語を通して日本語からペルシア語に翻訳された要因がどのように翻訳され、どのように変わっているのかを調査し、それらの的確性を調べる。また、筆者が直接日本語をペルシア語に翻訳し、その翻訳されたペルシア語訳文を、英語を通ったペルシア語訳文と比較してみたい。

第5章 分析と考察

本章では、翻訳しにくく、問題になっている個所や誤訳されやすい個所やすでに誤訳されている個所を収集し、分類する。そして、分類したそれぞれのカテゴリーにおける重訳を通して翻訳された文について受容化・異質化の翻訳方略を調べる。分類したカテゴリーは以下のとおりである。

5. 1. 擬音語・擬態語

日本語は世界の言語の中でも、擬音語・擬態語いわゆるオノマトペを豊富に持つ言語の一つであり、特に日本語の話し言葉においては、擬音語・擬態語が頻繁に使用され、話し手の細かな心情を表したり、様々な物事の様態を生き生きと描写したりする際に欠かせない(三上 2004:63)。浅野(1978)は、外界の音を写した言葉を擬音語、音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉を擬態語と定義する。浅野が指摘するように、擬音語はあらゆる言語において同じになって然るべきである音声模写と

は異なり、言葉の一種であるため、言語によって大きく違う場合もある。擬音語はあまり知られていないアサバスカ語等を含め、ほとんどの言語にあるようであるが、擬態語の場合は、これを欠く言語もかなりあるようである。例えばフランス語においては、擬音語が圧倒的に多いと言われる。これに対して、ペルシア語においては擬音語よりも擬態語が数多く存在する。

擬音語・擬態語が使用される分野に関して、丹野（2007）は日本の俳句、川柳、短歌、詩、小説など文学には、数多くのオノマトペすなわち擬音語・擬態語が使用されると指摘する。同氏はその理由を次のように推定している。オノマトペの使用によって、文学者が対象などを見た時に生じる臨場感溢れる感覚を、あるがままに言語化することができ、瞬時においてオノマトペが作者の感覚を占領する。このため、オノマトペは、文学の中で盛んに使用され、内容を一層印象深く、鮮明に描くことに役立っている（2007:11）。岩崎（2007）や正宗（1990）は、英語におけるオノマトペに比べて、日本語においては擬声語、擬態語の占める割合が大きいと指摘している。ペルシア語の場合は擬音語・擬態語は話し言葉において使用される方が多く、文学においては児童文学での使用が見られる。また、内容を印象深くするために、直喩（比喩）や隠喩（メタファー）を、とりわけ、詩などに頻繁に使用する。吉枝（1992）によると、日本語の擬声語・擬態語はほとんどの感覚を表すことができ、会話文以外でも新聞の見出しや商品名などとして幅広く活用され、その使用頻度も極めて高い。これに対して、現代ペルシア語では描写方法としては比喩が伝統的な文学表現と受け取られているため、擬音語・擬態語は書き言葉として用いられにくく、日本語に比べるとあまり多様な種類は見られない。しかし、現代ペルシア語の日常会話では、擬音語や擬態語が頻繁に用いられていると言える。

オノマトペには動詞用法、名詞用法や形容詞・形容動詞用法などあらゆる品詞はあるが、一般的には、動詞を修飾する副詞が多い（丹野 2007:139）。とりわけペルシア語の場合は大部分が副詞であろう。

このように、日本語においてはしばしば使用される擬音語・擬態語が、その使用頻度の少ない英語やペルシア語にどのような方略で訳されるかは重要なことであろう。

この点を解明するため、以下の例文における擬音語・擬態語がどんな方略によって翻訳され、重訳にどのような影響を受けているか見てみよう。さらに、重訳と日本語からペルシア語への直接翻訳の場合との比較を試みる。

(1) [SL] 国道から一本山側の、緑にこんもりと覆われたいい感じの道だった。(吉本、11)

[EL] It was the first road up the mountainside after the high way; I liked how it felt to be walking there, hidden under the lush canopy of green. (3)

[PL] ba'd az bozorgrāh īn avvalīn jādde be samt-e kuhestān
の次 主要道路 これ 最初 道 PREP 側.EZ 山

bud va man az hess-e piāde-ravī va
COP.IND.PAST.3SG CONJ 私 PREP 気持ち.EZ 散歩 CONJ

panāh gereftan zīr-e ān sāye-bān-e por-āb-e
隠れる.INF 下.EZ その 天蓋.EZ みずみずしい.ADJ.EZ

sar-sabz lezzat bordam. (15)
茂った.ADJ 楽しむ.IND.PAST.1SG

- 主要道路の次は、(これは) 山に向かう最初の道で、私は茂ったみずみずしい天蓋の下を歩き隠れる心地がとてもよかった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

ba'd az bozorgrāh avvalīn jādde be samt-e kuhestān pušide az
の次 主要道 最初 道 PREP 側.EZ 山 覆う.PTCPL PREP

anbuh-e deraxtān-e sarsabz bā hessī delpazīr bud.
繁茂した.EZ 木.PL.EZ 茂った.ADJ PREP 感じ.iSUF 感じのいい COP.IND.PAST.3SG

- 主要道の次にある山に向かう最初の道は、繁茂した緑に覆われた感じのいい道だった。

SLの「緑にこんもりと覆われたいい感じの道」という表現のELへの翻訳には、「I liked how it felt to be walking there, hidden under the lush canopy of green」のように等価に転移、そして付加方略がとられている。「緑に こんもりと覆われた」という擬態語を

含む表現は、EL では上記の下線部のように説明されている。そして、「いい感じの」の部分は、EL では「I liked how it felt」のように転移方略が用いられ、さらに「to be walking there」が付加されることによって、表現が完成されている。

その EL は PL に「man az hess-e piāde-ravī va panāh gereftan zīr-e ān sāye-bān-e por-āb-e sar-sabz (...)」つまり、「私は茂ったみずみずしい 天蓋の下を歩き隠れる 心地がとてもよかった。」と転移方略で訳されている。しかし、この箇所では、若干の誤解が生じているのではないと思われる。EL における「I liked how it felt to be walking there, hidden under the lush canopy of green」では、「hidden under (...)」は「to be walking there」を修飾するのか、あるいは「there」を修飾するのかが明確ではない。しかし、この部分は PL では「to be walking there」に掛かると解釈され、「(...)を歩き隠れる心地がとてもよかった」と翻訳されている。

以上の翻訳方略を踏まえて、この例文中の擬態語の翻訳においては、SL から EL への翻訳と同様に EL から PL への翻訳には受容化方略が使用されている。文法構造上の問題に起因して、「緑にこんもりと覆われたいい感じの道」という SL の原文は PL には「私は茂ったみずみずしい天蓋の下を歩き隠れる心地がとてもよかった」と訳され、擬態語における意味伝達のずれが生じたと思われる。SL における「こんもりと」という擬態語は「繁っているようす」を表す語であるが、EL において配慮されなかったため、PL への翻訳でも訳されない結果となった。

SL から直接翻訳された PL 訳文は「ba'd az bozorgrāh avvalīn jādde be samt-e kuhestān pušīde az anbuḥ-e deraxtān-e sarsabz bā hessī delpazīr bud」すなわち「主要道の次にある山に向かう最初の道は、繁茂した緑に覆われた感じのいい道だった」となった。「こんもり」という擬態語はペルシア語の「anbuḥ (繁茂した)」、または「sar-sabz (茂った)」に相当する。このように、両方の言葉を使用したことで文字通りの意味、また内包的な意味も伝達されたが、ペルシア語にはこれに相当する擬態語は存在していないので、擬態語の形とはなっていない。

(2)[SL] 夜がすたとんと幕をおろし、あたりは気持ちのよい澄んだ空気に満ちていた。
(吉本、17)

[EL] Night lowered its heavy curtain. The entire area was flooded with air so clear it made me feel wonderful. (10)

[PL] Šab parde-ye sangīn-aš rā pāyīn andāxt.
 夜 幕.EZ 重い.PRON.SUF.3SG POSTP.を おろす. IND.PAST.3SG

hame jā qarq dar havā-ye pākī bud ke
 どこも 満ちた PREP 空気.EZ 清潔 COP.IND.PAST.3SG REL.PRON

hāl-am rā hesābī jā mīāvard. (21)
 気持ち.PRON.SUF.1SG POSTP.を とても 良くする.IND.IMPF.3SG

- 夜はその重い幕をおろした。 一帯が私の気持ちをよくする清潔な空気に満ちていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

šab bā sedā-ye goromb parde-aš rā pāyīn andāxt.
 夜 PREP 音.EZ すとん 幕.PRON.SUF.3SG POSTP.を 降ろす.IND.PAST.3SG

- 夜はすとんとその幕を降ろした。

「すとんと 幕をおろし、(...)」という擬音語が使用されている SL の表現は、EL では転移方略を用いて「lowered it's heavy curtain」と訳されている。この部分は、PL では等価方略により「parde-ye sangīn-aš rā pāyīn andāxt」すなわち「その重い幕をおろした」と翻訳されている。EL および PL には、SL における「すとんと」という擬音語に相当する言葉が存在する。すなわち、EL では「with a thump[thud, plump]」、PL では「goromb, tālāp, telep (くだけたことば)」がこれに相当する。それにもかかわらず、EL において「heavy」が使用されたため、PL 訳もそれに従い「sangīn (重い)」と訳されてしまった。SL から EL への翻訳方略、また EL から PL への翻訳は両方とも受容化方略である。このようなプロセスを経て生み出された PL の訳文は「夜はその重い幕をおろした」となり、原文である SL における「夜がすとんと幕をおろし (...)」における擬音語の文字通りの意味とともにその語感も伝達されていないと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文は「šab bā sedā-ye goromb parde-aš rā pāyīn andāxt」すなわち「夜はすとんとその幕を降ろした」となった。上記に説明した通り、SL における「すとんと」という擬音語に対して PL の「goromb, tālāp, telep」などが存在している。「goromb」という擬音語は、柔くて重いものが落ちる音を表すため、ふ

さわしい訳だと思われる。直接翻訳によるこの PL 文では、このように文字通りの意味とともに語感も伝達された。

(3) [SL] 道の両脇に小さな商店が並び、無人駅のホームが こうこうと照らされ、人影はほとんどなかったが、家々には明かりがともっていた。(吉本、18)

[EL] Little stores lined both sides of the street; the train station which had ticket machines but no stationmaster, was flooded with light; and while hardly a soul was out and about, the houses were lit up. (11)

[PL] maqāze-hā-ye jam'o jur dar do taraf-e xiābān radīf budand.
 お店.PL.EZ 小さい.ADJ PREP 両側.EZ 道 並ぶ.IND.PAST.3PL

Istgāh-e qatār ba dastgāh-e foruš-e belīt valī bī-sarparast ke
 駅.EZ PREP 機械.EZ 販売.EZ 切符 しかし 無担当 REL.PRON

az nur saršār bud. bā inke be saxtī hattā
 PREP 光 満ちた.ADJ COP.IND.PAST.3SG にもかかわらず 難しく.ADV さえ

hozur-e ruhī dar ānja hes mišod,
 存在.EZ 魂.iSUF PREP そこ/あそこ 感じられる.IND.IMPF.3SG

čerāq-e xāne-ha rowšan bud. (21)
 明かり.EZ 家.PL ともっている.ADJ COP.IND.PAST.3SG

➤ 小さいお店が道の両脇に並んでいた。券売機があるが、駅員はいない駅は 光に満ちていた。人影は見当たらなかったが、家々の明かりがついていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

maqāze-hā-ye kučak dar do taraf-e xiābān radīf budand.
 お店.PL.EZ 小さい.ADJ PREP 両側.EZ 道 並ぶ.IND.PAST.3PL

sakku-ye īstgāh-e qatār ke kārmand nadāšt qarq
 ホーム.EZ 駅 REL.PRON 社員 持つ.NEGIND.3SG 浸かっている様子

dar nur bud. Hīčkas dar ān atrāf nabud
 PREP 光 COP.IND.PAST.3SG 誰も PREP あの/その 辺 COP.IND.NEG.PAST.3SG

valī čerāq-e xāne-hā rowšan bud.
 でも 明かり.EZ 家.PL ともっている.ADJ COP.IND.PAST.3SG

- 小さいお店が道の両側に並んでいた。駅員がいないホームは光に満ちていた。そのあたりには誰もいなかったが、家々の明かりがともっていた。

「こうこうと照らされ、(...)」という擬態語が使用されている SL の表現は、EL では転移方略を用いて「was flooded with light」と訳されている。SL における「こうこう」という擬態語は EL における「brilliantly, brightly」ということばに相当するにもかかわらず、その点は配慮されていない。この部分は、PL では転移方略により「az nur saršār bud.」すなわち「光に満ちていた」と翻訳されている。以上の分析によると、SL から EL への翻訳、また EL から PL への翻訳はともに受容化方略でなされている。SL における「こうこうと照らされ、(...)」という表現は PL に「光に満ちていた」という表現に言い換えられ、文全体のメッセージは伝わっているかもしれないが、擬態語における文字通りの意味、また言外の意味の双方がどちらも伝達されなかったと言えよう。

SL における文を直接 PL に翻訳した場合は、「maqāze-hā-ye kučak dar do taraf-e xiābān rađif budand.sakku-ye īstgāh-e qatār ke kārmand nadāšt qarq dar nur bud. hīčkas dar ān atrāf nabud valī čerāq-e xāne-hā rowšan bud.」すなわち、「小さいお店が道の両側に並んでいた。駅員がいないホームは光に満ちていた。そのあたりには誰もいなかったが、家々の明かりがともっていた。」となった。SL における「こうこうと照らされた」という擬態語が含まれる表現は、「qarq-e dar nur bud」という PL に翻訳された。「こうこう」という擬態語はペルシア語では「be deraxšani」、また「be rowšanī」に相当する。どちらの表現にも明るくという意味があるが、前者の方が素晴らしくという意味で使われる傾向がある。また両方とも副詞であり、「be deraxšānī deraxšīdan」または、「be rowšanī deraxšīdan」のように重複的には使用されない。上記の翻訳に用いられた「qarq šodan」という動詞は字義通りには「溺れ死ぬ」という意味であるが、比喩的に「考え、夢、幸せ、罪、光に浸かる」という状況を表現するために使用され、そのものに満ちるという意味を表す。このように、該当する擬態語自体がペルシア語に存在して

いない上に、上に示した形で翻訳する場合は、不自然 になると思われるため、上記のように翻訳した。その結果、 SL から PL に直接翻訳された場合においては擬態語の文字通りの意味とともに、言外の意味も伝達されたため、異なる表現によっても文全体としてのメッセージが伝達されたと思われる。

- (4) [SL] うどん屋のおじさんはもうのれんを入れるところでとても迷惑そうだったが、どうぞ、といやいや言ってくれたので、歩き疲れてとにかくすわりたかった私は、中に入った。(吉本、18)

[EL] The owner was just about to close up and seemed extremely annoyed to see me, but he grudgingly told me to come in, so I did. I was worn out from walking, and dying to sit down. (11,12)

[PL] sāheb-e maqāze guyā qasd-e ta'tīlī dāšt va
持ち主.EZ お店 のようだ つもり.EZ 閉めること 持つ.IND.PAST.3SG CONJ

dīdan-e man be šeddat āzorde xāter (-aš) kard,
見る.INF.EZ 私 すごく 心を傷つける.IND.PAST.3SG (PRON.SUF.3SG)

valī bā bīmeilī ta'ārof kard ke vāred šavam .
しかし PREP しぶしぶ 招く.IND.PAST.3SG REL.PRON 入る.IND.SUBJ.1SG

vāred šodam. az piāde ravī-e tulānī moddat be šeddat xaste budam
入る.IND.PAST.1SG PREP 散歩.EZ 長時間 すごく 疲れる.IND.PAST.1SG

va āmādegī-e har kārī dāštam tā faqat
CONJ 準備.EZ なんでも 持つ.IND.PAST.1SG REL.PRON だけ

čand lahze benšīnam. (22)
数 秒 座る.IND.SUBJ.1SG

- お店の主人は閉店するつもりで、私を見ると、とても気を悪くしたようだった。しかし、それでも いやいや中へ入るように招いてくれた。中に入った。長時間歩いてとても疲れていて、数秒座るために、何でもやる心づもりがあった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mard-e udon foruš* ke dīge mīxāst kerkere-ye
男.EZ うどん屋 REL.PRON もう 欲しがる.IND.IMPF.PAST.3SG シャッター.EZ

maqāze-ašo pāyīn bekeše, ba dīdan-e man čehre dar ham kešīd
店.PRON.SUF.3SG おろす.IND.SUBJ.3SG PREP 見る.IND.PAST.3SG 私 顔をしかめる.IND.PAST.3SG

o bā bīmeilī be man goft ”befarmāyīd”. man ke
CONJ(口語) PREP しぶしぶ PREP 私 言う.IND.PAST.3SG どうぞ 私 REL.PRON

az rāh raftan xaste šode budam va faqat
PREP 歩くこと 疲れた.ADJ になる.PAST.PERF.1SG CONJ だけ

mīxāstam jā-yī benšīnam, vāred šodam.
欲しがる.IND.IMPF.PAST.1SG どこか 座る.IND.SUBJ.1SG 入る.IND.PAST.1SG

- うどん屋のおじさんはそのお店のシャッターを閉めるところで、私を見ると、顔をしかめて、いやいや私に「どうぞ」と言ってくれた。歩くことに疲れて、どこか座りたかった私は中に入った。

SLにおける「どうぞ、と いやいや 言ってくれた。」という部分は、ELにおいて「he grudgingly told me to come in」のように調整方略と翻案方略とを用いて翻訳されている。そしてそのELの表現は、PLには「ba bīmeilī ta’ārof kard ke vāred šavam」つまり、「いやいや中へ入るように招いてくれた」という転移方略で翻訳されている。要するに、擬態語の翻訳に際して、SLからELへの翻訳、またELからPLへの翻訳は同様に受容化方略でなされている。こうした方略を用いて翻訳された「いやいや 中へ入るように招いてくれた。」というPLの文は、「どうぞ、といやいや言ってくれた。」というSLの持つ意味の再現には成功していると思われる。ここで得られたPL訳文では擬態語はもちいられていないが、そのデノテーション、すなわち文字通りの意味ともにコノテーションという言外の意味も伝達されたと思われる。

筆者によるSLからPLへの直接翻訳においても同様に、SLにおける「いやいや 言っ

てくれた」という擬態語の表現は「ba bīmeilī be man goft, befarmayīd」と翻訳され、デノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(5) [SL] つやつやとした黒い肌が湯に濡れてなめらかだ。(川端、91)

[EL] It's glossy black surface , wet from the hot spring, was smooth and slippery. (39)

[PL] sath-e siāh va barrāq-e ān bar asar-e
 表面.EZ 黒 CONJ つやつやした.EZ それ PREP 効果.EZ

āb-e dāq-e češme sāf va laqzande bud. (36)
 水.EZ 熱い.EZ 源 なめらか.ADJ CONJ すべすべした.ADJ COP.IND.PAST. 3SG

➤ そのつやつやした黒い表面が源のお湯でなめらかですべすべしていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

sath-e barrāq va siāh-e ān dar āb-e češme-ye āb garm xīs xorde
 表面.EZ つやつやした CONJ 黒い.EZ それ PREP 水.EZ 温泉 濡れる.PTCPL

va narm o seiqalī šode.
 CONJ 軟らかい CONJ (口語) なめらか になる.PTCPL

➤ そのつやつやした黒い表面が温泉に濡れて軟らかくなめらかになった。

SLの「つやつやとした黒い肌」の翻訳については、ELとPLではともに等価方略を用いて、それぞれ「It's glossy black surface」および「sath-e siāh va barrāq-e ān (そのつやつやした黒い表面)」と表されている。上述のように、SLからEL、またはELからPLへの翻訳方略は両方とも受容化方略であり、PLの訳文は原文であるSLの文意を適切に表していると思われる。上の例文と同様に、擬態語的な訳文とはなっていないが、文字通りの意味と同時に含意も伝達されたと言えよう。

筆者によって直接日本語からペルシア語に翻訳されたPL訳も同様に、「sath-e barrāq va siāh-e ān dar āb-e češme-ye āb garm xīs xorde va narm o seiqalī šode」すなわち「そのつやつやした黒い表面が温泉に濡れて軟らかくなめらかになった」となった。SLにおける「つや

つやとした」という擬態語はPLの「barrāq」に相当する。「barrāq」とは「ピカピカ」また「キラキラ」という意味も有し、PLの擬態語ではないが、文字通りの意味とともに言外の意味伝達にも成功したと思われる。

(6) [SL] 耳隠しの女が子供をまじまじ見ていた。(川端、92)

[EL] The woman in the ear covering hairdo blinked at his daughter. (40)

[PL] zan-i ke mu-hā-yaš mod-e ruz
 女.iSUF REL.PRON 髪.PL.PRON.SUF.3SG 現代風に.ADV

dorost šode bud be doxtar-e u češmakī zad. (37)
 できる.IND.PAST.PERF.3SG PREP 娘.EZ 彼/彼女 目配せする.PAST.3SG

➤ 髪を現代風にまとめていた女が彼の娘に目くばせした。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

zan-i ke mu-hā-yaš rā model-e mīmīkākušī
 女の人.iSUF REL.PRON 髪.PL.PRON.SUF.3SG POSTP.を スタイル.EZ 耳隠し

dorost karde bud zol-zol be bačče negāh mīkard.
 アレンジする.IND.PAST.PERF.3SG まじまじ PREP 子供 見る.IND.IMPF.PAST.3SG

➤ 耳隠しの髪型をした女の人の子供をまじまじ見ていた。

まず、「まじまじ見ていた」は、ELには「blinked at his daughter.」のように転移方略を使用して訳されている。しかし、ここでは混乱が生じているようだ。「まじまじ見る」という擬態語表現はELの「stare at」に相当するが、誤解により「blink」と翻訳されたのではないかと思われる。ELのこの表現は、「be doxtar-e u češmakī zad (彼の娘に目くばせした)」と等価方略によりPLに翻訳されている。なぜか「blink」が「wink」という意味にとられたため、PLでは「目くばせした」と表現されてしまった。上記の結果、SLからEL、またELからPLへの翻訳のどちらにおいても受容化方略が用いられ、PLの訳文は「彼の娘に目くばせした」となり、「子供をまじまじ見ていた」というSLの原文とはか

なりかけ離れた意味を持つようになってしまったことが明確になった。このように、「まじまじ」という擬態語におけるデノテーションおよびコノテーションの両方も伝達されなかった。

直接日本語からペルシア語に翻訳された訳文は「zan-i ke mu-hā-yaš rā model-e mīmīkākušī dorost karde bud zol-zol be bačče negāh mīkard.」すなわち、「耳隠しの髪型をした女の人は子供をまじまじ見ていた。」となった。SLにおける「まじまじ見る」という擬態語語句に対して、PLの同様な「zol-zol negāh kardan」という擬態語表現が存在するため、文字通りの意味とともに言外の意味伝達もなされたと思われる。

(7) [SL] 踵を揚げた。ぬるぬる滑り落ちた。 (川端、92)

[EL] She kicked with her feet and slithered down the rock. (40)

[PL]	bā	pā	harekatī	kard	va	<u>az</u>
	PREP	あし	動き.iSUF	する.IND.PAST.3SG	CONJ	PREP

<u>sang</u>	<u>be</u>	<u>pāyīn</u>	<u>sor xord.</u>	(38)
石	PREP	下	滑る.IND.PAST.3SG	

➤ 足を動かして、石から滑り落ちた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

pāšne-hā-ye	pā-yaš	rā	bālā āvard	va	ru-ye	sathe
踵.PL.EZ	足.PRON.SUF.3SG	POSTP.を	掲げる.IND.PAST.3SG	CONJ	の上	表面.EZ

lazej-e	sang	be pāyīn sor xord.
ぬるぬるとした	石	滑り落とす.IND.PAST.3SG

➤ 踵を掲げて、ぬるぬるとした石の上から滑り落ちた。

SLにおける「ぬるぬる滑り落ちた。」という擬態語表現のELへの翻訳では、「slithered down the rock」のように調整および付加方略がとられている。「slither」は「ずるずる滑る」に相当するため「rock」が付加され、具体化されていると思われる。

る。

そして、そのELはPLに「az sang be pāyīn sor xord (石から滑り落ちた)」のように転移方略で翻訳されている。上のようなプロセスを経て、SLからELおよびELからPLへの翻訳に用いられている方略は、ともに受容化方略であることが分かった。

「ぬるぬる滑る」という表現は通常はひとかたまりの語句として使用され、ELにおける「slimy」、PLにおける「ぬるぬるした」物質を意味し、形容詞としての役割を果たす。しかし上記の例文においては、副詞として「滑る」という動詞に付加され、それを強調したように捉えられたため、ELの場合は、動詞に内包された形で使用されたと思われる。そのため、ELの訳文では擬態語が省略されたように見える。しかし、SLにおける「ぬるぬる」という擬態語は、実は動詞を強調する役割を果たしているもので、そのように翻訳されるべきである。EL訳においてはその役割が配慮されているが、「石から滑り落ちた」というPLの文においては、強調が見られない。その理由は、ペルシア語には、そのような動詞、または動詞を強調する副詞は存在していないからだと思われる。このように、PL訳文にはSLにおける「ぬるぬる滑り落ちた」という文のメッセージは伝わっていると思われるが、擬態語自体における明示的また、暗示的すなわち、デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されなかったと考えられる。

「ぬるぬる」という擬態語は、水気があってなめらかで、滑りやすいさまのことであり、上記のSL文における「ぬるぬる滑り落ちた」という表現においては、「ぬるぬる」は副詞の役割を果たしている。これに対して、SLから直接翻訳されたPLにおいては「pāšne-hā-ye pā-yaš rā bālā āvard va ru-ye sathe lazej-e sang be pāyīn sor xord」すなわち、「踵を掲げて、ぬるぬるとした石の上から滑り落ちた」となっている。要するに、SLにおける「ぬるぬる滑り落ちた」という擬態語表現は「ぬるぬるとした石の上から滑り落ちた」というPL訳文となっている。PLにおいて「ぬるぬる滑る」という副詞は存在しないため、同じ意味をする「lazej」が形容詞として使用されたため、修飾された名詞の石が付加された。このように、直接翻訳によるPL文はSLにおける擬態語の形とはなっていないが、文字通りの意味伝達、また言外の意味伝達の両方がなされたと思われる。

(8) [SL] 彼女は岩を這い上がった。ぺったり吸いついた。(川端、92)

[EL] She crawled back up the rock and clung to it. (40)

[PL] u chahār dast o pā az sang bālā āmad
 彼/彼女 這う.ADV PREP 石 昇ってくる.IND.PAST.3SG

va be ān časbīd. (38)
 CONJ PREP それ はりつく.IND.PAST.3SG

➤ 彼女が石を這い上がって、それにはりついた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

u chahār dast o pā az saxre bālā raft
 彼/彼女 這う.ADV PREP 岩 昇っていく.IND.PAST.3SG

va mohkam be ān časbīd.
 CONJ 強く PREP それ/あれ しがみつく.IND.PAST.3SG

➤ 彼女が岩を這い上がって、ぺったりそれにしがみついた。

SLにおける「ぺったり吸いついた」という表現は、ELには「ぺったり」という擬態語が省略され、「吸いついた」という表現は等価方略を用いて「clung to it」と翻訳されている。「clung」は「cling」の過去形であり、SLにおける「吸い付く」に相当するのは「to adhere closely; stick to」、また「to hold tight, as by grasping or embracing; cleave」のことである。

上記の例文(7)でも説明したように、擬音語・擬態語が特に動詞を強調する場合は多いので、それに相当する言葉が目標言語に存在しない場合は省略傾向があるのではないかと考えられる。または、副詞である擬態語等は動詞に含まれる場合もあるので、繰り返しを避けるため、省略されると思われる。上記のEL表現のPLへの翻訳には、「be ān časbīd (それにはりついた)」のように等価方略がとられている。

要するに、SLからELへの翻訳方略と同様にELからPLへの翻訳方略も、受容化方略であることが明確になった。このように、PLの訳文は「それにはりついた」となり、原文であるSLの「ぺったり吸いついた」という文意を適切に表していると思われるが、擬態語そのものの意味および含意が配慮されていないと考えられる。

直接SLからPLに翻訳された場合は、「u chahār dast o pā az saxre bālā raft va mohkam be ān časbīd.」すなわち「彼女が岩を這い上がって、ぺったりそれにしがみついた」という

PL訳文となった。

上述の通り、擬態語が動詞を強調する際、目標言語に存在していない場合、また目標言語の動詞の意味に含まれる場合に、省略される傾向がある。「ぺったり」という擬態語はELにおいて「tight」という意味である。ELにおける「cling」の

「to hold tight, as by grasping or embracing」という意味においては、すでに「tight」が入っているため、繰り返しを避けるために、省略された可能性が考えられる。その一方「tight」は「しっか固定した、きちんと張って、ピント張って…」のような既に動詞が含まれる意味がある。しかし、ELはPLに翻訳される場合、「cling」は「časbīdan（はりつく）」というPLだけに翻訳され、「ぺったり」または「tight」の意味が含まれない。同様に直接SLからPLへの翻訳においても、「ぺったり」という擬態語を表すために「mohkam」という副詞が使用された。この表現はペルシア語における擬態語ではないが、これによりSLのデノテーションとともにコノテーションも伝達されたとと思われる。

(9) [SL] 泣きながら追っかけて来る娘の頬をぴしゃりと打った。(川端、130)

[EL] The girl ran toward her, crying, and the woman slapped her. (54)

[PL] doxtarak geryān be samt-e u davīd
少女 泣きながら.ADV PREP 方向.EZ 彼/彼女 走る. IND.PAST.3SG

va zan u rā zīr-e mošt va lagad gereft. (56)
CONJ 女 彼/彼女 POSTP.を 下.EZ 拳 CONJ 蹴ること 取る. IND.PAST.3SG

➤ 少女は泣きながら彼女の方に走ったが、女の人は彼女を拳で打ったり、蹴ったりした。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

be gunē-ye doxtar-ak ke geryān be donbāl-e u āmad
PREP 頬 .EZ 小娘 REL.PRON 泣きながら 追っかける(彼女を).IND.PAST.3SG

sīlī zad.

ぴしゃりと打つ.IND.PAST.3SG

➤ 彼女を追っかけて来た小娘の頬をぴしゃりと打った。

この例も例文(8)と同様に、SLの「ぴしゃりと打った」における「ぴしゃり」という擬音語がELでは「woman slapped her」のように配慮されずに翻訳されている。「ぴしゃり」には、擬音語・擬態語辞典(1978)によると、以下のように様々な意味が存在している。

1. 戸・障子などを手荒くしめるさま。また、その音を表す語。
2. 平手で勢いよく打つさま。また、その音を表す語。
3. 水などはねるさま。また、その音を表す語。
4. することに遠慮がなく、しかも相手に反撃の余地を与えないさま。
5. 正確で少しの狂いもないさま。ぴたり。

上記の例における「ぴしゃり打った」というのは上の意味の2番に当てはまる。

「ぴしゃりと打った」というのはELの「slapped」に相当する。ELにおける「slap」は「平手でピシャリと打つ」という意味である。このように、「slap」というELにおいて既に「ピシャリ」という意味が含まれている。

このELの文は、PLには「zan u rā zīr-e mošt va lagad gereft」つまり「女の人は彼女を拳で打ったり、蹴ったりした」のように付加または等価方略を用いて訳されている。しかし、SLにおける「ぴしゃりと」という擬音語は「手の平でたたく」ことを意味しているので、「拳で打つ」という表現とは異なる。また、PLで用いられている「拳で打ったり、蹴ったりした」という表現は、SLの原文には含まれていない。「slap」というELはPLの「sīlī zadan, čak zadan」に相当するにもかかわらず、このようなPLに翻訳されたのは予想外である。

上記のように、SLからELへの翻訳方略と同様にELからPLへの翻訳方略も、受容化方略であることが分かった。その結果、「女の人は彼女を拳で打ったり、蹴ったりした」というPLの訳文は、原文であるSLの擬音語が配慮されず、文字通りの意味また言外の意味も伝達されなかった結果、このように、SLの原文とかけ離れてかなり誇張された意味を持つようになったのではないかと思われる。

直接SLからPLに翻訳されたPL訳文は「be gune-ye doxtar-ak ke geryān be donbāl-e u āmad sīlī zad」すなわち「彼女を追っかけて来た小娘の頬をぴしゃりと打った」となった。SLにおける「ピシャリと打った」という表現は「sīlī zad」というPLに翻訳され

た。PLにおける「sīlī zadan」はELと同様に「平手でピシヤリと打つ」という意味である。しかし、PLにおいてはSLにおける「ぴしゃり」に相当する「šapalaq, šelep, dereq, šereq, dereqqī, šereqqī」という擬音語が存在する。この例文に最もふさわしいのは「šapalaq」であるとも考えられるが、筆者によって翻訳されたPL文においては、まず「ぴしゃり」という意味が含まれる「sīlī zadan」という動詞を使用することにより意味が通じ、重複を避けることができたと思われる。また、「šapalaq」という擬音語が非常に口語的であり、児童文学、また風刺文に使用される傾向があるため、本例文におけるPL訳には適切ではないと考えその使用を避けた。以上の分析を踏まえ、SLに相当するPL訳語が存在しているにもかかわらず、あえて使用されなかったことによって、擬音語的な形を採らなかった。

(10) [SL] 彼女はそう呟きながらぼろぼろと涙を落とした。(川端、130)

[EL] Tears fell as the woman whispered.(54)

[PL] ašk-e zan zemn-e zīr-e lab xāndan-e nāme sarāzīr šod.(56)
 涙.EZ 女 の間.EZ 囁く.INF.EZ 手紙 流れる.IND.PAST.3SG

➤ 手紙を小さい声で読んでいる間に、女の人の涙がこぼれてしまった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

u dar hālīke āngune zemzeme mīkard gulle gulle
 彼女/彼 する間 そのように 呟く.IND.IMPF.PAST.3SG ポロポロ

ašk mīrīxt.
 涙 落とす.IND.IMPF.PAST.3SG

➤ 彼女はそのように呟きながら、ポロポロ涙を落としていた。

上記の例文(9)と同様に、このSLにおける「ぼろぼろと涙を落とした」はELに「Tears fell」のように転移および省略方略を用いて訳されている。まず「涙を落とした」というSLの表現は、ELでは「tears fell」と訳され、主題が変わることになる。この変化はELの文型のためであると思われる。しかし、ELには「ぼろぼろ落とした」に

相当する「fell in drops」または「fell in large drops」という表現が存在するにもかかわらず、その部分は何らか省略されている。そのため、PLにおいては、「ašk-e zan sarāzīr šod（女の人の涙がこぼれてしまった）のように付加または等価方略がとられている。ここで「女の人」という語が付加されたのは、PLにおける文法規則による。なぜなら、PLでは譲渡不可能名詞のように本質的に所有者がある事物については、その所有者自身やそれに対応する人称代名詞または接尾辞形人称代名詞を用いることにより、それを明示する必要があるからである。以上の分析により、SLからPLへの翻訳またELからPLへの翻訳における方略は両方とも受容化であることが明確になった。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、SLの原文とPLの訳文との間には、若干の意味のずれが生じた上に、SLにおける擬態語が省略され、デノテーションならびにコノテーションは伝わっていないと考えられる。

SLから直接翻訳されたPLは「u dar hālīke āngune zemzeme mīkard gulle gulle ašk mīrīxt」すなわち、「彼女はどのようにを呟きながら、ポロポロ涙を落としていた」という訳文となった。「gulle gulle」は「gulle」の重複であり、本来的に「golule」の口語である。「golule」には、小弾丸、小球、粒、球形、丸いなど様々な意味がある。ここでは粒、また球形の意味に捉えられ、「gulle gulle」という口語的な発音に訳された擬態語は、大粒を表している。一般に、水、雨または涙など液体の粒を表すために「qatre（滴）」という言葉を使用するが、それには少量のイメージがある。そのため、ここでは涙や雪の場合に使用される大粒また大量の状態を意味する「gulle gulle」という擬態語が使用されたことによって、SLにおける擬態語の表現の文字通りの意味伝達とともに、言外の意味伝達もなされたと思われる。

(11) [SL] あの女だ。耳隠しの頭を手ぬぐいでしっかり包んでいる夕方の女だ。
(川端、92)

[EL] It was that woman; her ear-covering hairdo was tightly bound up in a towel, but it was the same woman he had seen at the spring that evening.(40)

[PL]	Hamān	zan	bud;	mu-ha-yaš	rā
	まさにその	女	COP.IND.PAST.3SG	髪.PL.PRON.SUF.3SG	POSTP.を
	jam' karde	va	<u>dar</u>	<u>howle-i</u>	<u>mohkam</u>
	まとめる.PTCPL	CONJ	PREP	タオル.iSUF	しっかり.ADV

pīčīde bud, valī daqīqan hamān zan-i
 巻く.IND.PAST.PERF.3SG でも まさに まさにその 女.iSUF

bud ke ān šab dar češme dīde bud.(38)
 COP.IND.3SG REL.PRON その/あの 夜 PREP 温泉 見る.IND.PAST.PERF.3SG

- まさにその女だった。髪をまとめて、タオルで強く巻いていたが、まさにその夜、源で見たあの女だった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

(...) zan-e sar-e šabī ast ke mu-hā-ye model-e
 女.EZ 夕方.iSUF COP.IND.PRES.3SG REL.PRON 髪.PL.EZ スタイル.EZ

mīmīkākušī-aš rā mohkam dar howle pīčīde bud.
 耳隠し.PRON.SUF.3SG POSTP.を しっかり.ADV PREP タオル 巻く.IND.PAST.PERF.3SG

- 耳隠しの髪をしっかりとタオルに巻いていた夕方の女だ。

SLにおける「しっかりと包んでいる」という部分は、転移方略によりELには「was tightly bound up (...)」と翻訳されている。「しっかりと」という擬態語には、「tightly」という対訳が存在しているが、ELにおいては「包んでいる」という能動態が「was bound up」という受動態に変わっている。そのELはPLに「mohkam pīčīde bud (強く巻いていた)」のように転移方略を用いて訳されている。なぜなら、ペルシア語では受動態よりも能動態の方がより多く用いられる傾向があるのである。上記のように、SLからELへの翻訳およびELからPLへの翻訳における方略はともに受容化であった。PLの訳文における「強く巻いていた」という表現は、「しっかりと包んでいる」というSLの原文の文意を適切に表していると思われる。

このように、SLからELへの翻訳方略と同様にELからPLへの翻訳方略も、受容化方略であることが分かった。こうした方略の結果PLの表現は、SLの持つ擬態語の文字通りの意味、また言外の意味を伝達したと思われる。

直接SLからPLに翻訳されたPL訳文は「zan-e sar-e šabī ast ke mu-ha-ye model-e mīmīkākušī-aš rā mohkam dar howle pīčīde bud」すなわち、「耳隠しの髪をしっかりとタオ

ルに巻いていた夕方の女だ」となった。EL経由の翻訳における配慮と同様に「しっかり」は「mohkam」と翻訳された。この語には擬態語的なイメージがないが、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されたと思われる。

(12) [SL] 姉いところは鏡台の上できりきりっと銀貨を廻した。(川端、141)

[EL] His elder cousin spun a silver coin on the mirror stand.(62)

[PL] doxtar dāyī -e bozorg-tar-aš bā sekke-i
娘 おじ.EZ 大きい.COMP.PRON.SUF.3SG PREP コイン.iSUF

noqre-i ru-ye derāver šīr yā xat kard.(63)
銀の.ADJ 上.EZ 鏡台 ライオン CONJ 文字 する.IND.PAST.3SG

➤ 彼の姉いところは鏡台の上に銀貨を投げた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

doxtar-dāyī-e bozorgtar-aš sekke-ye noqre rā
娘 おじ.EZ 大きい.COMP.PRON.SUF.3SG コイン.EZ 銀の POSTP.を

mesl-e ferfere ru-ye mīz-tovālet čarxānd.
のよう 独楽 の上 .EZ 鏡台 廻す.IND.PAST.3SG

➤ 彼の母方のおじの自分より年上の娘は銀貨を独楽のように鏡台の上で廻した。

擬音語・擬態語の辞典（1978）によると、SLにおける「きりきり」には次に示すように様々な意味がある。

1. ものが勢いよく回転するさま。
2. 紐などを強く巻きつけるさま。
3. 物のきしる音を表す語。
4. 腹や頭などが鋭く痛むさま。
5. てきぱきと物事をするさま。さっさと。

このSL文における「きりきり」という表現は、1番の意味に当てはまると考えられ

る。

SLにおける「きりきりと銀貨を廻した」の「きりきり」という擬態語はELの「chop-chop, rapidly, speedily, apace, quickly」などに相当するにも関わらず、「(...)spun a silver coin)のように省略されている。それにしたがって、PLにも省略されたままである。

そして同じ文の「銀貨を廻す」という表現はELおよびPLという両言語文化圏に存在しており、それぞれ「spun a silver coin」と「šīr yā xat kard (銀貨を投げた)のように等価省略がとられている。しかし、PL訳文において「silver coin」の「silver」が省略された。上記の分析が示すようにSLからELへの翻訳と同様にELからPLへの翻訳においても受容化方略が使用された。このようなプロセスを経て生み出されたPLの訳文は「銀貨を投げた」となり、SLの「きりきり」と銀貨を廻した」という原文における擬態語が省略されたため、文字通りの意味と同時に言外の意味とのいずれも伝達されなかったと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳されたPL訳文は「doxtar-dāyi-e bozorgtar-aš sekkeye noqre rā mesl-e ferfere ru-ye mīz-tovālet čarxānd」すなわち「彼の母方のおじの自分より年上の娘は銀貨を独楽のように鏡台の上で廻した」となった。上述のように、SLにおける「きりきり」には様々な意味が存在する。ここでは上記の意味の中で3番に当てはまると捉え、もののきしる音、つまり「きーきー」または「ガリガリ」という擬音語に相当すると解釈する。「きーきー」はELにおいて「creak, squeak」に相当し、「ガリガリ」は「grate, rasp」に相当する。PLにおいては「きーきー」は「qež-qež, jīr-jīr, jīrung, xeš-xeš」などの擬音語に相当し、「ガリガリ」は「jīk-jīk, jīr-jīr, xert-xert, qer-qer, qārt-qārt」などという擬音語に相当する。しかし、上記のSL文における「きりきり」は擬音語ではなく、擬態語であり、その音を表す語ではなく、状態を表す語であるため、そのPL訳では「mesl-e ferfere」という副詞に翻訳された。「ferfere」というのは、PLにおける独楽のような玩具のことであり、きりきりと回るものであるため、動きが速いさまを表現する場合に使用される。このSL文においては「きりきり」という擬態語は勢いよく回転するものを表すため、それに対するPL訳は擬態語の形ではないにもかかわらず、文字通りまた言外の意味を表していると思われる。

(13) [SL] 娘の写真をばいと投げ出して立って行った。(川端、142)

[EL] Throwing down the photograph of the girl, she got up and left the room.(62)

[PL] aks-e ān doxtar rā ru-ye zamīn part kard.
 写真.EZ その/あの 娘 POSTP.を 上.EZ 地面 投る.IND.PAST.3SG

boland šod va az otāq bīrun raft.(64)
 立つ.IND.PAST.3SG CONJ PREP 部屋 出る.IND.PAST.3SG

➤ その娘の写真を地面に投げつけた。立って、部屋を出た。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

aks-e doxtar rā bā bītafāvotī part kard,
 写真-EZ 娘 POSTP.を PREP 素っ気なく 投げ出す.IND.PAST.3SG

boland šod va raft.
 立つ.IND.PAST.3SG CONJ 行く.IND.PAST.3SG

➤ 娘の写真を素っ気なく投げ出して立って行った。

SL における「ぼいと 投げ出して(...)」は EL に「Throwing down」のように、転移翻訳がとられ、「ぼい」という擬態語が省略されている。同様に、その EL 表現の PL への翻訳では、「ru-ye zamīn part kard (地面に投げつけた)」のように転移に付加方略がとられている。SL における「ぼいと」といのは、「物を軽く捨てたり投げたりするさま」、または、「急に立ち去るさま。ふいと。」という意味であるが、それに相当する EL が存在しないと思われる。

以上の分析から、SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略は両方とも受容化であることが明確になった。このようなプロセスを経て生み出された PL の訳文は「地面に投げつけた」となり、原文である SL の文意を適切に表していると思われるが、擬態語が省略されたので、顕在的、また潜在的な意味が伝達されていないと言えよう。

SL から直接 PL に翻訳された PL 訳文「aks-e doxtar rā bā bītafāvotī part kard, boland šod va raft」、つまり「娘の写真を素っ気なく投げ出して立って行った」においては、「ぼいと投げ出した」という SL 文は「素っ気なく投げ出した」と表現された。上述の説明によると、「ぼいと」という副詞には何気なく、また素っ気なくという意味があり、そ

れはペルシア語において「bā bī tafāvotī」、また「bā bī e'tenāyī」に相当するため、前者を使用した。このように、直接翻訳により得られた PL 訳文では擬態語的な表現は用いられていないが、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されたと思われる。

表 1. 擬音語・擬態語において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			D	C	D	C
1	受	受	×	×	○	○
2	受	受	×	×	○	○
3	受	受	×	×	○	○
4	受	受	○	○	○	○
5	受	受	○	○	○	○
6	受	受	×	×	○	○
7	受	受	×	×	○	○
8	受	受	×	×	○	○
9	受	受	×	×	○	○
10	受	受	×	×	○	○
11	受	受	○	○	○	○
12	受	受	×	×	○	○
13	受	受	×	×	○	○

まとめ

擬音語・擬態語を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べた。その結果、SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化である例文が全 13 件中 13 件の全てであった。そのうち、デノテーションとともにコノテーションも伝達された例文は全 13 件中 3 件[例(4), (5), (11)]であり、最も少なかった。SL における擬音語・擬態語が一般的な副詞の場合は、目標言語における対訳も存在する。コノテーションも伝達されたというのは、擬態語の言外の意味も伝達されたということであり、必ずしも SL と同様に PL においても擬態語という形で翻訳されたことを意味するわけではない。

デノテーションとともにコノテーションも伝達されなかった例文は 10 件[例(1), (2), (3), (6), (7), (8), (9), (10), (12), (13)]であり、最も多かった。すなわち、全例文 13 件の中で、デノテーションとともにコノテーションも伝達された例文 3 件以外の残りの全例文において、デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されなかった。したがって、デノテーションは伝達されたが、コノテーションは伝達されなかった例文、またデノテーションは伝達されなかったが、コノテーションは伝達された例文は全く見られなかった。

擬音語・擬態語におけるデノテーションとともにコノテーションも伝達されなかった例文のうち、SL の文意は PL 文に翻訳された例文が、10 件中 4 件[(7), (8), (9), (13)]存在した。その理由は以下の通りに説明される。

動詞を強調する擬音語・擬態語については、それに相当する言葉が目標言語に存在しない場合が多いため、第二訳語の PL においては配慮されない。しかし、その擬音語擬態語は特に動詞に内包される事も多く、PL にも同様な訳となる場合には原文の SL の意味は伝達されると思われる。

一方、文法構造上の問題や誤解に起因してかけ離れた翻訳となった例文も存在する。まず、例(6)においては EL 訳文に誤解が生じたため、それに基づく PL 訳も SL とはかけ離れた意味になってしまったと考えられる。例(1)の PL 訳文に見られる問題点は、EL における文法構造に対する PL 翻訳者の解釈によって生じたと言える。例(9)では PL 翻訳者の判断でかなり誇張された内容となったため、SL の原文とはまったく異なる意味を持つ翻訳になってしまった。

上記の考察から、重訳においては、擬音語・擬態語が省略され、さらには、EL 訳、または PL 訳における誤解が生じることによって、文字通りの意味ならびに言外の意

味が伝達されなかった例文は8割近く、きわめて多いことが分かった。それに対して、筆者による直接翻訳においてデノテーションとともにコノテーションも伝達されたのは、全例文13件のうち13件であった。ただしそのうち、[例9]においてはペルシア語訳が使用された動詞に内包されたため、重複また非常に口語的な表現を避けるためにあえて使用されなかった。また、例文[例(3)]では、文字通りの翻訳では不自然なPL文となるため、文全体としてのメッセージを伝達するように配慮して翻訳された。

以上の分析をふまえ、ELを経たPL翻訳においては、擬音語擬態語が省略され、誤解された場合が多かった。一方、SLからPLへの直接翻訳においては、SLにおける擬音語擬態語に相当するPL訳の擬音語擬態語が存在する場合は、その通りに翻訳された。その例として例文(2)、(6)、(10)、(12)が挙げられる。擬音語・擬態語はペルシア語にも存在するが、日本語に比べれば数は少なく、多用されない。またペルシア語の場合、擬音語・擬態語は書き言葉よりも、話し言葉等のくだけた言葉や幼児向けの小説において用いられる。目標言語に相当する擬音語擬態語が存在しない場合は、それを省略するせずに、同等の意味を有する表現に置き換えた。重訳を経ても擬音語擬態語の伝達に成功した例文[例(4)、(5)、(11)]はそもそもSLからELへの翻訳において誤解が生じていなかった。それは擬音語擬態語が動詞に内包されていなかった。一方、重訳で擬音語擬態語の意味伝達がなされない例文は、SLからPLへの翻訳に生じた誤解や、動詞に内包された強調の場合の擬音語擬態語の省略に起因していると思われる。

5. 2. 色彩語彙

人間の生活が豊かになり、文化が発達するにつれて、色彩語彙、すなわち色名を表す語も豊富になってきたが、それぞれの言語文化の違いによって、基本的な色の場合においても、その語の指す範囲は必ずしも同じではない。さらに色彩語彙においては、派生・転用した意味、比喩的象徴的な意味では、大きな違いがあることも少なくない。なぜなら、こうした現象は、言語そのものに起因することもあるが、主として社会制度、生活様式、風俗習慣に基づいて歴史的に形成されてきたものでもあるからである。日本語における色彩語彙にはそれぞれ固有の意味があり、色彩自体は区別すれば限りがないほど多様であり、また色彩語彙も多様である。さらに、日本語においては、同一の色彩について異なる呼び名を用いることも多い（蘇紅 2013:48）。

イランには、赤系統の色を例にとると、赤肉の赤色「guštī (肉色)」、レバーのような濃い紅色「jegarī (レバー色)」、ハムのようなピンク色「kālbāsī (ハム色)」、タマネギの皮のようなピンクに近い色「pust piyāzī (玉ねぎの皮色)」、ピンク色とオレンジ色の間の赤色「ājorī (煉瓦)」、ベージュ色とクリーム色の間の色「ostexānī (骨色)」、茄子の皮のような濃い紫「bādemjānī (茄子色)」といった様々な色彩語彙が存在する。イランではこのような色彩語彙の例が他にも数多く存在するが、多言語の話者にはイメージできないものも多いのではないか。また、カーキ色という日本語の色彩語彙はペルシア語に由来している。ペルシア語における「xākī」はそもそも土の色という意味で土の色をしているものに対して使用される。それは灰色とクリーム色⁸の間の色、または薄い茶色であると説明される。この「xākī」というペルシア語は英語にそのまま「khaki」と借用され、軍服の色を表すために使用される。アメリカの軍服、またインドのパンジャブ州の軍服もカーキ色だと言われるが、実際の色は同一ではない。このように色に対する意識やイメージはそれぞれの言語圏によって異なる。

それぞれの言語において、色彩語彙の中では最も中核的な位置を占めるのが、「基本色彩語彙」、あるいは「原子色彩語彙」と呼ばれるものである(皆島 2006)。上述のように、それぞれの言語における基本的な色彩語彙における範囲は異なる。この点に関して、Berlin and Kay (1962)は、基礎色彩語彙の数は言語ごとに異なっており、多種多様なバリエーションを示すが、「白」、「黒」、「赤」、「黄」、「青」、「緑」などの基礎的な色彩語彙の場合は、多くの言語において普遍性が存在すると主張している。

内田 (2014:19, 20)によると、Berlin and Kay はおよそ 100 種類の個別言語を対象に色彩語についてインフォーマント調査を実施した結果、次の三点を指摘し、これを基本色彩語と呼んだ。1) 言語によって色彩語の数は異なる。2) その色彩語に対応する色の範囲も、言語によって異なる。3) 言語の進化に伴い次第に基本色が分化し、11 語まで増える。

このように、色彩語彙の数や示す範囲は言語によって異なるため、ある言語における色彩語彙が、実際にはどのような色を指すのかを理解するのは困難であろう。

Brent & Paul (1969)によると、色名と実際の色との対応は言語間のみならず個人間においても差があり、これには文化圏や生活環境が大きく影響していると考えられる。日本語と英語を例として挙げると、日本語で赤と表現される色の領域は英語で「red」と

⁸ ペルシア語圏と日本語圏におけるクリーム色に対する認識またはイメージにおいて相違点が存在する。

➤ 黄色い服の青二才がいいのか？

この話では「黄色い服の青二才」は、兵隊に対して使われた言葉であるが、服は制服ととらえられている。「黄色い」という色は EL に「yellow-brown uniforms」と等価方略で訳されている。その理由として、EL 文化圏において兵隊の制服つまり、軍服は黄褐色であったのではないかと考えられるのである。また、皇軍は軍服が薄茶色またはカーキ色であったようである。軍服の色に対して lelland (2005:136)以下のように述べる。

三島由紀夫が 1960 年に間接侵略に備えるための民間防衛組織すなわち民兵として、楯の会という軍队的な集団結成した。Scott-Stokes は彼らの軍服に対して狡そうに、「黄褐色であり、輝いている真鍮のボタン列の素敵な軍服は三島の若い者にくびれた腰を与えた」と意見を述べた。ここでは、軍服に対して「yellow-brown (黄褐色)」という色が使用された。「黄褐色」という色は程よい黄色から濃い褐色がかった黄色のことであり、一般的に黄色帯びた色合いの一つである。しかし、SL における「黄色い服の…」という表現は青二才に対する屈辱的なことばであるため、「黄色い服」と軽く使用されたのではないかと思われる。EL における「yellow-brown」は PL において「uniform puš (制服を着てる)」と訳され、ここでは転移方略とともに色を省略する方略がとられている。それは、PL 圏における軍服は「yellow-brown」ではなく、EL をそのまま PL に訳すと齟齬が生じる恐れがあり、むしろ制服だけの方がメッセージが伝わるとの訳者の判断により、暗示化されたのではないかと考えられる。

上記の例では、SL から EL、また EL から PL への翻訳方略は両方とも受容化方略である。こうした方略を用いて翻訳された「制服を着てる」という PL の文には、「黄色い服」の SL の文字通りの意味、ならびに言外の意味とともに伝達されなかった。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「juje fokolī-hā-ye lebās zard xub-an?」すなわち「黄色い服の青二才がいいのか？」となり、脚注において「黄色い服」に対して「皇軍は色が薄い茶色または、黄褐色だといわれが、この分において屈辱的な言い方として『黄色い服』と使用された」という説明を記載する。その結果、この直接訳による PL 文では、SL 文の文字通りの意味とともに内包的な意味も伝達されたと思われる。

(2) [SL] 駄菓子を並べた待合所の二階から、紫の襟の黄色い服を着た運転手が下りて来る。(川端、111)

[EL] The bus driver came down from the second floor of the terminal to the waiting

area, where cheap candy shops stood in a row. He wore a purple collar on his yellow uniform.(41)

[PL] rānande-ye otubus az tabaqe-ye dovvom-e termināl be
 運転手.EZ バス PREP 階.EZ 2目.EZ 終着駅 PREP

salon-e entezār dar tabaqe-ye pāyīn āmad ke
 待合所 PREP 階.EZ 下 来る.IND.PAST.3SG REL.PRON

dar ān dakke-ha-ye foruš-e tanaqqolāt-e arzān-qeimat
 PREP それ/あれ 屋台.PL.EZ 販売.EZ お菓子.PL.EZ 安価の.ADJ

be radīf kenār-e ham čīde šode bud. yaqe-ye banafš-i
 PREP 列 並んで.ADV 並ぶ.IND.PAST.PERF.3SG 襟.EZ 紫.iSUF

ruye oniform-e zard rang-aš baste bud.(39)
 のうえ.EZ 制服.EZ 黄色い.PRON.SUF.3SG 結ぶ.IND.PAST.PERF.3SG

- バスの運転手は、ターミナルの2階から、安菓子を売る屋台の並ぶ階下の待合所に来た。(彼は)彼の黄色い制服には紫色の襟をつけていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

rānande ke lebās-e zard bā yaqe-ye banafš be tan dāšt
 運転手.EZ REL.PRON 服.EZ 黄色 PREP 襟.EZ 紫 着た.IND.PAST.3SG

az sālon-e entezār-e tabaqeye dovvom ke dar ān
 PREP 待合所.EZ 階.EZ 2目.EZ REL.PRON PREP それ/あれ

maqāze-hā hale-hule čīde budand payīn mīāyad.
 店.PL 駄菓子 並べる.IND.PAST.PERF.3PL 下りる.IND.PRES.3SG

- 紫の襟の黄色い服を着た運転手はお店が駄菓子を並べた待合所の2階から下りてくる。

SLの「紫の襟の黄色い服を着た(...)」という表現はELには「He wore a purple collar on his yellow uniform」と等価、さらに転移方略が取られている。決まっている色合わせの服である為か「服」は「uniform」と翻訳され、色は適切に表されている。しかし、なぜか「彼は黄色い制服の上に紫の襟をつけている」と翻訳されている。そしてELの「He wore a purple collar on his yellow uniform」という文は、PLでは等価方略を用いて「yaqe-ye banafši ruye oniform-e zard rang-aš baste bud」、すなわち「(彼は)彼の黄色い制服には紫色の襟をつけていた」と記述された。このPL訳では文章はわずかに変わったが、その意味が伝達されたと思われる。特に「紫」および「黄色」という記号はELとともにPLにおいても存在する概念である。上記の例文においては、これらの色彩語彙が修飾している名詞の組み合わせにも特別な言外の意味は含まれていないと思われるため、原文であるSLの意味が、ELを経由したPL翻訳にも適切に伝えられたと言える。上述のように、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略はどちらも受容化方略である。色の訳は適切になされていると思われ、SLの「紫の襟の黄色い服を着た(...)」という原文とPLの「(彼は)彼の黄色い制服には紫色の襟をつけていた」という訳文との間では、色彩語彙に対するデノテーションとともにコノテーションも伝達されたと考えられる。

筆者によって日本語からペルシア語に直接翻訳された訳文は「rānande ke lebās-e zard bā yaqe-ye banafš be tan dāšt az sālon-e entezār-e tabaqeye dovvom ke dar ān maqāze-hā halehule čide budand payīn miāyad」、すなわち「紫の襟の黄色い服を着た運転手はお店が駄菓子子を並べた待合所の2階から下りてくる」となった。文章には多少の変化が見られるが、色に関しては重訳を経た訳出と同様であった。

(3) [SL] 可愛らしい 五色の提燈 の灯の一団が寂しい田舎の稻荷祭りのように揺れていたからである。(川端、21)

[EL] a bobbing cluster of beautiful varicolored lanterns, such as one might see at a festival in a remote country village.(12)

[PL] čandin fānus-e rangārang-e zībā dāšt tekān tekān mīxord,
いくつかの カンテラ.EZ 色とりどりの.EZ 綺麗 ふらふらする. IND.IMPF.3SG

sahne-i ke dar jašn-i dar rustāy-i
風景.iSUF REL.PRON PREP お祭り.iSUF PREP 村.iSUF

dur-oftāde mītavān dīd.(23)
 離れた.ADJ 見られる.IND.PRES

- 美しい 色とりどりのカンテラ がゆらゆらとしていた。遠く離れた村のお祭りで見られるような光景。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

yek daste fānus-e kāqazi-e panj-rang-e qašang mānande fānus-hā-ye jašn-e
 一 団 カンテラ.EZ 紙の.EZ 五色の.EZ かわいい のよう.EZ カンテラ.PL.EZ 祭り.EZ

inārī dar yek rustā-ye xalvat dar hāl-e tekān xordan budand.
 稲荷(祭り) PREP 一 田舎.EZ さびしい の様子.EZ 揺れること.INF COP.IND.PAST.3PL

- 可愛い五色の提灯の一団がさびしい田舎の稲荷祭りのように揺れていた。

SLにおける「五色の提燈」という表現は等価および翻案方略を用いて、「varicolored lanterns」に翻訳されている。当然ながら EL には「five colored」という対訳も存在しているが、ここでは暗示化され、「varicolored」と翻訳されている。しかしこの話では、「五色」という記号は「色とりどり」という意味よりも、古代から SL 圏で使用される具体的に五つの色を示すと思われる。何れにしても、EL 圏では「five colored」と言う文字通りの特別な概念が存在しないので、上記の通りに「varicolored」と翻訳されている。この EL の表現は等価方略を使用して「fānus-e rangārang (色とりどりのカンテラ)」と PL に翻訳された。この例文において挙げられたのは色彩語彙そのものではなく、五色と言う概念の翻訳であった。上記のように、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はともに受容化であった。三文化圏における差異に起因して、「五色の (...)」という SL の原文は PL には「色とりどりの (...)」と暗示化され、デノテーションはある程度伝達されたが、コノテーションは伝達されず、読者に与える印象が多少異なる結果となったと思われる。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「yek daste fānus-e kāqazi-e panj-rang-e qašang mānande fānus-hā-ye jašn-e inārī dar yek rustā-ye xalvat dar hāl-e tekān xordan budand」すなわち「可愛い五色の提灯の一団がさびしい田舎の稲荷祭りのように揺れていた」となった。SL における「五色」はその通り「panj-rang」と PL に翻訳される

ことにより、明示化されたため、文字通りの意味とともに内包的な意味も伝達されたと思われる。

(4) [SL] 店で買ったらしい小さい紅提燈もある。(川端、21)

[EL] There were even some little red store-bought lanterns.(12)

[PL] hattā čand fānus-e qermez-e kučak nīz bein-e
 でも いくつかの カンテラ.EZ 赤い.EZ 小さい も 間.EZ

ānhā dīde mīšod- az ān fānus-hā-yī
 それら/あれら 見える.IND.IMPF.3SG PREP その/あの カンテラ.PL.iSUF

ke dar forušgāh-hā mīforušand.(24)
 REL.PRON PREP 店.PL 売る.IND.PRES.3PL

➤ その中には、いくつか小さい赤カンテラも見えていた。—お店で売っているような、ああいうカンテラの類いだ。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

fānus-hā-ye kāqazi-e kučak-e sorx rang ke dar maqāze
 カンテラ.PL.EZ 紙の.EZ 小さい.EZ 紅色 REL.PRON PREP 店

mīforušand nīz hast.
 売る.IND.PRES.3PL も COP.IND.PRES.3SG

➤ お店で売っているような小さい紅色の提灯もある。

SLにおける「店で買ったらしい小さい紅提燈もある」は転移および等価方略を使用して「There were even some little red store-bought lanterns」とELに翻訳されている。「らしい」という助動詞を用いた「店で買ったらしい」という表現は「store-bought」という形容詞に転移されている。しかし、この文における「...らしい」は「...のように見える」または、「...と思われる」という意味であるため、「it seems that」あるいは、「look」という翻訳も考えられる。「紅」は「red」に等価翻訳されている。前の例文において、SLにお

ける「紅」は「crimson」とELに翻訳された。このSLにおける色彩語彙に対して、ELには他に「deep red」および「vermilion」という対語も存在しているが、「紅」という色は鮮明な赤、また美しい赤という言外の意味を持っているため、「red」すなわち「赤」だけでは物足りないような気がする。このEL表現は付加的な等価方略を用いて「hattā čand fānus-e qermez-e kučak nīz bein-e ānha dīde mišod- wwaz ān fānus-hā-yī ke dar forušgāh-hā mīforušand」つまり、「その中には、いくつか小さい赤カンテラも見えていた。お店で売っているような、ああいうカンテラの類いだ」とPLに翻訳されている。ELにおける「red」は「qermez (赤)」に翻訳された。SLにおける「紅」はPLにおける「sorx」という美しい赤のような言外の意味を持っている色彩語彙に相当するが、ELを経た翻訳のため、上記のように翻訳された。このように、SLからELへの翻訳およびELからPLへの翻訳における方略はともに受容化であった。こうした方略を用いて翻訳されたPLの文は、説明的になっており、色彩語彙はSLの文字通りの意味を伝達したが、言外の意味を伝達しなかったと思われる。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「fānus-hā-ye kāqazi-e kučak-e sorx rang ke dar maqāze mīforušand nīz hast」すなわち「お店で売っているような小さい紅色の提灯もある」となった。SLにおける「紅」は「sorx」とPLに翻訳し、文字通りの意味とともに内包的な意味も伝達されたと思われる。

(5) [SL] そして提燈の一つ一つが 紅桃色藍緑紫黄 などの灯をともしているばかりでなく、一つの灯が五色の光をともしているのである。(川端、21)

[EL] Not only were there crimson, pink, indigo, green, purple, and yellow lanterns, but one lantern glowed with five colors at once. (12)

[PL] īn fānus-hā na tanhā be rang-e zereškī, suratī, nīlī,
この カンテラ.PL のみならず PREP 色.EZ 深紅色 ピンク 藍色

sabz, banafš va zard budand, ke yekī az
緑色 紫 CONJ 黄色 COP.IND.PAST.3PL REL.PRON 一.iSUF PREP

ānhā be tanhāyī panj rang dāšt.(24)
それら/あれら PREP 単一 五 色 持つ.IND.PAST.3SG

- こうしたカンテラは、深紅やピンク、藍色、緑、紫、黄色のものがあるだけでなく、その中の一つには、一つのカンテラで五色というものもあった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

tak tak-e fānus-hā-ye kāqazī na tanhā nur-hā-ye be rang-e sorx, holuyī,
一つ一つ.EZ カンテラ.PL.EZ 紙の のみならず 光.PL.EZ PREP 色.EZ 紅 ピーチ色

nīlī, sabz, banafš va zard dāštand, balke yekī az ānhā
藍色 緑 紫 CONJ 黄色 持つ.IND.PAST.3PL REL.PRON 一つ PREP それら/あれら

nur-e panj-rang dāšt.
光.EZ 五色 持つ.IND.PAST.3SG

- 一つ一つの提灯は紅、ピーチ色、藍色、緑、紫、黄色の光をともしているだけでなく、その中一つは五色の光をともしていた。

色彩語彙には果物から付けられた場合も多いが、果物の種類はそれぞれの言語圏によって大きく異なり、同一の場合でもニュアンスが異なる場合がある。したがって、色彩語彙は翻訳が難しいことも多い。

SLにおける「紅桃色藍緑紫黄」と言った色は等価方略を用いて「crimson, pink, indigo, green, purple, and yellow」とELに翻訳されている。このEL表現は等価方略を用いて「zereški, surati, nīlī, sabz, banafš va zard」すなわち、「深紅やピンク、藍色、紫、紫、黄色」と翻訳されている。SLにおける一般的な色彩語彙は問題なくELまたPLに翻訳されたが、SLの「桃色」はELにおいて果物に関係のない「pink」に翻訳されている。「桃色」に相当するもう一つの言葉は「rose-colored」であるが、これも同様に果物に関連していない概念である。ELには「peach」という色もあるが、この語はSLにおける桃色のようにピンクではなく、オレンジ色がかったピンク色のことを示す。

また、ELにおける「crimson」という色名は「zereškī (深紅)」とPLに翻訳されている。このPL色彩語彙はもともと「zerešk」すなわち「メグ」あるいは「ヒロハヘビノボラズ」という果物の色を表している。このように、SLからEL、またELからPLへの両翻訳において受容化方略が用いられている。三文化圏に存在する果物等がそれ

ぞれに異なることに起因して、「紅桃色藍緑紫黄」という SL の原文は PL には「深紅やピンク、藍色、緑、紫、黄色」と訳されている。こうした差異は全ての色彩名に当てはまるわけではないが、上記の色彩名の場合は、顕在的な意味すなわちデノテーションが伝達されたが、潜在的な意味つまりコノテーションは伝達されなかったと思われる。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「tak tak-e fānus-hā-ye kāqazī na tanhā nur-hā-ye be rang-e sorx, holuyī, nīlī, sabz, banafšva zard dāštand, balke yekī az ānhā nur-e panj-rang dāšt」すなわち「一つ一つの提灯は紅、ピーチ色、藍色、緑、紫、黄色の光をともしているだけではなく、その中一つは五色の光をともしていた」となった。色彩語彙はほとんど重訳を経た訳出と同一であるが、SL における「紅」は「sorx」と上記の例文と同様、また「桃色」は「holuyī (ピーチ色)」と PL に翻訳された。ピーチ色は桃の果物の色であり、薄いオレンジ色であるため、日本語における桃色に対するニュアンスを伝えるために、脚注において「日本においては果物よりも花が注目されているため、桃色は果物ではなく、やや紫みがかかった鮮やかさのあるピンクの桃の花の色を表す」とペルシア語で説明する。この直訳による PL 文では、色彩語彙に対する文字通りの意味とともに内包的な意味も伝達されたと思われる。

(6) [SL] 「あら！鈴虫だわ。バッタじゃなくってよ。」と、女の子は褐色の小さい虫を見て眼を輝かせた。(川端、23)

[EL] “Oh! It’s not a grasshopper. It’s a bell cricket.” The girl’s eyes shone as she looked at the small brown insect. (14)

[PL] “vāi! In ke malax nīst.
INTRJ! これ REL.PRON バッタ COP.NEG.IND. PRES.3SG

jīrjīrak-e.” češmān-e doxtarak bā dīdan-e
鈴虫-口語.COP.IND.PRES.3SG 眼.PL.EZ 少女 PREP 見る.INF.EZ

hašare-ye qahveī-e kučak barq zad. (26)
虫.EZ 茶色.EZ 小さい 輝く.IND.PAST.3SG

- 「あら！これはバッタじゃなくて、コオロギよ。」 小さい 茶色の 虫を見て少女の眼が輝いた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

vai, īn suzumušī*-e . malax nīst ke.
INTRJ これ 鈴虫-口語.COP.IND.PRES.3SG バッタ COP.NEG.IND. PRES.3SG REL.PRON/よ

češmān-e doxtarak bā dīdan-e hašare-ye kučak be rang-e
眼.PL.EZ 少女 PREP 見る.INF.EZ 虫.EZ 小さい PREP 色.EZ

qahveī-e suxte barq zad.
茶色.EZ 焦げた.ADJ 輝く.IND.PAST.3SG

- 「あら、これは鈴虫だ。バッタじゃないよ。」 褐色の小さい虫を見て少女の目が輝いた。

SLの「褐色の小さい虫」は等価方略を使用して「brown」とELに翻訳されている。「褐色」という色彩名はELの「brown」または、「sun-tanned」に相当するが、ELにおける「brown」に相当するSLの色彩名は「茶色」、「褐色」や「とび色」もあり、翻訳が難しい。このELは等価方略を用いて「hašare-ye qahveī-e kučak（小さい茶色の虫）」とPLに翻訳されている。ここで使用されている「qahveī」というPLの色彩語彙は、本来は「コーヒーの色をしている」という意を有している。上記の分析が示すようにSLからELへの翻訳と等しくELからPLへの翻訳においても受容化方略が使用され、SLにおける「褐色」はEL翻訳を通して「茶色」というPL訳語になり、普遍的な意味は伝達されたが、内示的な意味は伝達されなかったと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳されたPL訳文における色彩語彙は「qahveī-e suxte（褐色）」になった。それぞれの色には様々な色合いが存在する。茶色もその一つである。上述の通り訳出した「qahveī-e suxte」は焦げた茶色を意味し、褐色に対する一般的な意味に加えて内示的な意味、すなわちニュアンスも伝達されたと思われる。

- (7) [SL] 全くそれは 青い葉 のある珊瑚樹のように見える程紅い実がみごとに実っている。(川端、118)

[EL] crimson berries were splendidly ripe, as if green leaves had grown on a branch of coral.(46)

[PL] dāne-h-ye zereškī rang-e senjed xeilī xub
粒.PL.EZ 深紅色.EZ センジェッド (グミの一種) とても よく

resīde bud, engār barg-hā-ye sabz ruye
熟する.IND.PAST.PERF.3SG まるで 葉.PL.EZ 緑色の の上.EZ

šāxe-i marjānī ruyīde bāšad. (45)
枝.iSUF 珊瑚の 生える.IND.SUBJ.PRES.3SG

- センジェッドの深紅色の実はとてもよく熟していて、まるで珊瑚樹に緑の葉が生えたかのようであった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

dāne hā-ye sorx -rang-e mīve beqadrī kamel resīde and ke
粒.PL.EZ 紅色.EZ 実 なんと 十分に 熟する.IND.PRES.PERF.3SG REL.PRON

guyī ruye šāxe-ye marjānī barg-hā-ye sabz ruyīde ast.
まるで の上.EZ 枝.EZ 珊瑚の 葉.PL.EZ 緑色 生える.IND.PRES.PERF.3SG

- 実の粒は十分に熟していて、まるで珊瑚樹の上に緑色の葉が生えたかのようである。

SLにおける「全くそれは 青い葉の ある珊瑚樹のように見える程紅い実がみごとに実っている」という原文は転移および等価方略を用いて「The crimson berries were splendidly ripe, as if green leaves had grown on a branch of coral」とELに翻訳されている。青い葉のある珊瑚樹」というSLの表現については、「青い」が転移的な等価方略を用いて「green」と翻訳された結果、ELでは「green leaves had grown on a branch of coral」と述べられている。「紅い実がみごとに実っている」というSLも同様に転移的な方略を用いて「The crimson berries were splendidly ripe」とELに翻訳されている。「紅い」というのは「crimson」、
「実」が「berries」と明示化された複数形を用いて翻訳されている。このEL表現は転移および付加的な等価方略を使用して、「dāne-hā-ye zereškī rang-e senjed xeilī xub resīde

bud, engār barg-hā-ye sabz ruye šāxe-i marjānī ruyīde bāšad」すなわち、「センジェッドの深紅色の実はとてもよく熟して、まるで珊瑚樹に 緑の葉が生えたかのようであった」という PL に翻訳されている。上述のように、SL から EL、また EL から PL への翻訳方略はともに受容化方略である。また、本節の冒頭で述べたように、日本語では「青信号」と呼ばれる信号機にあたる英語ならびにペルシア語の表現はそれぞれ「green light」「cherāgh-e sabz」、すなわち緑信号である。こうした三言語文化圏における差異を考慮すると、原文の「青い葉」を「緑の葉」と訳すことは適切であろう。また SL の「紅い実」は PL 訳では「センジェッドの深紅色の実」と具体化されている。SL における「紅い」という色彩語彙に関して、は上記の例文 (4)において分析を行った。この例文における SL の「青い葉」の「緑の葉」という PL 訳においては、一見すると文字通りの意味が伝達されなかったように見えるが、実際には「青信号」についての考察からわかるように、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されたと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文は「dāne hā-ye sorx -rang-e mīve beqadrī kāmēl resīde and ke guyī ruye šāxe-ye marjānī barg-hā-ye sabz ruyīde ast」つまり「実の粒は十分に熟して、まるで珊瑚樹の上に緑色の葉が生えたかのである」となった。SL における「青い葉」は「緑の葉」という PL になった。この表現については、上記の考察が示すように字義的には異なる語彙となっているが、実はそれぞれ認識されるイメージは同じである。したがって、この例文の場合は重訳および直接訳の双方が、文字通りの意味とともに言外の意味伝達にも成功したと思われる。

表 2. 色彩語彙において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			D	C	D	C
1	受	受	×	×	○	○
2	受	受	○	○	○	○
3	受	受	○	×	○	○
4	受	受	○	×	○	○
5	受	受	○	×	○	○

6	受	受	○	×	○	○
7	受	受	○	○	○	○

まとめ

色彩語彙を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べたところ、全ての例文における SL から EL、また EL から PL への翻訳方略はいずれも受容化であることが分かった。その中で、SL におけるデノテーションおよびコノテーションの両方も伝達された例文は 2 件[例(2), (7)]である。その理由は、当然ながら、それぞれの言語において、色彩語彙は文化や自然等によって異なるが、基本の色彩語彙はほとんど共通しており、ここで使用された色彩語彙はその基本的な色彩語彙の範疇に属するためである。色彩語彙は名詞と形容詞に分かれているが、形容詞の場合は、翻訳は、色彩語彙自体だけではなく、その色彩語彙によって修飾される名詞によって、変化する。

デノテーションは伝達されたが、コノテーションは伝達されなかった例文は 4 件[例(3), (4), (5), (6)]と多数を占める。その理由は、それぞれの色彩における色合いのイメージが一致しない、または SL 圏と EL 圏および PL 圏との間におけるニュアンスが異なるからである。デノテーションまたコノテーションの両方が伝達されなかった例文は 1 件[例(1)]と少ない。しかし、コノテーションが伝達されなかった例文は合わせて 5 例であり、遥かに多い。例文(1)では SL における色彩語彙が PL 訳文において省略されたため、当然ながらコノテーションについては配慮されなかった。

デノテーションは伝達されなかったが、コノテーションは伝達された例文は見られなかった。例文(7)において、デノテーションは伝えられなかったように見えるが、SL における「青」という概念は EL また PL においてそれぞれ「green」および「sabz」とデノテーションの面からは異なっているように見えるはいるが、コノテ

ションの上で一致しているため、デノテーションも伝達された捉えることができる。

上述のように、SLの日本語における色彩語彙がELを通してPLに翻訳された文中で原文のメッセージが伝達されたと言えるのは、コノテーションの伝達に成功したケースだと思われる。言い換えれば、デノテーションは伝達されたが、コノテーションは伝達されなかった例文は、メッセージが伝わっていないと考えられる。色彩語彙においてSLのコノテーションは伝達されなかった例文は全例文の7件のうち、5件であり、原文の約7割のメッセージが伝達されなかったといえよう。その理由としては、上述の通り、それぞれの言語における色彩語彙に対応する色の認識、または範囲も異なるため、そのニュアンスも伝達されないことが挙げられる。一方、重訳翻訳を経ても色彩語彙に対するニュアンスが伝達された例文においては、色範囲または比喻や文化背景との関連が少なく、基本的な色彩語彙に属する色が取り上げられていたためと思われる。

このように、色彩語彙の重訳においてコノテーション（ニュアンス）が伝達されなかった理由は、重訳の過程で色の範囲やその認識の理解が変化もしくは消失してしまったためと言えよう。

重訳の場合と比較すると、筆者による直訳においては、SL文中のそれぞれの色彩語彙について字義的な意味のみならず内包される意味にも考慮を払い、できるだけふさわしいペルシア語の色彩語彙を選択するように努めた。またそれでもコノテーションが伝えきれない恐れがある場合には、脚注を用いて解説することにより、PL読者の理解に向けて便宜を図った。その結果、直訳においては全例文においてデノテーションならびにコノテーションの伝達が可能となった。

5. 3. 社会言語学的次元の言葉

それぞれの社会には、特有に使用される言葉が多少存在する。その社会の背景知識を有しないと、言語を他の言語に訳すのは容易ではない。挨拶の言葉、呼称、肩書、一人称代名詞、二人称代名詞に使用される様々な言葉などは日本語には存在しているが、英語やペルシア語に存在しないか、あるいは存在するとしても日本語ほど多種多様ではない。尊敬語・謙譲語という表現はペルシア語には存在しているが英語には言葉として存在していないので、英語を起点とするペルシア語翻訳には対応されていないようである。

5. 3. 1. 挨拶表現

日本国語大辞典によると、挨拶とは以下の五通りに定義される。

1. 人と人との間柄、両者の仲、交際、付き合い
2. 交際を維持するための社交的礼儀。人と会った時、別れる時などに取り交わす礼儀、応答の言葉や動作
3. 儀式、就任、解任などの時、祝意、謝意、親愛の意などを述べること
4. 手紙の往復、応答のことば
5. 仕返しをいう不良仲間の隠語

また、渡辺（1977）によると、挨拶とは、「コミュニケーションの開始や社会関係の維持を円滑、快適にすることを目的とし、その社会によって期待された生活の定義の場面において交わされる、定型的、儀礼的な言動である（1977:198）」と定義される。

いずれの国においても、日常の挨拶表現は、人間が社会的な関係を維持するために重要なものである。日本人は、様々な社会的な場面や人間関係の中において、かなり複雑で多様な挨拶の表現を幅広く使用するため、日本語におけるこうした挨拶表現は、外国人にとっては習得が困難である（皇他 1996:247）。

同様の事情は、多数の敬意を示す言葉や挨拶表現を有するペルシア語においても見受けられ、この点が、外国人がペルシア語を習得する上での大きな障害となっている。イランと日本との間には共通する背景文化がかなり存在するため、ペルシア語および日本語における多様な挨拶表現の中には、類似した意味を持つものも多い。

一方、英語圏においては敬意を表す言葉は存在しないわけではないが、挨拶表現はそれほど多くない。また、イランと日本との間と比較すると、英語圏では背景文化が異なるため、挨拶表現の意味が相違する場合が多いと思われる。このように、文化と密接に関連している挨拶表現などは、異なる文化を持つ国の言葉に翻訳しにくいと推定される。

以下に挨拶表現が含まれた具体的な例文を挙げ、どのような翻訳方略が使用されたか、また重訳がどのような影響を及ぼしたかを調査する。

- (1) [SL] うどん屋のおじさんはもうのれんを入れるところでとても迷惑そうだったが、どうぞ、といやいや言ってくれたので、歩き疲れてとにかくすわり

たかった私は、中に入った。(吉本、18)

[EL] The owner was just about to close up and seemed extremely annoyed to see me, but he grudgingly told me to come in, so I did. I was worn out from walking, and dying to sit down. (11,12)

[PL] sāheb-e maqāze guyā qasd-e ta'tīlī dāšt va
持ち主.EZ お店 のようだ つもり.EZ 閉めること 持つ.IND.PAST.3SG CONJ

dīdan-e man be šeddat āzorde xāter (-aš) kard,
見る.INF.EZ 私 すごく 心を傷つける.IND.PAST.3SG (PRON.SUF.3SG)

valī bā bīmeilī ta'ārof kard ke vāred šavam .
しかし PREP しぶしぶ 招く.IND.PAST.3SG REL.PRON 入る.IND.SUBJ.1SG

vāred šodam. az piāde ravī-e tulānī moddat be šeddat xaste budam
入る.IND.PAST.1SG PREP 散歩.EZ 長時間 すごく 疲れる.IND.PAST.1SG

va āmādegī-e har kārī dāštam tā faqat
CONJ 準備.EZ なんでも 持つ.IND.PAST.1SG REL.PRON だけ

čand lahze bešīnam. (22)
数 秒 座る.IND.SUBJ.1SG

- お店の主人は閉店するつもりで、私を見ると、とても気を悪くしたようだった。しかし、それでもいやいや 中へ入るように招いてくれた。中に入った。長時間歩いてとても疲れていて、数秒座るために、何でもやる心づもりがあった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mard-e udon foruš* ke dīge mīxāst kerkere-ye
男.EZ うどん屋 REL.PRON もう 欲しがる.IND.IMPF.PAST.3SG シャッター.EZ

maqāze-ašo pāyīn bekeše, bā dīdan-e man čehre dar ham kešīd
店.PRON.SUF.3SG おろす.IND.SUBJ.3SG PREP 見ること.EZ 私 顔をしかめる.IND.PAST.3SG

o bā bīmeilī be man goft ”befarmāyīd”. man ke
 CONJ(口語) PREP しぶしぶ PREP 私 言う.IND.PAST.3SG どうぞ 私 REL.PRON

az rāh raftan xaste šode budam va faqat
 PREP 歩くこと 疲れた.ADJ になる.PAST.PERF.1SG CONJ だけ

mīxāstam jā-yī benšīnam, vāred šodam.
 欲しがる.IND.IMPF.PAST.1SG どこか 座る.IND.SUBJ.1SG 入る.IND.PAST.1SG

- うどん屋のおじさんはそのお店のシャッターを閉めるところで、私を見ると、顔をしかめて、いやいや私に「どうぞ」と言ってくれた。歩くことに疲れて、どこか座りたかった私は中に入った。

SL における「どうぞ、といやいや言ってくれた」という部分は、EL において「he grudgingly told me to come in」のように調整方略と翻案方略とを用いて翻訳されている。「どうぞ」という言葉は、EL では「come in」と文中に埋め込むかたちで、翻訳されている。そしてその EL の表現は、PL には「bā bīmeilī ta’ārof kard ke vāred šavam」つまり、「いやいや中へ入るように招いてくれた」という転移方略で翻訳されている。SL における「どうぞ」という挨拶の言葉は PL の「befarmāyīd」という言葉に相当するにもかかわらず、英語を経由した翻訳のため、抜けてしまった。EL においては、「どうぞ」という SL には場面によって様々に使用される等価の言葉が存在しているが、この EL 訳では使用されなかった。PL においては、SL の「どうぞ」に完全に相当する言葉が存在している。なぜなら、イランも日本と同様に対人関係に関する言葉が数多く存在しているという文化的な共通点を有するからである。そのため、SL における「言ってくれた」という表現は EL においては言葉通りに「told me」と翻訳されたにもかかわらず、PL では「ta’ārof kard ke vāred šavam」つまり「入るように招いてくれた」という「どうぞ」のニュアンスが入った表現に翻訳された。上述の通り、挨拶の言葉は、SL から EL、また EL から PL への翻訳方略のどちらにおいても受容化方略が使用されている。こうした方略を用いて翻訳された「いやいや中へ入るように招いてくれた」という PL の文は、「どうぞ、といやいや言ってくれた」という SL の文字通りの意味をある程度は伝え、またその語感、すなわち言外の意味も直接ではないが、雰囲気的に伝わっていると言える。

筆者によって直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳は「be man goft “befarmāyīd”」すなわち「私にどうぞ、と言ってくれた」となった。ペルシア語にどうぞに相当する語が存在するため、そのまま翻訳するのは可能であり、したがって直接翻訳においてはデノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(2) [SL] これは恐れ入った。(川端、103)

[EL] I'm awestruck. (59)

[PL] man motehayyer-(am). (59)
私 驚いた.ADJ (COP.IND.PRES.1SG)

➤ 私は驚いている。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

1) man kam āvordam(口語).

2) man taslīm-am.

私 負かされた.ADJ (COP.IND.PRES.1SG)

➤ 私は参った。

SLにおける「これは恐れ入った」はELに「I'm awestruck」のように転移方略で翻訳され、動詞が形容詞に変わり、主語が付加されている。このELのPLへの翻訳に際しては、等価方略がとられている。「恐れ入る」という表現は、敬意と尊敬と驚きと恐怖が混合した感情を持つ、または、敬意と尊敬と驚きと恐怖が混合した感情を見せているという意味であるように、尊敬の意味や、特に恐縮を込めた敬意を表すために主として使用される。または、相手の優れている点に、すっかり感心して、まいったと思う、閉口する意味もある。

ELにおいては、この表現は「awestruck」と訳されている。しかしそのPL訳は「motehayyer」と言う、「驚く、びっくりする、あっけにとられる」を意味する言葉に翻訳されたので、SLと異なる語感を持つようになってしまった。

このように、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略のどちらにおいても受容化方略が使用されている。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、「これは恐れ入った」というSLの原文とPLの訳文の「私は驚いている」との間には、原文の文字通りの意味が伝達されたが、若干の含意のずれが生じたと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳されたPL訳文は「man kam āvordam (口語)、または (man taslīm-am)」すなわち、「私は参った」となった。「参った」というのは相手の力や能力に負けて降参したということを相手に表明する語彙であり、閉口する場合に使用される。このようにデノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

- (3) [SL] そして彼は写真の娘に清らかな挨拶をすると、大いなる神を感じた。
(川端、143)

[EL] And then, with a clear-hearted greeting to the girl in the photograph, he felt the greatness of God. (64)

[PL] va ba'd bā delī rowšan zemn-e xošāmad-guyī
 CONJ それから PREP 心.iSUF 明るい の間に.EZ 歓迎の言葉を言うこと

be doxtarī ke dar aks bud,
 PREP 娘.iSUF REL.PRON PREP 写真 COP.IND.PAST.3SG

‘azemat-e xodāvand rā ehsās kard. (65)
 偉大さ.EZ 神様 POSTP.を 感じる.IND.PAST.3SG

- その後、彼は 明朗な心持ちで 写真の娘に 歓迎の言葉を言いつつ、神様の偉大さを感じた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

va u pas az īnke bā delī pāk ba doxtar-e
 CONJ 彼/彼女 ~てから REL.PRON PREP 心.iSUF 清らかな PREP 娘.EZ

dāxel-e aks, salām o ahvālporsī kard xodāvand-e bozorg rā
 中.EZ 写真 挨拶 する.IND.PAST.3SG 神.EZ 大いなる POSTP.を

dar del ehsās kard.
PREP 心 感じる.IND.PAST.3SG

- そして彼は清らかな心で写真の中の娘と挨拶をすると、大いなる神を心の中で感じた。

SLにおける「清らかな挨拶」は付加的な等価な方略を用いて「clear-hearted greeting」とELに翻訳されている。SLの「清らか」はELの「pure」に相当する。さらに、「pure greeting」という表現もELに存在している。それにもかかわらず、EL訳文では、翻訳者の判断で、あまり耳にしない「clear-hearted」という語に翻訳されている。この表現はPLに「bā delī rowšan zemn-e xošāmad-guyī」すなわち「明朗な心持ちで写真の娘に歓迎の言葉を言いつつ」のように翻訳されており、ここで付加的な等価方略が取られている。ELにおける「greeting」という言葉は、PLにおいて、「挨拶、敬意、祝賀や歓迎」という言葉に相当するが、上記の例文では、「歓迎」と翻訳された。

上記の分析が示すように、上記の例における挨拶の言葉の翻訳において、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略のどちらにおいても受容化方略が使用されている。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、SLの原文である「清らかな挨拶をする」は「明朗な心持ちで写真の娘に歓迎の言葉を言いつつ」というPLの訳文となっており、「挨拶をする」というSLは「歓迎の言葉を言う」というPLとなり、文字通りの意味に若干のずれが生じ、言外の意味の伝達もなされなかったと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳されたPL訳文は「va u pas az īnke bā delī pāk bādoxtar-e dāxel-e aks, salām o ahvālporsī kard xodāvand-e bozorg rā dar del ehsās kard」要するに「そして彼は清らかな心で写真の中の娘と挨拶をすると、大いなる神を心の中で感じた」となった。このように、SLにおける「清らかな挨拶をする」という表現は「清らかな心で～挨拶をする」と、具体化された感じで直接翻訳された。「挨拶をする」という挨拶の表現がペルシア語に存在しているため、直接日本語からペルシア語に翻訳される際、ニュアンスが曲がらずに翻訳され、デノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(4) [SL] 熊野のおじいおばあにも よろしくお伝えください。 (川端、149)

[EL] Please give my love to Grandfather and Grandmother in Kumano. (70)

[PL] lotfan salām-e man rā be bābā-bozorg va
 お願いします よろしく.EZ 私 POSTP.を PREP おじいちゃん CONJ

mādarbozorg beresān.(76)
 おばあさん 伝える.IND.IMP.2SG

- おじいちゃんとおばあちゃんに私からの挨拶をお伝えください。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

be pedarbozorg va mādarbozorg dar kumāno salām beresān.
 PREP おじいさん CONJ おばあさん PREP 熊野 挨拶 伝える.IND.IMP.2SG

- 熊野のおじいさんとおばあさんによろしく伝えて。

SL における「熊野のおじいおばあにもよろしくお伝えください」は借用、等価および翻案方略を用いて「Please give my love to Grandfather and Grandmother in Kumano」と EL に翻訳されている。この EL の表現は等価、翻案方略および省略という方略を用いて、「lotfan salām-e man rā be baba-bozorg va mādarbozorg beresān」すなわち、「おじいちゃんとおばあちゃんに私からの挨拶をお伝えください」と PL に翻訳された。

「よろしく」という挨拶の言葉は EL および PL においてそれぞれ「love」ならびに「salām (挨拶)」と翻案方略で翻訳されている。上記の分析が示すように、SL から EL への翻訳および EL から PL への挨拶の言葉の翻訳における方略はどちらも受容化である。こうした方略を用いて翻訳された PL の文は、SL のデノテーションおよびコノテーションの伝達はともに成功していると思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された場合も、重訳と同様に「Be pedarbozorg va mādarbozorg dar kumāno salām beresān」、すなわち「熊野のおじいさんとおばあさんによろしく伝えて」と翻訳された。日本語における「よろしく」はこの場面において、英語の「respect, love」に相当するが、ペルシア語の場合は「salām (挨拶)」と翻訳される。このように、デノテーションとともにコノテーションも翻訳されたと思われる。

(5) [SL] さようなら (川端、149)

[EL] Good-bye (71)

[PL] be omīd-e dīdār. (76)
PREP 望み.EZ 会うこと

➤ また会えるといいね。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

xodāhāfez

➤ さようなら

SLにおける「さようなら」は等価方略を用いて「Good-bye」とELに翻訳されている。このEL訳文は翻案方略を用いて「be omīd-e dīdār」とPLに翻訳されている。PLにおいては、ELの「Good-bye」に相当する「xodāhāfez」または「xodānegahdār」という言葉が存在し、PL文化では挨拶の言葉として、SLの「さようなら」よりも頻繁に使用されるが、上記の例文に「be omīd-e dīdār」つまり「また会えるといいね」のように翻訳されている。「be omīd-e dīdār」という表現は「xodāhāfez」の後に続けるのが慣例である。

この言い方は、ELの「hope to see you soon」に相当するが、それほど深い意味ではなく、SLの「また後で」とほぼ同じ印象だと思われる。しかし、上記の例は手紙文であり、「xodāhāfez」という言葉は手紙にはあまり使用されないので、「be omīd-e dīdār」（また会えるといいね）という書き言葉でよく使用されるPL表現に翻訳されたと思われる。

このようにSLからELへの翻訳またELからPLへの翻訳における方略は両方とも受容化である。こうした方略を用いて翻訳されたPLの文は、SLにおける挨拶言葉の文字通りの意味伝達に若干のずれが生じ、言外の意味までは伝えきれていないと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された例文は言葉通りに「khodāhāfez（さようなら）」と翻訳され、文字通りの意味と同時に言外の意味も伝達されたと思われる。

(6) [SL] 拝啓（川端、148）

[EL] Dear Elder Sister (69)

[PL] xāhar-e azīz-am (73)
 姉/妹.EZ 親愛なる.ADJ.PRON.SUF.1SG

➤ 私の親愛なるお姉/妹さん

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

baā ehterām
PREP 敬意

➤ 敬意を込めて

SLにおける「拝啓」という表現は書簡の冒頭に記して相手に敬意を表す表現である。以上の場合、「拝啓」という表現は翻案方略を用いて「Dear Elder Sister」とELに翻訳され、明示化されている。なぜなら、ELにおいては、手紙を書く相手に対して呼び掛ける表現を用いるからであり、それに対応する英語翻訳は相手によって異なる。この表現は翻案方略を用いて「xāhar-e azīz-am」すなわち「私の親愛なるお姉/妹さん」とPLに翻訳されている。「Elder sister」という呼びかけ表現はPL圏では自然ではないため、「sister」というようなPL翻訳になり、暗示化されている。上述のように、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略はともに受容化方略である。三文化圏における差異に起因して、「拝啓」というSLの原文はPLには「私の親愛なるお姉/妹さん」と訳され、原文の文字通りの意味とともに、その語感も伝わらなかったと思われる。しかし、直接日本語からペルシア語に翻訳された場合は「bā ehterām (敬意を込めて)」となった。

ペルシア書簡の場合も、特に、会社など形式的な便りの場合は、このような表現が使用される。このように、文字通りの意味とともに、その言外の意味も伝達されたと思われる。

(7) [SL] 久しくご無沙汰いたしました。(川端、148)

[EL] I haven't written in a long time. (69)

[PL] moddat-e ziādī ast barā-yat

間.EZ 長い COP.IND.PRES.3SG のため PREP.PRON.SUF.2SG

nāme nanevešte-am. (73)

手紙 書く.NEG.IND.PRES.PERF.1SG

➤ 長い間君に手紙を書いていない。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

moddat-e ziādī-st barāy-etān

間.EZ 長-COP.IND.PRES.3SG のため PREP.PRON.SUF.2PL

nāme nanevešte-am.

手紙 書く.NEG.IND.PRES.PERF.1SG

➤ 長い間あなたに手紙を書いていない。

SL における「久しくご無沙汰いたしました」という表現はある程度の期間、関わりを持っていない状況のことである。「ご無沙汰」という表現は「無沙汰」または、「久しぶり」の丁寧体であり、場面によって久しくたよりや訪問をしないことを表す。この表現は等価方略を用いて、「I haven't written in a long time」と EL に翻訳されている。SL におけるこの表現は実際に人と会うときに使用され、また手紙文でも用いられるが、ここでは手紙の中で使われているため、EL では「長い間君に手紙を書いていない」と訳されている。

この EL 表現は付加的な等価方略を用いて「moddat-e ziādī ast barā-yat name nanevešte-am」すなわち「長い間君に手紙を書いていない」と EL の意味通りに PL に翻訳されている。しかし、相手に使用されるに人称代名詞は単数であるため、敬意が伝達されていないと思われる。上記のように、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はともに受容化であった。その結果、SL における「久しくご無沙汰いたしました」という表現は「長い間君に手紙を書いていない」という PL 訳文となり、デノテーションは伝達された。しかし、コノテーションの場合は、挨拶表現における敬意が伝達されなかった。

直接 SL から翻訳された文は重訳によって翻訳された PL 訳文は挨拶の表現として、ほとんど同様であるが、敬意伝達のために、単数に人称代名詞を複数二人称代名詞に置

き換えた。このように、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されたと思われる。

(8) [SL] 姉さまお変わりは御座いませんか。(川端、148)

[EL] I hope you are in good health. (69)

[PL] omīdvār-am	salāmatī	barqarār bāšad. (73)
希望する.IND.PRES.1SG	健康	存続する.IND.SUBJ.PRES.3SG

➤ ご息災でいらっしゃることを願います。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

xāhar jān , ċe xabar?

お姉さん、 何 ニュース

➤ お姉さん、何か変わりはありますか。

SLにおける「姉さまお変わりは御座いませんか」という表現は「お姉さん、お変わりありませんか」という挨拶表現の尊敬語である。この表現は英語において「how are you getting along?」または「how are you doing?」に相当するが、以上の例文の場合は、調整および翻案方略を用いて「I hope you are in good health」とELに翻訳されている。「お変わりは御座いませんか」という手紙で相手の安否を尋ねる挨拶表現に正確に対応するEL訳は存在しないため、「I hope you are in good health」とEL圏において多用される表現に翻案されている。このEL表現は等価方略を用いて「omidvār-am salāmatī barqarār bāšad」つまり「ご息災でいらっしゃることを願います」とPLの書き言葉となっている。上述のように、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略はともに受容化方略である。それぞれの文化の間における差異に起因して、「姉さまお変わりは御座いませんか」というSLの原文はPLには「ご息災でいらっしゃることを願います」と訳され、原文におけるデノテーションを伝え損なえ、さらにコノテーションも抜け落ちてしまったため、読者に与える印象が大きく異なる結果となった。

直接SLからPLに翻訳された文では、「xāhar jān, ċe xabar?」要するに、「お姉さん、何かお変わりありませんか?」と表現されている。この挨拶表現はELの「what's new?」

または、「what's up」に相当し、近況情報を聞かれる挨拶表現である。それはペルシア語において「če xabar?」のように表現される。つまり、最近あったこと、また前と変わったことを聞いているわけである。このように、デノテーションおよびコノテーションがともに伝達されたと思われる。

表 3. 挨拶表現において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			D	C	D	C
1	受	受	○	○	○	○
2	受	受	○	×	○	○
3	受	受	×	×	○	○
4	受	受	○	○	○	○
5	受	受	×	×	○	○
6	受	受	×	×	○	○
7	受	受	○	×	○	○
8	受	受	×	×	○	○

まとめ

挨拶表現を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べた。その結果、調査の対象とした 8 件の例文の全てにおいて、SL から PL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化であった。

EL を通して原文である SL の文意を PL で表そうとした例文 8 件において、原文の文字通りの意味、すなわちデノテーションが伝達され、言外の意味、つまりコノテーションを含めて適切に翻訳されているのは 2 件、[例(1), (4)]だけである。一方、原文のデノテーションが伝達されているが、コノテーションは捨象されてしまった例文は 8 件のうち 2 件[例(2), (7)]である。文字通りの意味が伝達されなかったが、言外の意味が伝達された例文は見られなかった。

文字通りの意味を伝え損ない、言外の意味、つまりそのニュアンスも抜け落ちてしまい、読者に与える印象が大きく異なる例文は 8 件中、4 件[例(3), (5), (6), (8)]であり、

最も多かった。

上記の分析の結果、挨拶表現の翻訳においては、原文のデノテーションならびにコノテーションの伝達、すなわち、原文のメッセージ全体の伝達に成功している例は4分の1に過ぎなかった。これらの例文においてメッセージの伝達が成功した理由は、手紙文においてはSL・EL・PLの間で類似する表現が存在すること、またSLとPLとは挨拶表現や敬意の言葉を使用する文化を共有しているため、挨拶表現にも類似点があり、その結果、受容化方略を使用することによって適切に翻訳されたことが考えられる。

文字通りの意味が伝達されておらず、言外の意味も伝わらなかった例文は最も多く、さらに、全例文中の半数以上において、言外の意味、すなわちコノテーションが伝達されていないことが判明した。

その理由は、次のように推定される。挨拶表現は一般的に人と人との出会ったときや別れるときに交わす儀礼的な動作や言葉のことである。また相手に敬意や親愛の意を示す行為で、対人関係を円満にし、社会生活を円滑にするとされる。したがって、挨拶表現においては他の表現と比べて、文化の背景がいっそう重要な役割を果たしていると思われる。日本語を起点言語 (SL)とし、日本語とは大きく異なる文化を有する第一目標語 (EL)を通して第二目標語 (PL)に翻訳する場合は、両目標言語への翻訳者たちは、母国語では想像のつかない表現が存在しているため、そのまま等価方略を使用しようと考えたり、あるいは自分が適切であると感じる言葉遣いを選択するのではないだろうか。しかしながら、同じアジアに位置している、日本語から直接ペルシア語に翻訳した際には、文化的な類似点が多いためか意味伝達が100%なされた。重訳の場合においても意味伝達が成功した2つの例文(1), (4)は、ELにおいてもその挨拶表現が存在していた。

5. 3. 2. 呼称

国広 (1990) は、「呼称」という名称は英語の「address form [term]」の訳語として導入され、話し相手に直接呼びかけたり、言及したりする語と考える。また、概念として「話し手自身に言及すること」を「自称」、「聞き手に呼びかけたり、言及すること」を「呼称」、「その他の人や物に言及すること」を「他称」として定義し、呼称を固有名詞、代名詞、親族名称、Mr.、Ms.、Dr. などという称号、さんや君などの接尾詞、職業名や職階名などに分類した。

また、鈴木（1982）は呼称について以下のように述べる。日本語において、自分また相手を指したり、呼びかけたりする際、自分と相手との社会的関係、性別、場面などに応じて、人称代名詞、職業名、役職名、親族名称、敬称、役割名、個人名など多様な呼び方が存在している。また、日本語における呼称の使い方は「人間関係の上下」に重要な役割を担っているため、人称代名詞は種類が豊富で、相手と場面によって使い分けられている（鈴木 1982:121-126）。ペルシア語における呼称は、学校や大学の先生、医者やエンジニアなどを役職名で呼ぶことばはあるが、社長や駅長などを肩書きで呼ぶことばなく、「姓+さん」で呼ぶこともある。日本語において、～君、～ちゃん、～さんや～様、～殿などをつけて呼ぶことがあるが、ペルシア語の場合は、「さん」には、英語と同様に男性用（英語：Mr.、ペルシア語：āqā）と女性用（英語：Mrs.、Ms.、ペルシア語：xānom）の二種類が存在する。しかし、子供や親しい人に対して使用される「ちゃん」や「君」といった使い分けはなされず、一括して「jān」を使用する。「ちゃん」や「君」などはペルシア語と同様に英語にも存在していないと思われる。

日本語においてよく使われている親族名称は目上と目下によって使い方が異なる。祖父母、父母、おじ、おば、兄、姉など目上の人に対してはほとんど相手を親族名称で呼びかける。親族名称を用いる場合は、「～さま、～さん、～ちゃん」をつけて敬意を表す。しかし、目下の親族に対しては、一般的に、二人称代名詞や固有名、「名前+さん、君、ちゃん」を付けて呼びかける（林 2001）。それは親族に対してだけではなく、上の世代の隣人に対しても使用される。PL 圏においても同様にこのような呼びかけは存在しているが、EL 圏においては存在していないと思われる。

ペルシア語における呼称は、人称代名詞の他に、敬称、敬称に加えた名字、敬称に職業や地位を加える表現が存在する一方、親族名称なども使用されると、Keshavarz（1988）が述べている。また、Aghagolzadeh（2011）によると、呼称が話し手と聞き手が属する社会背景や両者間の差異によって使い分けられるようである。しかし一方で、吉枝（2000）はイスラム社会の公的な場においては、男性社会と女性社会が宗教的に区別されているにもかかわらず、現代ペルシア語における男性語や女性語はあまり見受けられないとされ、その実態は一様ではないと指摘している。

呼称の中には人名の呼びかけの仕方もある。人名は外国語において異なる場合が多い。それはその外国語のアルファベットや発音の仕方に言及されていると思われる。例えば Michael という英語（マイケル）はフランス語においてミッシェル、ドイツ語の場合はミハエル、ラテン語はミカエル、またはスペイン語においてはミゲルとなる。しかし、ミッシ

エルというフランス人の名前はスペイン語において必ずミゲルと呼ばれるとは言えない。その言語圏の言葉や文化などを受け入れた受容化ということもあれば、発音に問題なければ母国語で呼ばれる形の異質化の方法も存在していると考えられる。そのため、人名はそれぞれの言語においてその言語のアルファベットなどによって変化し、発音しやすくなる傾向がある。同様に、それぞれの人名の短縮形もある。人名の短縮形とは、欧米などにおいて伝統的な洗礼名のうち、正式名とは別に日常的に用いる簡略な略称のことである。一般に正式名の綴りや発音を短くしたものが多くことから「短縮形」と呼ばれる。

英語やフランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語等のヨーロッパの言語では、殆どの伝統的な正式名にはそれぞれの短縮形、愛称形があり、その多くが本名として使用されることが特徴として挙げられる。日本語また、ペルシア語においても短縮形や愛称形が存在している。ペルシア語の場合は、普段名前が長いときに、発音しやすくするため、音節を減らし短縮する。宗教的な名前を子供につける宗教的な家族の場合は、宗教に対する敬意のため、名前の短縮を避ける人が多い。短縮形のしかたがそれぞれの言語には異なるため、元の名前は何か分かるのが困難であろう。愛称形の場合は、証明書上の名前は宗教的な名前、または両親のなくなった父か母の名前を付けられた、子供るときから家族や親戚などによって別の名前（愛称）を呼ばれるのは多い。時々、宗教的な名前はほとんどアラビア語であり、叔父叔母の名前は時代遅れの名前であるため、大人になって本人が自分に愛称を決めるか、または著者や詩人など社会的な活動をする人の間にもみられる。

親族呼称に対しては、セペフリバディ（2012:14,15）は日本語およびペルシア語の両言語において年齢の上下が目上と目下を決める基準となり、目上の人に対しては親族呼称で、目下の人に対しては実名が最も多く使用されると述べる。セペフリバディが行った研究によると、ペルシア語の場合は上世代に対する実名の使用が見られなかったが、兄弟に対しては一般的に実名が使用される。日本語における呼称の使用に関しては、現代呼びかけや会話の際には「お兄ちゃん」、「お姉ちゃん」という伝統的な親族呼称が少なく、「兄貴」、「兄ちゃん、姉ちゃん」、「にっちゃん」、または「あだ名+ちゃん・君」、「名前+ちゃん・君」という答えもあったようである。姉や兄に対して名前だけを使用する例も見られた。その理由として、昔は兄弟と妹弟の人数が多かったため、兄弟を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と敬語の「お」をつけて呼ぶのが一般的であったが、最近は少子化の影響で、上下関係より仲間同士の意識が強くなったということが挙げられた（セ

ペフリバディ 2012:15)。イランにおいても同様に兄弟や姉妹の人数が減少することにしたがって、年齢の差も少なく、距離が少なくなるため、敬意を表すよりも親しい関係になると思われる。それにしたがって、呼びかけのときに名前が最も使用される。しかしイランにおいて、兄姉を「*ābjī* (姉/妹ちゃん)」、「*dādāš* (兄/弟ちゃん)」が使用された時代があり、現代においても家族や在宅地域によって使用される場合がある。しかしほとんどの場合は、妹および弟よりも兄また、姉の方に対して用いられる。

このように、呼称の使用については日本語、英語、ペルシア語の間にはかなりの相違が見られる。日本語文における呼称は、どのように英語を経て日本語からペルシア語に翻訳されるか、以下の例文において具体的に見て、また、直接筆者によって日本語からペルシア語に翻訳された文とどう異なるか見てみよう。

(1) [SL] うどん屋のおじさんはもうのれんを入れるところでとても迷惑そうだったが、どうぞ、といやいや言ってくれたので、歩き疲れてとにかくすわりたかった私は、中に入った。(吉本、18)

[EL] The owner was just about to close up and seemed extremely annoyed to see me, but he grudgingly told me to come in, so I did. I was worn out from walking, and dying to sit down. (11,12)

[PL] *sāheb-e maqāze guyā qasd-e ta'tīlī dāšt va*
 持ち主.EZ お店 のようだ つもり.EZ 閉めること 持つ.IND.PAST.3SG CONJ

dīdan-e man be šeddat āzorde xāter (-aš) kard,
 見る.INF.EZ 私 すごく 心を傷つける.IND.PAST.3SG (PRON.SUF.3SG)

vālī bā bīmeilī ta'ārof kard ke vāred šavam .
 しかし PREP しぶしぶ 招く.IND.PAST.3SG REL.PRON 入る.IND.SUBJ.1SG

vāred šodam. az piāde ravī-e tulānī moddat be šeddat xaste budam
 入る.IND.PAST.1SG PREP 散歩.EZ 長時間 すごく 疲れる.IND.PAST.1SG

va āmādegī-e har kārī dāštam tā faqat
 CONJ 準備.EZ なんでも 持つ.IND.PAST.1SG REL.PRON だけ

čand lahze benšīnam. (22)
 数 秒 座る.IND.SUBJ.1SG

- お店の主人は閉店するつもりで、私を見ると、とても気を悪くしたようだった。しかし、それでもいやいや中へ入るように招いてくれた。中に入った。長時間歩いてとても疲れていて、数秒座るために、何でもやる心づもりがあった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mard-e udon foruš* ke dīge mīxāst kerkere-ye
 男.EZ うどん屋 REL.PRON もう 欲しがる.IND.IMPF.PAST.3SG シャッター.EZ

maqāze-ašo pāyīn bekeše, ba dīdan-e man čehre dar ham kešīd
 店.PRON.SUF.3SG おろす.IND.SUBJ.3SG PREP 見る.IND.PAST.3SG 私 顔をしかめる.IND.PAST.3SG

o bā bīmeilī be man goft "befarmāyīd". man ke
 CONJ(口語) PREP しぶしぶ PREP 私 言う.IND.PAST.3SG どうぞ 私 REL.PRON

az rāh raftan xaste šode budam va faqat
 PREP 歩くこと 疲れた.ADJ になる.PAST.PERF.1SG CONJ だけ

mīxāstam jā-yī benšīnam, vāred šodam.
 欲しがる.IND.IMPF.PAST.1SG どこか 座る.IND.SUBJ.1SG 入る.IND.PAST.1SG

- うどん屋のおじさんはそのお店のシャッターを閉めるところで、私を見ると、顔をしかめて、いやいや私に「どうぞ」と言ってくれた。歩くことに疲れて、どこか座りたかった私は中に入った。

SL「うどん屋のおじさん」は「the owner」と訳されている。「うどん屋」は前の文で、すでに訳注をつけ説明されているので、ここではその説明は省略され、「おじさん」の翻訳には「owner」と調整方略がとられている。PLにおいては、公文書以外の文書では「持ち主」という語についてはその所有物を明示する慣習がある。そのた

め、PL のこの部分においては「店の持ち主」という付加方略を用いた表現がなされている。以上の結果、呼称の翻訳において、SL から EL および EL から PL への翻訳に際して受容化方略がとられている。両文化圏における差異に起因して、「うどん屋の おじさん はもうのれんを入れるところ…」という SL の原文は PL には「お店の 主人 は閉店するつもりで…」と訳され、呼称である「おじさん」は「主人」となっているが、それにより文字通りの意味伝達はなされているが、言外の意味が伝わっていないと思われる。

筆者による直接日本語からペルシア語に翻訳された文においては、SL における「うどん屋のおじさん」は「*mard-e udon foruš* (うどん屋のおじさん)」になった。SL における「おじさん」という語には様々な意味が存在する。まず、両親の兄弟に当たる人を指すときに用いられる。そうではない場合は、主に中年男性に対して使用される。しかし皆に用いられるわけではなく、親しんでいいうことばなので、その使用範囲は人によって大きく異なる。また、年配の男性が自分より若い相手に対して自分を指して使うこともある。最後に呼称として、男と意味でも使用される。同様に、PL 圏の場合も上述の全てのケースに使用される。しかし PL において「おじさん」に対する語は二つ存在する。母方のおじに対して「*dāyī*」、父方のおじに対して「*amu*」を使用し、後者の方が多用される。両親の兄弟に対して使用される言葉であり、他の中年の男性に対して使用するのとは、親しんで使うことばなので、その使用性は人によって大変異なり、最近あまり使われなくなってきた。特に呼称以外の場合はそれに相当する「*mard*」またはより丁寧な呼び方の「*āqā*」の両方とも男の人の意味を記すことばが使用されて来るようになった。このように、EL 経由の PL 訳と比較して、直接 SL から翻訳された PL 訳の方が、デノテーションとともにコノテーションはより伝達されたと思われる。

(2) [SL] 姉いとこは鏡台の上できりきりっと銀貨を廻した。(川端、141)

[EL] His elder cousin spun a silver coin on the mirror stand. (62)

[PL] doxtar dāyī-e bozorg-tar-aš bā sekke-i
 娘 おじ.EZ 大きい.COMP.PRON.SUF.3SG PREP コイン.iSUF

noqre-i ru-ye derāver šīr yā xat kard.(63)
 銀の.ADJ 上.EZ 鏡台 ライオン CONJ 文字 する.IND.PAST.3SG

- 彼の姉いとこは鏡台の上に銀貨を投げた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

doxtar-dāyī-e	bozorgtar-aš	sekke-ye	noqre	rā
娘	おじ.EZ	大きい.COMP.PRON.SUF.3SG	コイン.EZ	銀の POSTP.を

mesl-e	ferfere	ru-ye	mīz-tovālet	čarxānd.
のよう	独楽	の上 .EZ	鏡台	廻す.IND.PAST.3SG

- 彼の母方のおじの自分より年上の娘は銀貨を独楽のように鏡台の上で廻した。

SLにける「姉いとこ」という呼称はELに存在していないので「His elder cousin」のような付加的な等価方略がとられている。このELの表現のPLへの翻訳においても同様に付加的な等価方略がとられている。

「いとこ」という語はELにおいて「cousin」に相当する。一方、家族や親戚関係が濃密なPL文化圏ではいとこの性別や、また母方か父方かによって異なる呼称が存在しているため、「いとこ」に対して八つもの言葉が存在する。しかし、兄弟や姉妹に関しては、年齢の上下に関係なく、ELと同様に「brother」および「sister」という呼び方がある。上記の例のPLの訳文では、「doxtar dāyī-e bozorgtar-aš」という「母方のおじの（自分より年上の）娘」のように具体的な表現がとられている。しかし、基本的に原文において、母方か父方のおじの娘であるか、または母方か父方のおばの娘であるか不明であるため、PL訳文は相当するかどうか不明である。

上記のように、SLからELへの翻訳と同様にELからPLへの翻訳においても受容化方略が使用された。こうした方略の結果、三言語文化圏における差異に起因して、「姉いとこ」というSLの原文はPLには「彼の母方のおじの自分より年上の娘」と具体的に説明され、意味伝達がなされているが、語感のずれが生じたと言える。

筆者によって翻訳された直接翻訳文においても同様な訳文が見られる。ここでは、姉いとこは「doxtar dāyī-e bozorgtar-aš」、すなわち「母方のおじの（自分より年上の）娘」と翻訳されているが、「doxtar amu-ye bozorgtaraš(父方のおじの（自分より年上の）娘)」、
「doxtar amme-ye bozorgtaraš (父方のおばの（自分より年上の）娘)」、「doxtar xāle-ye bozorgtaraš (母方のおばの（自分より年上の）娘)」のどれにも翻訳可能である。しかし、日本語における「いとこ」という呼称は漢字で書かれる場合は、ペルシア語にさら

に適切な訳がつけられると思われる。同じアジアに位置しており、文化などがさらに似ている日本とイランであるが、ここは、日本語における呼称（いどこ）はペルシア語よりも英語に似ていると言える。このように SL において意図された人と一致しない可能性が高いので、直接翻訳を経由した場合は、予想に反して語感が伝達されない可能性が考えられる。

(3) [SL] 「かあさん、かあさん、かあさん。」 (川端、130)

[EL] “mommy, mommy, mommy!” (54)

[PL] māmān, māmān, māmān. (56)
母さん、母さん、母さん。

➤ 母さん、母さん、母さん。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

➤ 母さん、母さん、母さん。

SL においては、母、父、姉、兄など家族や親戚の年上の人に「さん」という敬称を付ける。これに対して、EL では、父や母などに対して呼び掛ける際に、「Mr.」や「Mrs.」を付けないのが一般的である。同様に、PL においても、こうした場合に「xānom (女性に対する呼称)」や「āqā (男性に対する呼称)」を使う習慣はないと考えられる。その結果、SL における「かあさん」は等価方略を用いて EL に「mommy」、同様に PL に「māmān (母さん)」と翻訳されている。EL ならびに PL のどちらの言語圏においても「お母さん」という呼び方だけではなく「母さん」などの呼び方も存在しているという状況から、こうした翻訳がなされたのであろう。上記の結果、SL から EL および EL から PL への翻訳方略は両方とも受容化方略であり、PL の訳文は原文である SL の文意を適切に表していると考えられる。両方略も受容方略であるにもかかわらず、文字通りの意味とともに語感も伝達された理由は以下の通りに考えられる。SL における「お母さん」という記号は EL において「mother」、PL において「mādar」に相当する。更に、SL における同じ意味のくだけた言葉の「母さん、お母ちゃん、ママ」等、子供の年齢や性別、両親に呼ばれたい家族の期待やレベ

ル等によって様々な呼称が存在する。同様に EL に「mom、mommy(mummy)、mama」、PL に「māmān、māmā、māmī、母の名前」という呼称がある。それにしたがって、言外の意味も取られ、翻訳されたと思われる。

以上のことを踏まえ、直接日本語からペルシア語に翻訳された文も同様に「māmān (かあさん)」と翻訳され、デノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(4) [SL] お婆さん、一番前へ乗んなさいよ。(川端、111)

[EL] Please sit in the front seat, ma'am.(41)

[PL]	<u>xānom</u>	lotfan	ru-ye	sandalī-e	jelo	benšīnīd. (40)
	奥さん	お願いします	のうえ.EZ	席.EZ	前	座る.IND.IMP.2PL

➤ 奥さん、どうぞ前の席に座ってください。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mādar,	lotfan	ru-ye	sandalī-e	radīf-e	avval	benšīnīd.
お母さん、	お願いします	の上.EZ	席.EZ	列.EZ	一つ目	座る.IND.IMP.2PL

➤ お婆さん、どうぞ一番前の席に座ってください。

SL における「お婆さん」は一般には「old lady」または「grandmother」という EL に相当するが、老年の女性を親しんで言う場合も用いられる。上記の例の場合は、老年の女性を親しんでいう語と思われる。それは等価方略を用いて「ma'am」と EL に翻訳されている。EL において「ma'am」というのは女性一般に対する丁寧な呼び掛けのことであり、奥様やお嬢さんや先生に対して用いられる言葉である。その EL 訳は等価方略を用いて「xānom (奥さん)」という PL に翻訳されている。xānom は「奥さん」と日本語に訳されているが、女性に対して使用される丁寧な呼びかけの言葉であり、英語の「ma'am, madam, Mrs.」に相当する。PL 圏では SL と同様に、老年の女性を親しんでいう「mādar」という言葉が存在し、この語はお母さんまたはお婆さんと言う意味にも用いられる。しかし、上述のように EL 訳を通したため、より適切な「mādar」

ではなく「xānom」と翻訳されることになった。以上の方略を踏まえ、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はどちらも受容化である。SL における「お婆さん」は PL には「xānom (奥さん)」と翻訳され、普遍的な意味が伝わっているが、潜在的な意味のずれを伴ってしまった。以上のとおり、直接日本語からペルシア語に翻訳された訳文において「お婆さん」は「mādar」と翻訳され、普遍的な意味と同時に潜在的な意味も伝達されたと思われる。

(5) [SL] おじさん、ここで降ろして頂戴。(川端、67)

[EL] “Mister, let me off here, please.” (51)

[PL]	āqā	bī-zahmat	hamīnjā	piāde(am) kon.(51)
	男性	お願いします	ここ	降ろす.IND.IMP.2SG(PRON.SUF.1SG)

➤ おじさん、ここで降ろしてください。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

amu,	lotfan	man-o	īnjā	piāde kon.
おじさん	お願いします	私を	ここ	降ろす.IND.IMP.2SG

➤ おじさん、ここで降ろしてください。

SL における「おじさん、ここで降ろして頂戴」という表現は等価方略を用いて「“Mister, let me off here, please”」と EL に翻訳されている。この EL の表現は同様な方略を使用して「āqā bī-zahmat hamīnjā piāda (-m) kon」すなわち「おじさん、ここで降ろしてください」と PL に翻訳されている。PL における「āqā」は男の人に対して敬意を含めた呼びかけであり、EL の「Sir、Mister や Mr.」に相当するが、このような場面においては SL と同じような意味とニュアンスのある「amu、すなわちおじさん」という呼びかけが使用される。しかし、EL を通して翻訳されたので、「おじさん」ではなく、「mister」は「āqā」に翻訳された。上を記の分析が示すように SL から EL への翻訳と等しく EL から PL への翻訳においても受容化方略が使用された。上記の方略を使用して翻訳された「おじさん、ここで降ろしてください」という PL の文は、SL の「おじさん、ここで降ろして頂戴」という表現は、その呼称が持つ文字通りの意味の再現には成功したが、上記のよう

に、その言外の意味までは伝達されなかったと考えられる。直接日本語からペルシア語に翻訳された訳文において、以上に説明した通り、「おじさん」はペルシア語においてそれに相当する「amu (おじさん)」に翻訳された。「amu」という言葉は「父方のおじ」という意味であり、特に子供たちは男の人に対して親しめるという気持ちで使用することばであるため、この文にふさわしい訳と思われる。以上のことを踏まえて、おじさんという呼称に対する「amu」という訳による文字通りの意味および、言外の意味の両方も伝達されたと思われる。

(6) [SL] カアチン (勝子姉様) もたっしゃで暮らしてください。(川端、149)

[EL] Please be healthy and strong, Kachiko. (70)

[PL] kāšiko* morāqeb-e xod-et bāš. (76)
 かしこ 見張った.EZ 自身.PRON.SUF.2SG COP.IND.IMP.2SG

➤ かしこ、体を大切にしてください。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

ābjī kātu, šomā ham salāmat bāšid.
 お姉ちゃん カツ あなた も 健康 COP.IND.IMP.2PL

➤ カツ姉ちゃん、あなたも元気でいてください。

SL における「カアチン (勝子姉様) もたっしゃで暮らしてください」という文は等価方略および借用方略を用いて「Please be healthy and strong, Kachiko」と EL に翻訳されている。「たっしゃ」には様々な意味が存在しているが、ここでは「healty」および「strong」の両語に翻訳されている。「勝子」は借用方略をもちいて「kachiko」に翻訳され、「姉様」は省略されている。「勝子」は普通は「かつこ」と発音する。しかし、ここでは、EL の訳者が「katsuko」ではなく「kachiko」と訳しているのは、「勝」という漢字を名詞に使う場合の読み方が「かち」なので、勘違いしたのではないかとと思われる。その一方、EL 圏において「ツ」は発音しにくいいため、代わりに「チ」が置き換えられたことも考えられる。この EL 表現は等価方略を用いて「kāšiko* morāqeb-e xod-et bāš」すなわち「かし

こ、体を大切にして」と PL に翻訳されている。「kachiko」は「kāšiko」と PL に発音しやすくするために調整的な借用方略が取られているが、脚注を施され、「kachiko」と書かれている。PL 圏においてそれぞれの音節は二部分からなり、子音で始まり、母音で続く。そのなか、二つの母音が後続しないことに対して三つの子音も後続しない。このように、日本語における「ツ」は、ペルシア語において、語中または語尾に来れば普通に発音されるが、語頭に来れば発音しにくく、「テス」と発音されるか又は、「ツ (tsu)」の「t」が落とされ、「ス」と発音されるようになる。例えば「津波」という地震に関わる専門用語は借用方略を用いてペルシア語においてそのまま「tsunāmī」と翻訳されたが、PL の音声学に合わず、「tesunāmī」と発音されがちであり、大分変るため「sunāmī」と発音されるように指示された。このように、「勝子」という人名において「ツ」が入っているが、語頭のため、発音には問題がないはずである。以上の方略を踏まえ、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はどちらも受容化および異質化方略である。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、「カアチン (勝子姉様) も たっしやで暮らしてください」という SL の原文と「かしこ、体を大切にして」という PL の訳文との間には、若干の意味のずれが生じ、呼称の観点から見ると、語感のずれも生じたと思われる。筆者によって翻訳された PL 訳文は「カツ姉ちゃん、あなたも元気でいてください」となっている。SL における「カアチン」という短縮された「勝子 (カツコ)」という人名に、「ちゃん」の可愛い言い方の「チン」が付加された「短縮形+呼称」は「kātsu」、また「お姉様」という呼称は「abjī (姉ちゃん)」と翻訳されている。まず名前という呼びかけについては以上に述べたとおり、PL 圏においても、名前が長い場合は、音節を減らし、発音しやすくする習慣がある。音節が二つ以上の場合には短縮形される傾向があり、2 音節の単語になる。短縮する場合はほとんど「イ」で終わると思われる。「ザフラ」は「ザリ」、「ファテメ」は「ファティ」、「モハマド」は「マンマ (ド)」、「エスマイル」は「エスイ」などに短縮形される。しかし「カア」はペルシア語に「kā」と一音節の短縮形になり、あまり使用されない方法なので、PL 圏風に「カツコ」とい三音節からなっている人名を二音節まで減らし「カツ」という短縮形に翻訳された。親族呼称の場合も PL 圏は SL 圏と同様に使用されるため、「abjī (姉ちゃん)」という呼びかけが使用された。このように呼称に対する翻訳において、文字通りの意味と同様に言外の意味も伝達されたと思われる。

(7) [SL] 姉さま お変わりは御座いませんか。(川端、148)

[EL] I hope you are in good health. (69)

[PL] omīdvār-am salāmatī barqārār bāšad. (73)
希望する.IND.PRES.1SG 健康 存続する.IND.SUBJ.PRES.3SG

➤ ご息災でいらっしゃることを願います。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

xāhar jān , čē xabar?
お姉さん、 何 ニュース

➤ お姉さん、何か変わりはありませんか。

SLにおける「姉さまお変わりは御座いませんか」という表現は調整および翻案方略を用いて「I hope you are in good health」とELに翻訳されている。「お姉さま」という呼びかけはEL訳ならびにPL訳において省略され、疑問文は調整され、平叙文の形式になっている。

上述のように、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略はともに受容化方略である。それぞれの文化の間における差異に起因して、「姉さまお変わりは御座いませんか」というSLの原文はPLには「ご息災でいらっしゃることを願います」と訳され、「お姉様」というSLにおける呼称は文字通りの意味および含意が伝達されなかった。

「さま」という呼称は「さん」のより丁寧な言い方であり、人を表す時、また身分および居所などに付くことによって尊敬の意を表す。現在、書き言葉においても姉に対してこのような尊敬表現を用いるのは一般的ではないと考えられる。

直接筆者によって日本語からペルシア語に翻訳された訳文は「xāhar jān čē xabar?」ようにするに、「お姉さん、何かお変わりないか。」となった。PL圏の親族呼称で最も口語的なのは「abjī (姉ちゃん)」であるが、SLにおける「姉さま」より親しい言い方の「xāhar jān (姉さん)」という少し敬意を示すような呼称を使用することによって、敬意を表す訳文はSLほどではないが、呼称の翻訳に対するデノテーションとコノテーションの伝達がなされたと思われる。

表 4. 呼称表現において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			D	C	D	C
1	受	受	×	×	○	○
2	受	受	○	×	○	×/○
3	受	受	○	○	○	○
4	受	受	○	×	○	○
5	受	受	○	×	○	○
6	受+異	受+異	×	×	○	○
7	受	受	×	×	○	○

まとめ

呼称を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べた。その結果、SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化であるのは全例文 7 件のうち 6 件[(1), (2), (3), (4), (5), (7)]であり、最も多いことが明らかになった。その中で、デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されたのは 1 件だけ[例(3)]である。その理由は「お母さん」という言葉はどの言語にも存在する普遍的な記号であり、親族関係性が明らかだからである。

SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化および異質化の組み合わせであるのは 1 件[例(6)]であった。

呼称に関する例文において、EL への翻訳を経て生み出された PL の訳文は原文である SL のデノテーションと同時にコノテーションも伝達されたのは全 7 例文のうち 1 件[例(3)]であり、最も少ない。文字通りの意味つまり、デノテーションが伝達されたが、言外の意味つまり、コノテーションは伝達されなかった例文は全例文 7 件のうち 3 件[(2), (4), (5)]である。次にデノテーションおよびコノテーションの双方が伝達されていない例文は 7 件のうち 3 例文[例(1), (6), (7)]である。デノテーションが伝達されなかったが、コノテーションは伝達された例文は全く見られなかった。

上記の分析の結果、SL の日本語における呼称が EL を通して PL に翻訳されている際、9 割近くの例文においては意味伝達が完全になされていないことが明らかになっ

た。その理由として、SLにおける呼称はELに省略されたり、配慮されなかったためPLにおいても反映されなかったことが挙げられる。それと反対に、筆者によって翻訳された直接翻訳においてデノテーションとともにコノテーションも伝達されたのは、全例文7件の中7件であった。コノテーションが伝達されない可能性がある例文(2)は、これまでと異なる理由で、原文とのずれが生じる可能性がある。その理由はペルシア語の場合は呼称が更に具体化されているためである。このように重訳を経由してもニュアンスが伝達された呼称は親族呼称であり、直接翻訳によってニュアンス伝達が成功した例文は特に親族呼称の場合はペルシア語が豊富であり、日本語と同様な場面においても使用されるため文字通りの意味とともに言外の意味伝達もなされると考えられる。

5. 3. 3. 一人称代名詞・二人称代名詞

一人称代名詞、二人称代名詞は、多くの言語においてそれぞれ単一の語で表される。しかし日本語においては、一人称代名詞は「私、わたくし、あたし、僕、俺」、また二人称代名詞は「お前、貴方、あんた、君、あいつ、こいつ、やつ、貴様」などのように様々な場面において豊富に使い分けられる。そのため、日本語の一人称代名詞や二人称代名詞は他言語に翻訳されにくい。

三輪 (2005:15,16) によると、日本語の二人称は、アナタ、アンタ、キミ、オマエ、オタク、センセイ等色々ある。日本語の二人称の中には一人称から転用されたものがある。例えば、ゴジブン、ワレ、テメエ等の場合は、ゴジブンからゴが取れたジブンやボクが二人称に使われる。一人称が二人称に転用されるこの現象ほど日本語一人称二人称の特異さを際立たせるものはない。日本語では古くから多くの一人称が二人称にも使用されてきた。古語辞典などを引くと、ナ、ワ、ミ、ウヌ、オノ、ワレ、ワケ、オノレ、コナタ、ワガミなど多くの一人称が二人称に使われたことがわかる。また、三輪 (2005:22) は、二人称は代表的なアナタ、キミ、オマエのほかにもいろいろあるが、アナタの系統にはアンタ、アータ、アンタハン、アナタサマなどがあり、またオマエの系統にオマエサン、オマエサマ、オメエなどがあり、それぞれ意味合いが微妙に違って来ると主張する。

このように、日本語における人称代名詞は西欧語に比べて、数が多く、話し手や聞き手の社会的関係、性差、社会地位等によって使い分けられている。さらに日本語における二人称代名詞は非礼と判断される可能性があるため、目上の人に対しては余り使用されないと言われている。

また日本語においては、上下親疎の人間関係およびその場の状況や雰囲気認識した上で、発話中において人称代名詞の使用が避けられる傾向がある。特に聞き手に対する人称代名詞の使用は男性と女性によって異なり、このことが動作主や対象を示す人称代名詞の省略の一つの原因である。

三輪（2005:18）は人称代名詞においては日本語と英語等とは大きく違うと唱えた。日本語での対話においては、一人称二人称は主語としては必ずしも必要ではない。なぜなら、敬語等を適切に使用すると、よく知った相手との対話であれば、一人称二人称はほぼ不要となるからである。しかし、対立点をはっきりさせようと思えば、一人称二人称が必要になるケースもある。

また、一人称二人称は対話の仕方、敬語のあり方、ひいては言語や文化全体に関連し影響する。（三輪 2005:18,19）

一人称に対して、三輪は以下のように述べる。

多数の一人称二人称がよく変わった日本語と対照的に、一人称二人称がごく少数で、しかも何千年にわたってほとんど変化しないのが、英語フランス語ドイツ語等、いわゆるインド・ヨーロッパ語系に属する諸言語などである。英語のアイ、ドイツ語のイッヒ、イタリア語のイオ、フランス語のジュ、スペイン語のジョ、ロシア語のヤーなど、それぞれの言語の訛りで発音は少しずつ変更するが、いずれもそれぞれの言語で唯一の一人称単数主格形であり、しかも源を尋ねると、全てが同じ原初の一人称に帰着くはずである（三輪 2005:23）。

二人称の場合も一人称と同様に、インド・ヨーロッパ語系の言語ではやはりそれぞれの言語でただ一つの二人称単数が原初から現在まで、連綿として守られ受け継がれている。その例としては、ラテン語のトゥ、フランス語のテュ、ドイツ語のドゥ、ロシア語のトゥイ、などが挙げられる。言語によって発音に多少の相違は存在するが、原初の単数の二人称が、それぞれの国や民族の言語において現代まで使い続けられてきたわけである。ただし、三世紀頃ラテン語で二人称単数トォに加えて、二人称複数のヴォスが表敬の二人称単数として使用され始めたため、単数の二人称が二個に増えた。その理由は、当時のローマ帝国は複数皇帝制だったが、一人の皇帝でも他の皇帝を兼ねることを表すため皇帝が一人称複数で自称し（ロイヤル・ウィの始め）そのため皇帝に話しかける側も二人称複数で話すことになり、それが表敬の二人称になったためとされる（三輪

2005:25)。

Brown and Gilman (1960)によれば、殆どの西欧語における人称代名詞は複雑ではなく、単数人称代名詞と複数二人称代名詞の場合は「T&V」、すなわち TU (ラテン語の単数二人称代名詞に由来している) および VOS (ラテン語の複数二人称代名詞に由来している) の使い分けは話し手と聞き手の間の年齢、社会地位等上下関係や力関係によって決定されている。こうした用法はインド・ヨーロッパ語族諸言語における人称代名詞にも当てはまる。インド・ヨーロッパ語族に属しているインド・イランの言語であるペルシア語もその例外ではなく、単数二人称代名詞は「to」であり、複数二人称代名詞は「šomā」である。しかし、上下関係、親疎関係、ソト・ウチ関係や敬語表現などの状況に応じて、単数二人称の場合でも複数二人称の「šomā」が使用されることもある。上述のように、日本語においては様々な人称代名詞が用いられる。しかし金水 (1989:101) によると、ヨーロッパ諸言語に比べて、日本語における人称代名詞の使用頻度は高くなく、人称代名詞として使用される語彙は流動性が高いとされる。

三輪 (2005)によると、日本語の一人称単数代名詞であるワタクシ、ワタシ、アタシ、ワシ、ウチ、ジブン、ボク、オレなどの中から、いずれを使用するかは個人の好みや話の相手、場所柄や話の内容によって変わるので、その選択は簡単ではない (三輪 2005 : 11)。しかし、英語においては、一人称単数代名詞は一つである。また、ペルシア語においても、一人称単数代名詞は日本語程多く複雑ではない。例えば、小学生、男性、女性、社長、また社員が使用する一人称単数代名詞は、英語の場合は全て「I」であり、ペルシア語の場合は主に「man」である。したがって、英語やペルシア語では、一人称代名詞の選択をめぐる迷いやトラブルはないと思われる。フランス語やドイツ語も一人称に関しては英語と同様であると言われる。

また、日本語では二人称代名詞もアナタ、アンタ、キミ、オマエ、オタク、センセイなどいろいろあり、目上の人や知らない人に無難に使用できる二人称は日本語に全くない (三輪 2005)。使用しにくい日本語の二人称とは対照的に、英語ではよく知られているように、二人称は単数複数共通の「you」一つであり、目上にも目下にも、また大統領や王様に対しても、すべて「you」という二人称が使用できる。

もちろん三輪 (2005) が指摘するように、英語の場合も相手に応じて言葉遣いや態度は改まるが、二人称に関する限り「you」ただ一個である (2005:14)。ペルシア語の場合は、二人称単数が「to」、複数は「šomā」であり、日本語と同様に話の相手や場面

によって異なる二人称を使用する。上述のように、英語においては、一人称代名詞および二人称代名詞は単純である。一方、ペルシア語の場合は日本語のように性別による使い分けはないが、相手の立場を考えることによって二人称代名詞が異なることがある。このように、複雑な一人称代名詞や二人称代名詞を有する日本語はどのように、英語やペルシア語に翻訳されるか興味深い。

三輪 (2005:95,96) が指摘するように、外国の文学や映画、演劇はその国の文化を知る手がかりとなる。しかし、小説にせよ映画演劇にせよ、日本語と外国語とでは一人称や二人称をめぐって溝ができてしまうことは避けられない。外国語の単一の一人称が日本語に訳されると日本語の様々な一人称に訳し分けられることになる。すなわち、英語では「アイ」という一語で表現されているにもかかわらず、日本語訳においては話し手の年齢、地位、教養、人柄、性別、話し相手との関係等に応じて、また訳者の解釈や言葉遣いのくせによって、ボク、ワタクシ、アタシ、オレ、ジブンなど様々な訳し分けられ、それによって日本語らしく、言い換えれば日本文化らしくなる。しかし、一方ではそれによって英語文化のなかの根本的に重要なもの、つまり対等な対話文化が捉えられずに捨象されてしまう。

こうした状況において、一人称代名詞や二人称代名詞を含む日本語の文がどのように英語を経てペルシア語に翻訳されるか、以下の例文において具体的に見てみよう。また、筆者によって直接日本語からペルシア語に翻訳された場合はどうなるか比較ならびに考察を試みる。

(1) [SL] その音が俺の心臓を踏むのだ。(川端、129)

[EL] It tramples on my heart. (53)

[PL] engār ru-ye del-e man pā mīzāre. (55)
 まるで 上.EZ 心.EZ 私 踏む(口語) IND.PRES.3SG

➤ まるで私の心を踏んでいるような気がする。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

ūn sedā qalb-e man-o be dard miāre.
 その音 心臓.EZ 私-を 痛める.IND.PRES.3SG(口語)

➤ その音は私の心臓を痛める。

SLにおける「俺の心臓を踏む」は筆者によって直接 PL に翻訳された際、「qalb-e man-o be dard miāre」すなわち、「私の心臓を痛める」に翻訳された。SLにおける「心を踏む」すなわち「(人の) 心を踏みにじる」という表現は EL において「to trample (stomp) over someone's feelings or 「violate someone's inner self」」に相当し、PL には「ru-ye del-e kasī pā gozāstan」に相当する。しかし、この SL 文章に用いられている「俺の心臓を踏む」という表現は「心を踏みにじる」という意味ではなく、「心を痛める」という意味だと思われるので、そのまま「be dard āvardan」、つまり「痛める」と翻訳された。「俺」という日本語特有の男性によって用いられる一人称はペルシア語に存在しないため、「man (私)」に翻訳された。

SL における「俺」という一人称は、男性が仲間や目下の者とざっくばらんに話す時に用いられ、「僕」などよりもぞんざいな語である。

EL には「俺」、「僕」、「私」などの区別がないので、全ては一人称の「I」で表されられると思われる。「I」の PL における対訳が「man (私)」となる。

SL の「俺の心臓」という部分は等価方略を使用し、EL ならびに PL にそれぞれ「my heart」および「del-e man (私の心)」というように翻訳されている。このように、SL から EL および EL から PL への翻訳においても受容化方略が用いられた。その結果として得られた PL の訳文は、原文である SL の文字通りの意味を適切に表しているが、「俺」という男性言葉の持つ自分を優位に置いている言外の意味、また文の言外の意味までは伝えきれていない。筆者によって直接翻訳された文においても、「俺」に相当する PL の一人称代名詞が存在しないため、重訳と同様に原文における「俺」のニュアンスが伝達されていない。

(2) [SL] この部屋に僕ひとりにしてくれませんか。(川端、69)

[EL] Could you leave me alone with her here in the room? (28)

[PL]	mīše	berīd	bīrun	va
	になる.口語.IND.INT.3SG	行く.口語.IND.SUBJ.PRES.2PL	外	CONJ
	<u>man-o</u>	bāhāš	tanhā	bezārīd? (33)
	私を	PREP. PRON.SUF.3SG	一人	させる.IND.SUBJ.PRES.2PL

- あなたは（部屋を）出て、私を彼/彼女と二人きりにしてもらえませんか。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mīše man-o tu īn otāq tanhā bezārīd?
 になる.口語.IND.INT.3SG 私-を 中(口語) この 部屋 一人 させる.IND.SUBJ.PRES.2PL

- 私をこの部屋に一人にしてもらえせんか。

「僕」は男性が自分に対して使用する一人称である。一般に対等または目下の相手に向かって話す場合に用いられており、「俺」よりは丁寧である。三輪（2005:13）によると、日本語では男性の一人称が異なる場合が多い。ボクは甘えの雰囲気を感じられ、また男女差別的で音が汚い等の理由でボクを嫌う人もいる。

SLにおける「僕ひとりにしてくれませんか。」という表現は付加的な等価方略を用いて、「Could you leave me alone with her」とELに翻訳されている。ELのPL訳は

「mīše mano bāhāš tanhā brzārīd?」すなわち、「私を彼/彼女と二人きりにしてもらえませんか」であり、ここでは等価方略が使用されている。要するにSLにおける「僕」という一人代名詞はELにおいて「me」、PLには「man（私）」と翻訳されている。

筆者によって直接翻訳された文においても、「僕」に相当するPLの一人称代名詞が存在しないため、重訳と同様に原文における「僕」のニュアンスが配慮されていない。以上の分析から明らかなように、SLからELへの翻訳またELからPLへの翻訳における方略は両方とも受容化であり、こうして生み出されたPLの訳文は原文であるSLの「僕」という一人称の文字通りの意味を伝えているが、男性が自分を指して言う語のニュアンスは伝達していないと思われる。

- (3) [SL] 「僕は冬が近くなってから、自分があなたに価値がないと思うようになった」(川端、102)

[EL] Since it's getting to be winter, I've begun to think that I'm unworthy of you. (58)

[PL] čon dare(miād) zemestun miād, īn fekr be
 ので 来る.IND.PROG.3SG 冬、 この 考え PREP

sar-am zade ke be

頭 . PRON.SUF.1SG 打つ.IND.PRES.PERF. 3 SG口語 REL.PRON PREP

dard-e (to) nemīxoram. (58)

役に立つ.NEG.IND.PRES.1SG(君に)

- (もうすぐ) 冬がやって来るから、君の役に立てないと考えるようになっている。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

man az vaqtī ke zemestān nazdīk šode be īn
私 PREP とき REL.PRON 冬 近い になる. IND.PRES.PERF. 3 SG PREP これ

fekr mīkonam ke liyāqat-e šomā ro nadāram.
考える.IND.PRES.1SG REL.PRON 値する.EZ あなた を 持つ.NEGIND.PRES.1S

- 私は冬が近くなってから、自分是你に値しないと考えるようになった。

SLにおける「僕は冬が近くなってから、自分是你に値しないと思うようになった。」のEL訳は「Since it's getting to be winter, I've begun to think that I'm unworthy of you」であり、ここでは調整方略が使われている。「僕」および「自分」はともにELでは「I」と訳されている。そしてこのEL文のPLへの訳文も同じように調整の方略を用いて「čon dāre (miād) zemestun miād, īn fekr be sar-am zade ke be dard-e (to) nemīxoram」すなわち「(もうすぐ) 冬がやって来るから、君の役に立てないと考えるようになっている」という翻訳となっている。この例文における一つの問題として挙げられるのは、SLにおける「～てから」は、ELに「Since」と翻訳され、PLに「čon (ので)」と翻訳された点である。ELの「Since」およびSLの「から」はともに「～の時から」、すなわち、ある時点からの話をするとき、または何らかの理由を説明する時に使用される。しかし、上記の文において「since」は「～の時から」を意味しているにもかかわらず、理由を説明するように、「čon」すなわち「ので」の意味でPLに翻訳されている。

「僕」という一人称は例文(2)において分析したため、本例では「自分」という一人称を分析したいと思う。

SLの文法における「自分」は「再帰代名詞」と言われ、ELの「myself」およびPLの

「xodam」に相当するが、日本の近代では新しく一人称代名詞としても使用されている。

この「自分」という「一人称代名詞」は、軍隊用語として用いられていたと言われていた。階級が下位の軍人が上位、またはそれに準じる人に対して用いられた語のことであり、第二次世界大戦以前から、子供や従軍経験のない人々にとっても、軍隊で一人称代名詞として用いられることは、周知のことであったと思われる（木川:39, 40）。

また妻に対して使用された二人称の「あなた」は EL において「you」と翻訳された。EL における「you」は二人称代名詞単数および複数の両方に使用される。PL に翻訳される際、妻に対して使用されたため、「to」と表現されたと思われる。

上記の例文においても、話者が自分の立場を低くして、妻と話しているような気がするため、「自分」という一人称を使用したと受け止められ、EL および PL では一人称代名詞に翻訳されているが、相手を自分よりも上の立場に置くという意図を込めた言外の意味が伝えられていない。

このように、SL から EL、また EL から PL への翻訳において、ともに 受容化方略が用いられた。PL の「あなた」に対する訳文は原文である SL のデノテーションを伝達したが、コノテーションは伝達しなかったと思われる。

一方、筆者による直接翻訳では、一人称である「僕」については適切な PL 訳が存在しないためにそのニュアンスは配慮されなかったにもかかわらず、原文における「あなた」という二人称を「šomā（あなた：複数二人称代名詞）」という敬意を含む PL に翻訳することにより、話者が妻に対して自分を低く位置づけようとするニュアンスが伝達されていると言えよう。

(4) [SL] わしら若い時にゃよく見に行ったもんでさ。(川端、90)

[EL] When I was a boy, we often went to look at the women. (38)

[PL] vaqfī ke bačče budam, bā ham-sen o sāl-hā-ye
 とき REL.PRON 子供 COP.IND.PAST.1SG PREP 同じ年の.PL.EZ

xod-am aqlab be tamāšā-ye zan-hā
 自信.PRON.SUF.1SG よく.ADV PREP 見ること.EZ 女.PL

mīraftīm (36)

行く .IND.IMPF.PAST.1PL

- 子供の時に、よく同じ年の子たちと一緒に女を見に行っていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

vaqtī mā jamā'at-e zokur javun budīm, xeilī be tamāšā-ye
とき 私たち 集まり.EZ 男.PL 若い COP.IND.PAST.1PL よく PREP 見ること.EZ

zan-hā mīraftīm.
女.PL 行く .IND.IMPF.PAST.1PL

- われわれ男性は若いとき、よく女たちを見に行っていた。

上例によると、男性に用いられる一人称代名詞の「わしら」は EL においては「When I was a boy, we often went to look at the women」のように、等価方略を用いて「I」と「we」の二種類に訳し分けられている。PL においても、同様に等価方略が使われているが、付加の方法も見られる。

PL においては、主語は非分離人称代名詞として活用する動詞の語尾について接尾辞形人称代名詞になる。しかし、PL 訳には男性の言葉や古い言葉の語感は見られない。現代日本においては「わし」という一人称代名詞は、広島弁を例外として、ほぼ使用されなくなった。基本的には「わし」とは男性を表す古い一人称代名詞であり、わしらはその複数形である。上記の結果、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略は両方とも受容化である。上述のように PL の訳文では、SL における「わしら」という一人称代名詞の文字通りの意味が伝達されたが、ま言外の意味は伝達されなかったと思われる。

筆者による直接翻訳においては、重訳の場合と異なり、原文における「わしら」は「mā jamā'at-e zokur (私たち男の人)」と PL に 翻訳された。この表現における「mā」は EL における「we」および SL における普通の「私たち」に相当するが後続の「jamā'at-e zokur」というのは特に「男」ということを強調するような言葉でもともとアラビア語からの外来であり、昔よく用いられた言葉であるので、「わしら」に相当すると思われる。

このように、複数形の「男の人たち」を代名詞に付加することによって、その意味が

伝達するように処理できる。したがってこの直接翻訳による PL 文では、SL おける「わしら」という複数一人称代名詞が付加方略によって「われわれ男性」に翻訳され、ことばの語感が伝達されたと思われる。

(5) [SL] お前たちの家の時計も音を立ててはならぬ。(川端、130)

[EL] The two of you mustn't even let the clocks in the house make a sound. (54)

[PL] šoma do tā nabāyad bezārīd
 あなた/あなたたち 二つ ~てはいけない させる.口語.SUBJ.PRES.2PL

hattā sāat-hā-ye xune ham kār kone. (56)
 でもADV 時計.PL.EZ 家(口語) も 動く.口語.SUBJ.PRES.3SG

➤ お前たち二人、家の時計さえ、動かしてはならない。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

hattā sāat-e xune-ye šomā dotā ham nabāyad
 でもADV 時計.EZ 家.EZ(口語) あなた/あなたたち 二つ も ~てはいけない

sedāyī bede.

音を立てる.口語.SUBJ.PRES.3SG

➤ お前たち二人の家の時計さえ音を立ててはいけない。

「お前」とは主に男性が同輩に呼び掛ける場合や、男性や女性がともに目下の親族に使う第二人称である。元来は尊敬語であったが、現在では敬意が消失しており、相手によっては不快感を与える場合もあるようである。

SL における「お前たちの家の時計も音を立ててはならぬ」の EL 訳は「The two of you mustn't even let the clocks in the house make a sound」であり、ここでは文の主題が変わり、調整方略が使われている。「お前たち」という表現は「the two of you」と翻訳者により具体的化されているが、お前という言葉の語感が見られない。EL の「The two of you mustn't even let the clocks in the house make a sound」は PL に「šoma do tā nabāyad

妻が夫を呼ぶ際にも使用される。

また、近世においては用法が変わり、一般社会や遊里でも、かなり高い敬意を表した相手を敬つていう語として使用された。上記の例における「お前さん」は、後者の意味を表すと思われる。この SL における「お前さんの番」は等価方略を用いて「your turn」と EL に翻訳されている。そしてその EL の訳文は同様に等価方略を用いて「nobat-e šoma (あなたの番)」と PL に翻訳された。上記のように、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はともに受容化であった。

これらの方略を使用した結果、原文の「お前さん」は PL 訳文では「あなた」と翻訳され、SL の明示的な意味、すなわちデノテーションは伝達されたが、暗示的な意味つまりコノテーションが完全に伝達されなかったと思われる。

SL から直接 PL に翻訳された際、SL における「今日はお前さんの番だね」は「emruz nobat-e šomā-st qorbān, doroste?」、すなわち「今日はお前さんの番ですね」と PL に翻訳された。PL においては、「お前さん」に相当する二人称代名詞が存在していない。ただし PL では複数二人称代名詞を二人称に対して使用することで敬意を表す方法の他に、二人称に対して敬意を表す時、また公式的な場面において「jenābe āli」（日本語の閣下に相当するが、敬意度がそれほど高くない場合もよく用いられる）と言う宛名が使用される場合もある。また、相手に対して誠実、尊敬または忠実の感情を表す時に「qorbān」が用いられる。「qorbān」は EL において「Sir」に相当すると言えよう。SL の場合は、「お前さん」とは「男性に対する呼び掛けに用いて、あなた、先生、閣下、お客さん、だんな、見知らない人に、召し使いから主人に、生徒から先生に、店員から客に、目下から目上に、または議会で議長に対する敬称」に相当し、この語自体にこだわらずに文全体を丁重に訳せばよい場合が多いようである。こうした場面は殆どペルシア語にも当てはまる。

したがって、原文において使用された「お前さん」の語感を伝達できる言葉は後者の「qorbān」だと思われ、「šomā (あなた)」に「qorbān」が付加された。このように、直接 SL から PL に翻訳された際、文字通りの意味、また言外の意味のどちらも伝達されたと思われる。

(7) [SL] 「君、君」(川端、17)

[EL] Hey, you. You (66)

[PL] hei āqā bā šomā-m. (69)
 INTRJ 男の人 PREP あなた.口語.PRON.SUF.1SG

➤ おいあなた、あなたのことですよ。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

hei āqā, bā to-am.
 INTRJ 男の人 PREP 君.口語 PRON.SUF.1SG

➤ おい、君、君のことだよ。

SLにおける「君、君」は等価方略を用いて「Hey, you. You」とELに翻訳された。SLにおける「君」は様々な意味を有しているが、上記の例文では、相手を親しんで呼ぶ二人称として使われている。この呼び方は、現代語では男性が同輩およびそれ以下の相手に対して用いる。上代では女性が親しい男性を尊んで呼ぶことが多かったが、中世以降は男女ともに用いた語である。しかしELにおける二人称は単数および複数のどちらも「you」であるので、ここでは、その語感が完全には伝えきれていないと思われる。このELの訳文は付加的な等価方略を用いてPLに「hey āqā bā shomā-m」すなわち、「おいあなた、あなたのことですよ。」と翻訳された。上記のように、SLからELへの翻訳およびELからPLへの翻訳における方略はともに受容化であった。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、SLの原文とPLの訳文との間では、文字通りの意味すなわちデノテーションの伝達が失敗し、さらに言外の意味すなわちコノテーションにもずれが生じてしまったと考えられる。

筆者によって翻訳された訳文も、SLからELを経由したPLへの訳文と類似してはいるが、直接翻訳されたため、「君」に相当するPLの代名詞である「to」が用いられた。その結果、デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されたと思われる。

表5. 一人称・二人称代名詞において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳	直接翻訳
--	---------	---------	----	------

			D	C	D	C
1	受	受	○	×	○	×
2	受	受	○	×	○	×
3	受	受	○	×	○	○
4	受	受	○	×	○	○
5	受	受	○	○	○	○
6	受	受	○	×	○	○
7	受	受	×	×	○	○

まとめ

一人称代名詞、二人称代名詞を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べたところ、全7件の例文すべてにおいて SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化であったことが判明した。これらの中で、SL におけるデノテーションとともにコノテーションも伝達され、つまり原文の一人称・二人称代名詞に対するメッセージが適切に伝達された例文は1件[例文(5)]だけである。SL においては、言外に特別な意味を持つ一人称・二人称代名詞が存在するが、EL また PL においてはこうした SL の人称代名詞にぴたりと合致する語が存在しない。それにもかかわらず、例(5)の場合は、PL 訳文において使用された「šoma do tā」という語句は、SL の「お前たち」の持つ文意を EL においても処理できたので、適切に伝えられたと思われる。

デノテーションは伝達されたが、コノテーションが伝達されなかった例文は5件[例(1), (2), (3), (4), (6)]であり最も多かった。デノテーションとコノテーションの両方が伝達されなかった例文は1件、[例(7)]である。一人称・二人称代名詞のデノテーションが伝達されたが、コノテーションは伝達されなかった理由は、日本語における一人称・二人称代名詞の数が多く、話し手や聞き手の性差、年齢や立場などによって使い分けられるのに対して、英語、またペルシア語におけるそれらに相当する一人称・二人称代名詞が非常に少ないことが挙げられる。英語の二人称代名詞は、単数および複数の両方とも「you」である。ペルシア語においては、単数二人称代名詞は「to」、複数二人称代名詞は「šomā」であり、「šomā」は相手に対して敬意を表す場合にも使用される。このように、文字通りの意味、つまり人称的な意味が伝達されるが、言外の意味、つまり男としての一人称

代名詞のニュアンス、または敬意を表す二人称に対するニュアンスが伝達されない。例 [(7)] の場合は、EL の「you」の意味が、PL 訳に適切に反映されずに、コノテーションとともにデノテーションさえも伝達されなかった。

デノテーションは伝達されなかったが、コノテーションは伝達された例文は見られなかった。

すなわち、SL における日本語の一人称代名詞および二人称代名詞が EL を通して PL に翻訳される際、9 割近くの SL における一、二人称代名詞のコノテーションが伝達されなかった。

次に、筆者が直接 SL を PL に翻訳した訳文と、SL から EL を通して重訳された PL 訳との比較を試みた。この比較の目的は、直訳と重訳とのどちらに、コノテーションすなわち一人称・二人称代名詞のニュアンスがより適切に反映されているか、言い換えれば、重訳が PL 訳にどのような影響を与えたかを考察することにある。

上述のように、重訳による翻訳の場合は全 7 件のうち、一人称・二人称代名詞のニュアンスがある程度伝達されたと言える例文は 1 件[例(5)]に過ぎない。筆者による SL から PL への直接訳において一人称・二人称代名詞のニュアンス、すなわちコノテーションが伝達された例文は 7 件のうち 5 件[例(3), (4), (5), (6), (7)]であり、重訳と比較すると遥かに高い。上記のように、重訳において一人称・二人称代名詞のコノテーションは伝達されなかった理由は、一人称・二人称が豊富な日本語に対して、EL および PL においては人称代名詞が非常に少なく、さらには文法的に省略される場合も少なくないからである。こうした状況は直接翻訳においても当てはまるにもかかわらず、筆者による直接翻訳で得られた PL 訳文においては、デノテーションとともにコノテーションも伝達された例文は多かった。その理由は、まず EL を経由しない直接翻訳においては、EL における二人称代名詞および文法の差異による誤解が生じないため、デノテーションの伝達には支障が生じないことが挙げられる。次に、PL には一人称・二人称代名詞が多くないとは言え、人称代名詞に適切な語彙を付加する方略によって、デノテーションとともにコノテーションの伝達も支援できるからである。しかし、この方略は全ての人称代名詞に必ずしも適用できるわけではないため、上記の分析が示すように全ての例においてデノテーションとコノテーションの双方の伝達が成功したわけではない。直接翻訳を経由したにもかかわらず、男に対する単数一人称は PL においてもニュアンスが伝達されず、この場合は付加する言葉によっても処置の余地がなかった。なぜなら、ペルシア語は文法性のある言語ではなく、人称代名詞において

も性は消失している言葉であるからである。かといって、相当する人称代名詞が存在しないため、目標言語への翻訳においてニュアンスが伝達されないわけではない。特に敬意を表す二人称代名詞は様々な言語で見られるため、ELの翻訳においても処置でき、重訳を経由してもニュアンスが消えない。

または、一人称・二人称単数また複数の場合、目標言語における相当する一人称・二人称が存在しない場合も、処置できる方法が考えられるため、直接翻訳によって、一人称・二人称のニュアンスが伝達されたのははるかに多かった。

5. 3. 4. 敬語表現

5. 3. 4. 1. 日本語における敬語の定義

敬語とは同じ事柄を述べるのに、述べ方を変えることによって「敬意」あるいは「丁寧さ」を表すために用いられる表現だとされる。

国立国語研究所の説明によれば、「敬語とは何かについて、定義的に述べることは難しいが、最も簡単に言えば、〈話し手と聞き手との社会的・心理的へだたりの度合いを軸にして、素材的内容や状況に配慮しながら変える、話し手の言語行動と言語形式〉ということになる」(国立国語研究所 1990: 2)と述べる。

一方、滝浦は敬語を語用論的な観点から「相対敬語としての日本語のシステムでは、敬語の使用および不使用を決める〈視点〉の位置が決定的である」として、以下のよう述べている。「視点を話し手から切り離し、そこから見える人間関係を〈距離〉の関係として表現する。その距離は量的なものではなく、関与する諸人物を”ウチ”的な関係と”ソト”的な関係とに振り分ける線引きの仕方において表現される。つまり、敬語の使用は対象人物がソト的な関係の中におかれることを表示するのであり、それゆえ、ある人物に敬語を用いることは、他のウチ関係におかれた人物に敬語を用いないこととつねに表裏をなす。」(滝浦 2005: x-xi)

「敬語表現」とは敬語を使った表現のことであり、話者間の社会的階層、社会的地位の差、年齢の差、文化的要素、相手との心理的距離感等が反映され、それぞれの言語において様々な形で表現される。ときに敬語は、敬意を表すための敬意表現と同様であると誤解される場合もある。しかし、国語審議会の答申によれば「敬意表現」とは、「コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである」

と定義される (2006: 125,143-144)。本稿で対象とするのは、日本語とペルシア語の間の敬語表現の対応であり、必ずしも敬意表現ではないことに注意を促しておく。

5. 3. 4. 2. 敬語と敬意表現

次に「敬語」と「敬意表現」との関係を、2000年12月8日に国語審議会により出された答申「現代社会における敬意表現」に基づいて考察する。同答申では、「敬意表現」とは、「コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである」と定義され、また「敬語」に関しては「日本語の敬語は、古代から現代に至るまで種々の変化をたどりながら、一貫して人間関係を踏まえた言葉の使い分けのための言語形式として存在してきた」と述べられている。すなわち、「敬語」とは「敬意表現」を実践するためのストラテジーの一種として選択されるシステム化された言語形式である。言い換えれば、「敬語」とは「敬意表現」というカテゴリーにおける下位区分に位置する。この点について、上記の答申では「本答申では相手や場面に配慮した言葉遣いは敬語以外でも行われていることに注目し、敬語に加え、敬語を使わずに配慮を表す表現も含め、「敬意表現」として扱うものである」とまとめている。

また、滝浦 (2005:97) は敬意表現が、ブラウン&レヴィンソンが提示したポライトネスの訳語として採用されたと述べている。

このように、敬語、または敬語が使用される表現という敬語表現は敬意表現と同義ではなく、その一部であると言える。また、敬語は、言語形式、つまりラングに注目して論じられるが、一方敬意表現では、パロール、つまり言語表現の使用に注目する。

(井出 1989 : 143, 144)

以上のことを踏まえ、本章で論じるのは、日本語、英語ならびにペルシア語における言語形式、つまり敬語表現 (敬語を使用した表現のこと) であり、言語表現の使用、すなわち敬意表現ではない。

I. 言語間における敬語形式の異同

本論文で考察の対象とする日本語(SL)、英語(EL)ならびにペルシア語(PL)においては、敬語はどのような形式で表現されるのであろうか。また、日本語における敬語表現は、様々な外国語にいかに取り入れられ、どのように翻訳されるのだろうか。

南 (1987:16) によると、国語学でよく使用される術語に「待遇表現」がある。待遇表現という概念は一般性がある、外国語の敬語表現における研究の場合にもこうした概念を考えておく必要があるだろう。

狭い意味の敬語にしる、範囲の広い待遇表現にしる、日本語はその種の表現を豊富に持っている言語である。しかし決して日本語だけが敬語をもっているのではなく、世界の色々な言語には色々な形の敬語的な表現が見出される (南 1987:31)。

南は世界の諸言語の敬語表現を日本語型敬語と非日本語型敬語に分類した。日本語型とは、敬語表現のための、多くの専用の言語要素を持ち、さらにそれらの言語要素がはっきりと組織化されているものである。これに比べて非日本語型はそれ以外のものであり、敬語表現のための専用言語要素を持たないか、もっていても数が少なく、むしろ一般的な言語要素の用法に依存するか、あるいは非言語表現をもちいるものである (南 1987 : 37)。同氏は韓国語、朝鮮語ジャワ語やヒンディ語などを日本語型に分類した。その一方、南 (1987:44) は非日本語型の敬語を持つ代表的な言語として、挙げられるのは英語であろうと指摘した。

アーザルパランド (2008) はペルシア語には尊敬語・謙讓語が存在し、日本語と同様に敬語が組織的に整備された体系的な敬語表現があり、さらに日本語と共通する尊敬表現の特定の動詞も存在すると主張した (アーザルパランド 2008: 451, 455)。日本語とペルシア語における敬語について、文体面ならびに表現面からの相違については、ⅠおよびⅡに詳述する。アーザルパランド (2010:2) によると、モガル王朝時代 (1526-1858) におけるインドではペルシア語が公用語として使用されたため、ヒンディ語の敬語表現はペルシア語の強い影響を受けて来た可能性が高い。その結果、現在のヒンディ語においても、多くのペルシア語由来の語彙を見出すことができる。それにしたがって、ヒンディ語が日本語と同様な体系的な敬語表現を有しているなら、ペルシア語も日本語と同様に体系的な敬語表現を有していると言えよう。

南は、英語には敬語表現が全くないとは言えず、各種の敬語表現の例を挙げる事ができると述べた。すなわち、英語には日本語型のような敬語の専用要素が少ないので、一般的な言語要素の組み合わせによって、様々な話し手の敬語的顧慮を表しているのである (1987:44)。また、同氏は英語には「敬語表現」は数が少なく、相手に対する尊敬の気持ちは主に「言語表現・表現形式」の形で表されると述べる (南 1987:454, 455)。これは、国語審議会の答申における「敬意表現」の範疇に属すると考えられる。

上記のように、ペルシア語は日本語と同様に体系的な敬語表現を有するため、日本語における尊敬語・謙譲語のペルシア語への翻訳は困難ではないと思われる。一方英語においては、日本語やペルシア語とは異なり、組織化された敬語表現はあまり見られない。したがって、日本語における敬語表現が、英語を経由してどのようにペルシア語に伝達されるかは興味深い。

II. 言語文体

言語学の分野における最も重要な課題の一つは言語文体⁹の考察である。言語社会においては、公務上の場面であるかどうか（公式の度合い）、話し手および聞き手の親疎や社会地位によって様々な言語文体が使用される。現代ペルシア語は、敬意文体（deferential）、形式ばった文体（formal）、やや形式ばった文体（semiformal）、口語文体（colloquial）、俗語文体（slangy）の5段階の言語文体を有している（Afkhami 2010: 5）。

各文体の間には明確な限界は存在しておらず、一部は重複する場合もある。

Deferential style は、話し手および聞き手の双方は社会地位が非常に高く、とても形式ばった場面の場合に使用される。例えば、大使間の会話、高地位の役職の人、また学者の間の会話、または社会地位や親密度合いの差が著しい場合において用いられる文体であり、口語文体または俗語文体に見られるような助詞などの省略や簡略化が見られない。Formal style は標準語を基本とし、文学・科学、技術作品の執筆、講演会や大学の講義、裁判所、テレビ・ラジオ放送などにおいて使用される。口語文体または俗語文体と比べると、助詞などは省略・簡略化されない。Semiformal style は formal style および colloquial style のそれぞれと一部の特徴を共有する。Semiformal style が使用されるのは、例えば教室における先生に対する生徒の話し方、会社における上司に対する社員の話し方など、話し手と聞き手の人間関係が形式ばった度合いが低くなり、口語体に近い場面である。Semiformal style において、相手に対して敬意を表す際、動詞につく単数二人称用の語尾の代わりに複数二人称の語尾が用いられる。Colloquial style において形式ばった話し方が使用される度合いは Semiformal style におけるよりも低く、例えば文学、技術、科学上の語彙などの非常に形式ばった表現は用いられない。

母音または子音を変えた「アプラウト的豊語」は Colloquial style の特徴であり、その

⁹ Language style

例として *čiz- miz* (物など)、*kāqaz- māqaz* (紙やそれに類似したもの)、*qātī- pātī* (混ぜ混ぜ)、*sāf o suf* (つやつや) が挙げられる。この文体は主に様々な教育レベル、年齢、社会階級などの一般庶民によって話されるスタイルである。**Slangy style** は階級の低い一般庶民や、夫婦や友人や家族といった親密な関係の間で使用される。このスタイルはある程度 **colloquial style** と重複する場合があるが、**Slangy style** ではくだけた表現の使用頻度が高い。このスタイルは主に、経済的・社会的低階級、低学歴の人々によって使用されるため、その大部分は他の言語文体において用いられることはなく、その例としては悪口や軽口が挙げられる。

英語において Joos (1961) は言語スタイルを凍結文体 (**frozen**)、形式ばった文体 (**formal**)、諮問文体 (**consultative**)、略式文体 (**casual**)、親密文体 (**intimate**) の5段階に区分している。**Frozen style** は凍結された文体であり、裁判所や教会における結婚式など非常に公式的な場面、およびシェークスピアなど昔の文学作品において使用された。**Formal style** は講演会や大学の講義などで使用される形式ばった文体であり、**consultative style** は小人数で諸問題を話し合う非公式的な会議などで話される文体である。**Casual style** は友人および同僚同士で用いられる、俗語などくだけた話しことばである。**Intimate style** は夫婦や家族やとても親しい友人の間で使用され、省略や簡略化された表現がその特徴である。

日本語における文体¹⁰とは、主に、文末の述語の形式として表示され、用途・形式・場面などによって使い分けられる。文体は、話しことばと書きことばとに区分される場合もあるが、別の視点からは聞き手に対する敬意の度合いの差による普通体と丁寧体も存在する。

普通体は、「する」「した」「しない」「しよう」「た」「だった」「ではない」「だろう」などの普通形を用いる文体で、小説や日記、また親しい友人間の会話などで用いられるものである。それに対して、丁寧体は、聞き手または読み手に敬意を表わすときに用いられるため、目上の人や親しくない人と話すときや改まった場面、また手紙文などで使われ文体である。

日本語は語彙的な敬語とともに文法的な敬語表現の言語形式も持っている。英語およびペルシア語においても語彙的・文法的な差異によって、言語文体が異なる。文法的な観点から見ると、英語およびペルシア語では、受動態は他のスタイルに比べて

¹⁰ スタイル

formal style において遥かに多く使用される。

また、アーザルパランド (2010: 11-14) によると、日本語における「敬語表現」には「言材としての敬語」、「語句としての敬語」、また敬語専用の文法要素および言語要素が体系的ならびに組織的に発達し、総合的な敬語表現として広く普及している。しかし、英語においては様々な文法要素および語彙要素を使用することによって、「敬語表現」を通して敬意を表しているが、「言材としての敬語」は僅かに存在するのみである。また、アーザルパランド (2010: 56) が指摘するように、英語のように体系的な敬語表現を有しない多くのインド・ヨーロッパ語族諸言語を始め、世界諸言語の数多くの言語においては、敬語表現の一種として婉曲表現が用いられると考えられる。現代ペルシア語の場合は、「言材としての敬語」が数多く存在するとはいえ、日本語と比較すると少数であり、また、「語句としての表現」は日本語と比べて少ない。また、現代ペルシア語では日本語と同様に、敬語専用の文法要素および言語要素が体系的ならびに組織的に発達し、総合的な敬語表現として広く普及している。

III 日本語とペルシア語の敬語表現の違い

前述のように、日本語とペルシア語の「敬語表現」には、「言材としての敬語」、「語句としての敬語」、ならびに敬語専用の文法要素および言語要素を有するという共通点が存在する。こうした共通点は、日本語と英語、また英語とペルシア語との間にはほとんど見られない。ただし、日本語とペルシア語の「敬語表現」には、次に論じるような相違点も存在する。

日本語の敬語表現は、一般に尊敬表現、謙譲表現、丁寧表現、美化表現の四種に分類される。一方、ペルシア語においては、吉枝 (2000: 13)、アーザルパランド(2010: 48)が指摘するように、敬語表現などに対する固定した名称は存在しない。

アーザルパランド (2010:54) が述べるように、ペルシア語の敬語表現における尊敬表現、謙譲表現は日本語とほぼ同様に体系化されている。しかし、ペルシア語においては、丁寧表現や美化表現は日本語と同じようには体系化されていないため、こうした表現に類似するニュアンスを伝えるためには、婉曲表現が使用される。

先述の通り、ペルシア語の敬語表現は英語より日本語に似ている。例えば、謙譲語の使用は、昔から社会的に高く評価されている。すなわち、謙譲語や謙遜の意を表す言語行動・非言語行動とは、地位や身分の低い者ではなく、知識人や宗教指導者等社会的な地位が高い人物が用いるものとされてきた (アーザルパランド 2010: 28, 29)。

ペルシア語の敬語表現においては「絶対敬語」も存在する。すなわち、イラン人は他人に向かって自分の両親や家族について語る場合や、また部外者に向かって自社の社長のことを話す場合等にも尊敬語を使用することがある。

このように、敬語表現に関してペルシア語は英語よりも日本語に似ているが、相違点も有する。以下に、具体的な例を使用しながら、実際に日本語における表現が英語を通してどのようにペルシア語に翻訳されたか見ていく。さらに、同じ日本語を筆者が直接ペルシア語に翻訳した訳文との比較を通して、英語を経て翻訳されたペルシア語文が、重訳によってどのように影響を受けているか、検討したい。また、直接日本語をペルシア語に翻訳し、その翻訳されたペルシア語訳文を、英語を通ったペルシア語訳文と比較してみた。

(1) [SL] どんなに一目 会いたがっておりました ことか。(69)

[EL] Oh, how she wanted to see you once more.(28)

[PL] nemīdunī čeqadr dust dāšt ye bār dīge
 知る.NEG.IND.PRES.2SG どんなに 好む.IND.PAST.3SG もう 一回

bebīnad-et.(27)

見る.IND.SUBJ.PRES.3SG-PRON.SUF.2SG

➤ どんなにもう一度 君に会いたがっていたか、知らないでしょう。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

čeqadr dust dāšt šomā ro bebīne.
 どんなに 好む.IND.PAST.3SG あなた POSTP 見る.IND.SUBJ.3SG

➤ どんなにあなたに会いたがっていました ことか。

SLにおける「会いたがっておりました」という表現に含まれる「おりました」は「いる」の謙遜語である。この表現は「she wanted to see you」とELに翻訳され、主語や目的語が付加されたことによって具体化された。同様にELからPLへは「dūst dāšt bebīnad-et (君に会いたがっていた)」と翻訳され、このプロセスにおいて主語が省略

された。PL 訳文において謙譲表現における敬意まで伝達されていない。筆者による直接日本語からペルシア語に翻訳された文においては、相手に対する敬意を表すために、通常相手に対して使用される単数二人称代名詞の変わりに複数二人称代名詞が使用されることによって、尊敬の意が表された。日本語における「～ておる」という謙譲語動詞は PL には存在しないため、SL 文におけるような動詞の変更によって謙譲を表現することは不可能である。その代替策として、ペルシア語の敬語表現において最も多用される単数 2、3 人称代名詞の代わりに複数代名詞を用いる方法を採用して、敬意を表すことができた。その結果、EL 経由の PL 訳と比較して、直接 SL から翻訳された PL 訳の方が、敬意がより伝達されたと思われる。

(2) [SL] ごらんなすって下さい。(69)

[EL] Please come see her. (28)

[PL] lotfan biā bebīn-eš. (33)
 お願いします 来る.IND.IMP.2SG 見る.IND.IMP.2SG-PRON.SUF.3SG

➤ どうぞ来て、彼女を見て下さい。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

1. lotfan molāheze befarmāyīd.
 お願いする ご覧になる.IND.IMP.2PL

➤ ご覧になって下さい。

2. lotfan bebīnīd-eš.
 お願いする 見る.IND.IMP.2PL-PRON.SUF.3SG

➤ 彼女をご覧下さい。

SL における「ごらんなすって下さい」という表現は敬意を表す表現であり、「なすって」は「なさって」の口語の変形である。この SL は「Please come see her」と EL に

昼ご飯.PRON.SUF.2PL POSTP.を 召し上がる.IND.IMP.2PL POSTP.を

esterāhat befarmāyīd.

休み なさる.IND.IMP.2PL

➤ お昼ご飯を召し上がって、お休みになって下さい。

SLにおける「お昼ご飯を召し上がって、お休みになって下さい」のEL訳は「Please have some lunch and take a rest」である。日本語において「食べる」という意味を表す場合、「召し上がる」「いただく」など、尊敬語や謙譲語といった形の敬語が存在し、文脈に応じて使い分けられる。上記のEL訳では、SLの「召し上がる」は「eat」ではなく、より婉曲な表現である「have」に翻訳されたのは敬意を伝えようと配慮されていると言える。そして上述のEL訳文は「lotfan ye kam nāhār boxorīd va esterāhat konīd」すなわち「少しお昼ご飯を食べて、休んでください」のようにPLに翻訳されている。上記のPL訳文では日本語において用いられた敬語のレベルではないが、語尾単数二人称代名詞の代わりに複数二人称代名詞を使用することによって、敬意を表そうとしていると考えられる。このようなプロセスを経て生み出されたPLの訳文は、原文であるSLにおける敬意を100パーセントとは言えないまでも、ほぼ伝達していると思われる。

SLから直接翻訳されたPL訳は「nāhār-etun ro meil befarmāyīd o esterāhat befarmāyīd」、すなわち、「お昼ご飯を召し上がって、お休みになって下さい」である。ここではSLとどのようにPLの特定の動詞を用いることによって敬意を表す手法により、文字通りの意味と敬意の両者が適切に伝達された。

(4) [SL] 私お母さんと町の お医者さまへ参ります の。(205)

[EL] I'm going with my mother to the doctor's in town. (108)

[PL] dāram (bā māmān-am) mīram
IMPF.PREP PREP 母さん.PRON.SUF.1S 行く.COP.IND.IMP.1SG

šahr, matab-e doktor.(114)
町 診察室.EZ 医者

- 母さんと一緒に町へ、医者の診察室へ行くところなの。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

man	va	mādar-am	(bā ham) mīrīm
私	CONJ	お母さん-PRON.SUF.1SG	行く .IND.PRES.1PL (一緒に)

xedmat-e	āqā-ye	doktor-e	šahr.
面前.EZ	さん.EZ	医者.EZ	町

- 私はお母さんと一緒に町のお医者さんに参ります。

上例の SL は第三者に対する敬語表現である。SL の「私お母さんと町のお医者さまへ参りますの」は EL に「I'm going with my mother to the doctor's in town」と翻訳されている。「参る」という「行く」の謙讓語に相当する言葉は EL に存在しているにもかかわらず、「visit」という婉曲的な動詞の代わりに「go」が使用されているため、PL 訳においてもその敬意は当然配慮されていない。その EL は、PL において「dāram ba māmān-am mīram šahr, matab-e doktor」すなわち「母さんと一緒に町へ、医者の診察室へ行くところなの」と訳されている。「お母さん」が「母さん」に変わるのはくだけた話し方であるが、「医者の診察室」を付加することで、文体は少し形式ばったようになったと言える。しかし、全体的に敬意のニュアンスが見られない。

三文化圏における敬語表現の差異に起因して、「私お母さんと町のお医者さまへ参りますの」という敬語を用いた SL の原文は、PL の訳文では「母さんと一緒に町へ、医者の診察室へ行くところなの」と変化したため、敬意が全く配慮されていない。

筆者によって翻訳された PL 訳は「man va mādar-am bā ham mīrīm xedmat-e āqā-ye doktor-e šahr」、すなわち「私はお母さんと一緒に町のお医者さんに参ります」となっており、敬意のニュアンスが伝達されていると思われる。「参る」に相当するペルシア語の特定動詞は存在しており、知らない人と形式ばった文体で話すのも異常ではないので、直接翻訳の方が正当と言える。

- (5) [SL] まあ、御一緒でしたの。ちっとも存じませんで失礼いたしました。(234)

qatār tašrīf dāštīn? aslan motevajjeh našodam.vāqe'an ozr mīxām」要するに、「まあ、あなたもあの電車にいらっしやいましたか。ちっとも気づきませんでした。申し訳ありません」である。SLにおける美化語の「ご一緒」に相当する言葉がPLには存在しないため、ここでは相手に対して複数二人称代名詞を使用した。また、「いらっしやる」という「いる」にたいする尊敬語の特定動詞は同様にPLにも存在しているため、敬意がおよそ同程度伝達されたと思われる。上記の分析が示すように、ELを経由して翻訳されたPL訳においては、敬意のニュアンスはSLより丁寧度が低い敬語を用いて表されている。これと比較すると、SLから直接翻訳されたPL訳の方が、敬語のニュアンスをより適切に伝達していると思われる。

(6) [SL] いつか安藤さんと ご一緒 のところを銀座でちょっと お目にかかった だけなんですが、(...)。(234)

[EL] I met you once on the Ginza with Mr. Ando(...)(103).

[PL] ye bār šomā ro bā āqā-ye āndo tū gīnzā dīdam.
 一回 あなた POSTP PREP さん.EZ 安藤 PREP 銀座 見る.IND.PAST.1SG

➤ 一回あなたを安藤さんと一緒に銀座で見ました。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

yeḵ bār vaqtī hamrāh-e āqā-ye āndo tū gīnzā būdīd
 一回 とき 一緒.EZ さん.EZ 安藤 PREP 銀座 COP.IND.PAST.2PL

barāye moddat-e kūtāhī ziyārat-etūn kardam.
 のため 期間.EZ 短い.iSUF お目にかかる.IND.PAST.1SG (PRON.SUF.2PL)

➤ 一回安藤さんと一緒に銀座にいらっしやるときに、お目にかかりました。

SLにおける「いつか安藤さんとご一緒のところを銀座でちょっとお目にかかっただけなんですが、(...)」はELに「I met you once on the Ginza with Mr. Ando(...)」と翻訳されている。ELのPL訳は「ye bār šomā ro bā āqā-ye āndo tū gīnzā dīdam」つまり、「一回あなたを安藤さんと一緒に銀座で見ました」であり、複数二人称代名詞を使用

し、敬意はある程度伝達されるように思われる。このようなプロセスを経て生み出された PL の訳文は「一回あなたを安藤さんと一緒に銀座で見ました」となった。敬意のニュアンスとしては、単数の二人称代名詞の代わりに複数の二人称代名詞を使用しただけである。このように、PL には SL の原文の敬意が伝達されているが、込められた敬意レベルが SL と比べて低いと思われる。

しかし、直接 SL から PL に翻訳された文は「yek bār vaqtī hamrāh-e āqā-ye āndo tū gīnzā būdīd barāye moddat-e kūtāhī ziyārat-etūn kardam」つまり、「一回安藤さんと一緒に銀座にいらっしゃるときに、お目にかかりました」というように表現された。上記の例文にも示したように、SL における「ご一緒」のような敬語が PL に存在しないため、動詞の活用に、語尾につく人称代名詞は単数二人称ではなく、複数二人称を使用した。「būdīd (あなた～でした)」は「tašrīf dāštīd(いらっしゃいました)」程敬語のレベルが高くなって中程度だと言えるため、日本語における「いらっしゃる」に相当すると思われる。さらに、PL には SL における「お目にかかる」という謙譲語に相当する「xedmat resīdan」という特定動詞が存在し、これは例文の場面にふさわしいと考えられるため用いられている。このように、EL を通した PL 訳と比較すると、SL から直接翻訳された PL 訳は敬意をより適切に伝えていると思われる。

(7) [SL] 浅田さんはね、私の顔が段々新吉さんに似て来るって おっしゃる のよ。
(235)

[EL] Mr. Asada says I've gradually come to resemble Mr. Shinkichi.

[PL] āqā-ye āsādā mīgan (dāram) kam kam
さん.EZ 浅田 言う.IND.PRES.3PL 持つ.IND.PRES.1SG 段々

šabīh-e āqā-ye šīnkīči mīšam. (108)
似ている.EZ さん.EZ 新吉 になる.IND.IMP.1SG

➤ 私は段々新吉さんに似て来ると、浅田さんが言うんです。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

āqā-ye āsādā、 mīfarmāyan man dāram rafte rafte
さん.EZ 浅田 おっしゃる.IND.PRES.3PL 私 持つ.IND.PRES.1SG 段々

šabīh-e	āqā-ye	šīnkīčī	mīšam.
似ている.EZ	さん.EZ	新吉	になる.COP.IND.PRES.1SG

➤ 浅田さんは、私が段々新吉さんに似て来ると言っています。

SLにおける「浅田さんはね、私の顔が段々新吉さんに似て来るっておっしゃるのよ」という表現は「Mr. Asada says I've gradually come to resemble Mr. Shinkichi」とELに翻訳されている。「おっしゃる」という尊敬語は「says」とELに翻訳され、敬意の意味が反映されていない。このEL表現は「āqā-ye āsādā mīgan (dāram) kam kam šabīh-e āqā-ye šīnkīčī mīšam」すなわち「私は段々新吉さんに似て来ると、浅田さんが言うんです」とPLに翻訳されている。

ELにおける「say」はPLにおいて「mīgan」のように浅田さんに対する、動詞につく語尾代名詞の単数三人称の代わりに複数三人称代名詞を使用して翻訳されたため、敬意はある程度伝えられたと思われる。SLの原文はPLには「私は段々新吉さんに似て来ると、浅田さんが言うんです」と訳され、敬意はある程度伝達されたと思われる。

直接SLから翻訳されたPL訳文は「āqā-ye Āsādā, mīfarmāyan man dāram rafte rafte šabīh-e āqā-ye šīnkīčī mīšam」つまり、「浅田さんは、私が段々新吉さんに似て来るとおっしゃっています」となっている。PLには、SLにおける「おっしゃる」という敬語に相当する「farmūdan」という日本語と敬語レベルは同等である特定動詞の敬語が存在するため、同様なレベルの敬意が伝達され、ELを経由したPL訳より、適切な翻訳となったと思われる。

(8) [SL] この子を見ていただきたいの。(238)

[EL] I want you to look at this child. (106)

[PL]	behet	goftam	be	īn	bačče	negāh kon. (110)
	君に	言う.IND.PAST.1SG	PREP	この	子供	見る.IND.IMP.2SG

➤ この子を見てと言ったでしょう。

筆者による直接翻訳([SL]→[PL])

mīxām	lotf konīd	be	īn bačče	negāh konīd.
欲しいがる.IND.PRES.1SG	親切にする.IND.SUBJ.2PL	PREP	この子	見る.IND.SUBJ.2PL

➤ この子を見ていただきたいの。

SLにおける「この子を見ていただきたいの」という表現は、「I want you to look at this child」とELに翻訳されている。「見ていただきたい」という敬語表現はELの「I would like you to see」という語句に相当するのにもかかわらず、「I want you to look」と翻訳され、敬意のニュアンスが反映されなかった。その理由の一つとして、「もらう」という動詞の謙譲語である「いただく」に「～たい」が付加され、丁寧体の「です」で終わらず、普通体の型で使用されていることが挙げられる。こうしたELへの翻訳に際して生じた誤解（すなわち「I want you」という語句）に起因して、PL訳は「behet goftam be īn bačče negāh kon」すなわち「この子を見てと言ったでしょう」となり、敬意の消失に加えて、命令口調となった。このように、SLにおける「この子を見ていただきたいの」という表現は「この子を見てと言ったでしょう」というPL訳文となり、原文の意味伝達にはずれが生じ、読者に与える印象がかなり大きく異なってきた。

筆者によって直接SLからPLに翻訳された文は「mīxām lotf konīd be īn bačče negāh konīd」つまり、「この子を見ていただきたいの」と表現されている。「lotf konīd」というPLは「親切にする」という意味であり、ELにおける「do a favor」に相当する語であり、何かを依頼する際、その前に来る言葉によって敬語の程度が調整される。上記のSLによると、「いただく」に「～たい」がつき、「です」がついていないということで、PL訳文における敬語の程度を少し低下させ、「lotf konīd」の前に「mīxām（私は欲しい）」という動詞を使用し、SLに適合させた。このように、ELを経由したPL訳は誤解が原因となって適切には翻訳しなかったが、SLから直接翻訳されたPL訳では、同程度の敬意を表す語が選択されており、場面上でも使用に問題がないため、適切な意味伝達がなされたと思われる。

例文(1)から(8)において、敬意が伝達されたか否かを敬語表現の視点から分析した結果、および直接日本語からペルシア語に翻訳された訳文との比較は表6にまとめる。

表6. 敬語において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			文字通りの 意味伝達	敬意伝達	文字通りの 意味伝達	敬意伝達
1	受	受	○	×	○	○
2	受	受	○	×	○	○
3	受	受	○	○	○	○
4	受	受	○	×	○	○
5	受	受	○	○	○	○
6	受	受	○	○	○	○
7	受	受	○	○	○	○
8	受	受	×	×	○	○

まとめ

敬語表現を対象に SL から EL への翻訳、および EL から PL への翻訳への過程における変遷を調べた結果、次のような結論を得た。

分析対象とした例文 8 件の中で、SL から EL を経た PL への重訳の結果、文字通りの意味とともに敬意も翻訳された例文は 4 件[例(3), (5), (6), (7)]である。これらの例文では、敬意は完全に SL と同様な敬語レベルで翻訳されているとはいえないが、ある程度まで PL 訳文に反映されている。先述のように、EL には体系的な敬語表現が存在せず、また言材としての敬語の数もきわめて限られている。そのため、EL では婉曲的な表現を使用することにより SL における敬意を伝達しようと試みられており、その雰囲気は PL 訳にも伝わっている。一方、PL においては SL ほどではないが敬語表現が存在し、単数第二人称代名詞を複数二人称代名詞に変え、また動詞につく語尾代名詞の形式が使用されている。

一方、PL 訳において SL の文字通りの意味が伝達されているが、敬意は捨象されてしまった例文は 3 件[例(1), (2), (4)]存在している。これらの例文では、SL における敬意が EL において配慮されなかったため、PL 訳においても伝達されなかった。しかしもう一つの理由として(1)および(4)例文には謙譲語のみが使用された点が挙げられる。EL はもちろんのこと、PL においても日本語に比べて謙譲語が少ないため、それに相当する特定の謙譲語が不足する。SL 文に尊敬語ともに謙譲語も存在している場合には、尊敬語に対して、単数二人称代名詞の代わりに複数二人称代名詞を使用するだけ

で、ある程度敬意のニュアンスが伝達可能であるが、謙讓語のみの場合は翻訳しにくいと推定される。

SLの文字通りの意味とともに敬意も抜け落ちてしまったPL訳文は1件[例(8)]だけであった。その理由は、EL訳において誤解が生じたため、PL訳においてもニュアンスが大きく異なってしまったことと思われる。このように、重訳によって敬語表現における意味伝達に成功した例文は半数に過ぎず、またその成功例においてもSLと同様な敬意レベルでは翻訳されていないと思われる。

次に、筆者が直接SLをPLに翻訳した訳文と、SLからELを通して重訳されたPL訳との比較を試みる。上述のように、重訳における敬語のニュアンスの伝達成功率が約5割にとどまる。これに比べて、筆者による直接訳は全例文において敬意の伝達に成功しているという予想通りの結果が得られた。その中で、重訳を経た結果敬意が伝達されなかった例文(4件[例(1), (2), (4), (8)])もあれば、重訳を経由しても敬意が適切に伝達された例文(3件[例(3), (5), (6)])も存在する。重訳を経ても敬意の伝達に成功した例文では、全てのケースにおいてSLで尊敬語が使用されている。当然ながら尊敬語と謙讓語の組み合わせからなるSLの例文も存在するが、このような場合にはPLに伝達されたのは尊敬語の形のみであり、謙讓語の伝達は見られない。また、ELを経由して翻訳されたため、その尊敬語の表す敬意レベルは直接翻訳された尊敬語のレベルに達していないことは言うまでもない。一方、重訳で敬語表現が消えた例文は、SLにおいて謙讓語が用いられているケースがほとんどであることが分かった。

その理由として、重訳の場合は媒介語であるELにSLと同様な敬語体系が存在しないため、SLからELへの翻訳に際して敬意が捨象され、それがPL訳に反映されたことが挙げられ、この問題点は本研究によって新たに判明したと言える。

また、SLとPLの間では、敬語が使用される場面や状況により敬意レベルが異なる場合も多い。しかし、ペルシア語における謙讓表現は日本語程多くない。またペルシア語では、女性が謙讓表現を用いる頻度は男性よりも低いと言われる。そのため、SLの知識を持たない訳者がELをPLに翻訳する場合は、特に謙讓語が配慮されない傾向がある。しかし、日本語の敬語表現を意識しながら直接PLに翻訳する場合は、SLにそのまま相当する謙讓表現がPLには存在しない場合においても、ペルシア語が豊富に有する尊敬語などを用いることによって、上記の直接翻訳の例に見られるようにSLにおける文字通りの意味とともに敬意も伝達しうる。この点も、本研究によって新たに解明された。

5. 4. 異文化要素

一般に、「文化」は「言語」を含んだより広い意味で使われ、ある共同体の構成員が共通に持つ概念の集合体であると認知されている。滝川（1995）は、「文化」とは言語化されていない「沈黙のことば」であり、人間は言語を文化的環境の中で文化の一部として習得すると指摘している（1995:144）。Schumann（1978）は、言語は非常に詳細なレベルまでの意思疎通を可能にする文化の一部であり、言語と文化は切り離すことができないと述べる。

これらの見解を考え合わせると、言語は文化であるといえるのではないだろうか。世界中には様々な言語が存在しており、それぞれ異なっているため、当然異なる文化を有する。この言語の背後にある異文化が、どのように他の言語に伝達されるかは問題である。異文化と翻訳の関係については、王輝（2003）等が述べるように、異なった歴史や社会生活を経験した民族は異なる価値観や思考様式を持っており、それらの特徴は言葉を通して表されている。理想的には文学の翻訳は文化的概念も訳出すべきである。しかし、ある言語に伝統的に存在する語彙は必ずしも他言語文化内でも共通の理解をもたらすとは限らない。つまり、ある語彙が自国語に存在するからといって、必ず、外国語にも存在するわけではないため、そのような語彙の翻訳には、深い考察が必要とされる。

異文化要素には様々な分類法が存在し、先行研究においては、例えば、Nedergaard (Nedergaard-Larsen 1993)が地理、歴史、社会、文化の4項目、Vandeweghe (2005)が地理、文化人類学、社会・政治の3項目、およびRamière (2004)が地理、歴史、社会・文化の3項目にそれぞれ分類している（篠原 2013:83）。Pederson (2011)は異文化要素を度量衡、固有名詞（人名、地名、制度上の名称、商標）、職業上の役職名、料理および酒類、文学、政府、娯楽、教育、スポーツ、技工物およびその他の12項目に分類している（Pedersen 2011: 59-60）。しかし、Pederson が指摘するように、上記の分類における項目には重複や限定性などの問題点があるようである（2011）。

本研究では、上記の各先行研究における異文化要素の分類法を考慮した上で、異文化要素をニューマーク(1988)の分類に従い、生態 (Ecology)、物質的文化(人工物) Material culture (artefacts)、社会文化、仕事と余暇 (Social culture - work and leisure)、組織、風習、活動、手順、概念 (Organisations, customs, activities, procedures, concepts)、ジェスチャー、習慣 (Gestures and habits) の五つのカテゴリーに基づいて調査した。

Newmark の分類法を選択した理由は、本研究の対象とする文学作品は市井に生きるひとびとの日常生活を描いたものであり、その内容を考慮すると、本研究で重訳の分析において採り上げる異文化要素については、この分類法が最もふさわしいと考えたためである。以下に、各カテゴリーに属する異文化要素を含んだ例文の重訳について検討する。

5. 4. 1. 生態 (Ecology)

植物、動物、風、平野、丘陵

日本における盆栽や魚の様々な種類、台風、津波、梅雨や雨の様々な呼び名のこと。

- (1) [SL] 「あら！鈴虫だわ。バッタじゃなくてよ。」と、女の子は褐色の小さい虫を見て眼を輝かせた。(川端、23)

[EL] “Oh! It’s not a grasshopper. It’s a bell cricket.” The girl’s eyes shone as she looked at the small brown insect. (14)

[PL] “vāi! In ke malax nīst.
INTRJ! これ REL.PRON バッタ COP.NEG.IND. PRES.3SG

jīrjīrak-e.” češmān-e doxtarak bā dīdan-e
鈴虫-口語.COP.IND.PRES.3SG 眼.PL.EZ 少女 PREP 見る.INF.EZ

hašare-ye qahveī-e kučak barq zad. (26)
虫.EZ 茶色.EZ 小さい 輝く.IND.PAST.3SG

- 「あら！これはバッタじゃなくて、コオロギよ。」 小さい茶色の虫を見て少女の眼が輝いた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

vai, īn suzumušī*-e . Malax nīst ke.
INTRJ これ 鈴虫-口語.COP.IND.PRES.3SG バッタ COP.NEG.IND. PRES.3SG REL.PRON/よ

češmān-e doxtarak bā dīdan-e hašare-ye kučak
眼.PL.EZ 少女 PREP 見る.INF.EZ 虫.EZ 小さい

qahveī-e suخته barq zad.
茶色.EZ 焦げた.ADJ 輝く.IND.PAST.3SG

➤ 「あら、これは鈴虫だ。バッタじゃないよ。」褐色の小さい虫を見て少女の目が輝いた。

上記の例に挙げられている SL における「鈴虫」は等価方略を用いて「bell cricket」と EL に翻訳されている。この語は翻案方略を用いて「jīrjīrak (コオロギ)」と PL に翻訳されている。このように、SL から EL、また EL から PL への翻訳方略はともに受容化方略であり、原文の「鈴虫」は「コオロギ」となっている。「鈴虫」および「コオロギ」はどちらもバッタ目のコオロギ科に属してはいるが、異なる昆虫である。EL の訳者は、自国に生息する昆虫の中で「鈴虫」と近い関係にある「bell cricket (コオロギ)」を訳語に使うことによって、SL の意味を伝えようとしたのであろうが、それでも文字通りの意味、また言外の意味までは伝えきれていないと思われる。

筆者により直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文はそのまま「suzumušī」と SL の音を表記し、その説明を脚注に記載する。生物のようにそれぞれの言語圏に存在しているものに対して他言語圏に同一なものが存在する場合は、等価な概念を用いることによって問題なく翻訳できるが、同一のものが存在しない場合は翻訳が困難である。特に地理的に大きく隔たった言語間の場合は、動植物などが大きく異なり、翻訳が難しい。目標言語に該当する言葉が存在しない場合、それに類似する言葉に翻訳するのは一般的な翻訳方略であるが、こうした場合には言葉のニュアンスが伝達されないと思われる。例えば、日本において昆虫の種類は豊富であり、日本独特の昆虫は数多く存在しているが、一方、豆類は日本語ではどれも一般的に豆と言われる。特に異文化要素の場合は、ナイダが提案した方略ではなく、ヴェヌティが取り上げた方略を使用するのはふさわしい。つまり、異文化要素を中心に異質化方略をとるべきである。上述のように、外国語から翻訳された作品を読む読者は、原書と同様なものを読みたいわけではなく、特に起点言語における文化や特徴などを知りたいと思われる。こうした要望に応えるには、起点言語の文化などを紹介するために、異文化要素を明確にし、その説明を加えればいいのか。こうした見地から、筆者による直接訳では、脚注に「バッタ目のコオロギ科に属している昆虫であり、秋に鳴く虫として古くから知られている」というペルシア語を記載する。この結果、上述の重訳

ッドは甘みがあり、異なる食感である。また色については、胡頹子は紅の赤であるが、センジェッドはオレンジ色の方に近い赤色である。上記の分析の結果、SL から EL への翻訳および EL から PL への異文化要素の翻訳における方略はどちらも受容化であることが判明した。こうした方略を用いて翻訳された PL の文は、SL のデノテーションおよびコノテーションの伝達はともに成功していないと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文は「Vāi če xošgel-e. qara-qāt-e.na?」すなわち「あら、綺麗ね。胡頹子なのね」である。グミとはグミ科グミ属の植物ならびにその実を指す。筆者が低木全体に星状毛があり、葉は全縁であり、果実は秋に赤く熟し渋味を有するというグミの特徴を念頭に「胡頹子」に相当する語彙、すなわち等価な語彙を調べた結果、形、色また味などもっとも等価な訳出は「qara-qāt」であることが明確になった。そのため、直接翻訳による PL 文では、このように文字通りの意味とともに語感も伝達された。

- (3) [SL] 全くそれは青い葉のある 珊瑚樹 のように見える程紅い実がみごとに実っている。(川端、118)

[EL] crimson berries were splendidly ripe, as if green leaves had grown on a branch of coral.(46)

[PL] dāne-h-ye zereškī rang-e senjed xeilī xub
粒.PL.EZ 深紅色.EZ センジェッド (グミの一種) とても よく

resīde bud, engār barg-hā-ye sabz ruye
熟する.IND.PAST.PERF.3SG まるで 葉.PL.EZ 緑色の の上.EZ

šāxe-i marjānī ruyīde bāšad. (45)
枝.iSUF 珊瑚の 生える. IND. SUBJ.PRES.3SG

- センジェッドの深紅色の実はとてもよく熟していて、まるで 珊瑚樹 に緑の葉が生えたかのようにであった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

dāne hā-ye sorx -rang-e mīve beqadrī kāmel resīde and ke
粒.PL.EZ 紅色.EZ 実 なんと十分に 熟する.IND.PRES.PERF.3SG REL.PRON

guyī ruye šāxe-ye marjānī barg-hā-ye sabz ruyīde ast.
 まるで の上.EZ 枝.EZ 珊瑚の 葉.PL.EZ 緑色 生える. IND.PRES.PERF.3SG

- 実の粒は十分に熟していて、まるで珊瑚樹の上に緑色の葉が生えたかのようである。

SLにおける「全くそれは青い葉のある 珊瑚樹 のように見える程紅い実がみごとに実っている。」という原文は転移および等価方略を用いて「The crimson berries were splendidly ripe, as if green leaves had grown on a branch of coral」と EL に翻訳されている。「青い葉のある珊瑚樹」という SL の表現については、「青い」が転移的な等価方略を用いて「green」と翻訳された結果、EL では「green leaves had grown on a branch of coral」と述べられている。「紅い実がみごとに実っている」という SL も同様に転移的な方略を用いて「The crimson berries were splendidly ripe」と EL に翻訳されている。「紅い」というのは「crimson」、「実」が「berries」と明示化された複数形を用いて翻訳されている。この EL 表現は転移および付加的な等価方略を使用して、「dāne-h-ye zereškī rang-e senjed xeilī xub resīde bud, engār barg-hā-ye sabz ruye šāxe-i marjānī ruyīde bāšad」すなわち、「センジェッド（グミの一種）の深紅色の実はとてもよく熟していて、まるで 珊瑚樹 に緑の葉が生えたかのようであった」という PL に翻訳されている。「珊瑚樹」という植物は日本独特のものではなく、EL 圏また PL 圏ともに知られている概念である。上述のように、SL から EL、また EL から PL への翻訳方略はともに受容化方略であり、原文の「珊瑚樹」は EL を通して PL に「šāxe-i marjānī（珊瑚樹）」と文字通りに翻訳され、SL におけるデノテーションとともにコノテーションは伝達されたと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文は「dāne hā-ye sorx-rang-e mīve beqadrī kamel resīde and ke guyī ruye šāxe-ye marjānī barg-hā-ye sabz ruyīde ast」つまり「実の粒は十分に熟していて、まるで珊瑚樹の上に緑色の葉が生えたかのようである」となった。最初の部分の「実の粒は」重訳を経由した「センジェッドの深紅色の実」という翻訳とは異なるが、この例文において対象にした「珊瑚樹」は重訳の場合と同様に「šāxe-ye marjānī」と訳された。この結果、直訳文では重訳と同様にデノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(4) [SL] 啄木鳥のように頭を下げていさぎよく敬礼する。(川端、112)

[EL] he bowed his head like a woodpecker, graciously, in greeting. (42)

[PL] sar-aš rā mesl-e dārkub, moaddabāne
頭.PRON.SUF.3SG POSTP.を のよう.EZ 啄木鳥 丁寧に.ADV

tekān dad.(40)

振る.IND.PAST.3SG

➤ (彼/彼女は) 頭を啄木鳥のように丁寧に振った。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mānand-e dārkub.i ke sar-aš rā pāyīn mī-āvarad,
のよう.EZ 啄木鳥-iSUF REL. PRON 頭.PRON.SUF.3SG POSTP.を 下げる.IND.PRES.3SG

sar-e xod rā be nešāne-ye salām bā-nezākat forud āvard
頭.EZ 自ら POSTP.を PREP しるし.EZ 挨拶 いさぎよく 下げる.IND.PAST.3SG

➤ 頭を下げる啄木鳥のように、自分の頭を挨拶の印としていさぎよく下げた。

SLにおける「啄木鳥」という語は等価方略を用いて「woodpecker」とELに翻訳されている。そのELは等しく等価方略を使用し、「dārkub (啄木鳥)」とPLに翻訳された。SLからEL、またELからPLへの翻訳方略はともに受容化方略であり、三文化圏においても同じ鳥が存在しているので、意味の伝達が的確になされて、デノテーションとともにコノテーションも伝達されたと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された文は「mānand-e dārkubī ke sar-aš rā pāyīn mī-āvarad, sar-e xod rā be nešāne-ye salām bā-nezākat forud āvard」、つまり「頭を下げる啄木鳥のように、自分の頭を挨拶の印としていさぎよく下げた」となる。文自体に変化が見られるが、それは他の項目(5.7.著者特有の表現)において分析するこの直訳によるPL文では、「啄木鳥」というEL圏とともにPL圏にも存在している鳥について、重訳文と同様にデノテーションとともにコノテーションも伝達されたとと思われる。

5. 4. 2. 物質的文化(人工物)Material culture (artefacts)

- (ア) 食品 (Food) 寿司、うどん、酒など
- (イ) 衣類 (Clothes) 着物、浴衣、足袋など
- (ウ) 住宅や町 (Houses and towns) 大阪府、北海道な
- (エ) 交通 (Transport) 新幹線、馬車、力車など

(5) [SL] 紅い 朝鮮飴 より綺麗ね。(川端)、119

[EL] They're prettier than red bean candy. (47)

[PL] unā az ābnabāt-hā-ye qermez ham qašangtar-an. (46)

それ/あれら口語 PREP 飴玉.PLEZ 赤い/紅い も 綺麗.COMP- COP.IND.PRES.3PL

➤ それらは赤い飴玉よりもずっときれいだね。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

čeqadr az bāsloq* hā-ye qermez qasang-tar-an

なんと PREP ゼリー飴.PLEZ 赤い/紅い 綺麗.COMP- COP.IND.PRES.3PL

➤ 赤いバスログよりきれいだね。

SLにおける「紅い朝鮮飴」は等価方略を用いて「red bean candy」とELに翻訳されている。「朝鮮飴」はELの「glutinous rice candy」に相当しているにもかかわらず、「bean candy」とELに翻訳されている。このEL表現は翻案方略を使用して「ābnabāt-hā-ye qermez (赤い 飴玉)」とPLに翻訳されている。「bean candy」はPL圏では想像がつかないものであるため、「candy」だけが翻訳されたと思われる。PLにおける「ābnabāt (飴玉)」というのは、殆ど球状で固形の飴のことを表す語であるため、まったく異なるイメージを与える。上記の分析が示すようにSLからELへの翻訳と等しくELからPLへの翻訳においても受容化方略が使用された。三文化圏における差異に起因して、PLの訳文は「飴玉」と暗示化され、「朝鮮飴」というSLの原文とはかなりかけ離れた意味を持つようになってしまい、文字通りの意味また言外の意味の両方とも伝えられなかったと思われる。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「čeqadr az bāsloq hā-ye qermez qasang-tar-an」、ようするに「赤いバスログよりきれいね」となり、脚注に「バスログ」は「朝鮮飴」という日本の和菓子に類似する意味の訳語であることを述べ、以下のようにそのペルシア語の説明を記載する。「朝鮮飴とは熊本の名物であり、砂糖と澱粉を加えた米の粉を練り上げて、片栗粉を塗した和菓子である」。一方、イランの「バスログ」とは砂糖と片栗粉を練り上げて粉砂糖または片栗粉を塗したもので、朝鮮飴と同様に食感は餅に似ている。訳文において「朝鮮飴」という原語の言葉をそのまま使用する場合は、読者にはそれは食べ物かどうか理解できずに混乱するかもしれない。こうした状況を避けるため、その場で説明する翻訳方略がある。あるいはこの方略では若干のずれが生じる恐れがある場合には、できるだけ近い意味をもつ「バスログ」を文中に記載しながら、SL 圏の和菓子そのものについて脚注で紹介するという方略も使用できる。こうして直接訳された PL の文では、SL における文字通りの意味と同時にそのニュアンスも伝達されたと思われる。

(6) [SL] 駄菓子 を並べた待合所の二階から、紫の襟の黄色い服を着た運転手が下りて来る。(川端、111)

[EL] The bus driver came down from the second floor of the terminal to the waiting area, where cheap candy shops stood in a row. He wore a purple collar on his yellow uniform.(41)

[PL] rānande-ye otubus az tabaqe-ye dovvom-e termināl be
 運転手.EZ バス PREP 階.EZ 2目.EZ 終着駅 PREP

salon-e entezār dar tabaqe-ye pāyīn āmad ke
 待合所 PREP 階.EZ 下 来る.IND.PAST.3SG REL.PRON

dar ān dakke-hā-ye foruš-e tanaqqolāt-e arzān-qeimat
 PREP それ/あれ 屋台.PL.EZ 販売.EZ お菓子.PL.EZ 安価の.ADJ

be radīf kenār-e ham čīde šode bud. yaqe-ye banafš-i
 PREP 列 並んで.ADV 並ぶ.IND.PAST.PERF.3SG 襟.EZ 紫.iSUF

ruye oniform-e zard rang-aš baste bud.(39)

のうえ.EZ 制服.EZ 黄色い.PRON.SUF.3SG 結ぶ.IND.PAST.PERF.3SG

- バスの運転手は、ターミナルの2階から、安菓子を売る屋台の並ぶ階下の待合所に来た。(彼は)彼の黄色い制服には紫色の襟をつけていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

rānande ke lebās-e zard bā yaqe-ye banafš be tan dāšt
運転手.EZ REL.PRON 服.EZ 黄色 PREP 襟.EZ 紫 着た.IND.PAST.3SG

az sālon-e entezār-e tabaqe-ye dovvom ke dar ān
PREP 待合所.EZ 階.EZ 2目.EZ REL.PRON PREP それ/あれ

maqāze-hā hale-hule čīde budand payīn mīāyad.
店.PL 駄菓子 並べる.IND.PAST.PERF.3PL 下りる.IND.PRES.3SG

- 紫の襟の黄色い服を着た運転手はお店が駄菓子を並べた待合所の2階から下りてくる。

SLにおける「駄菓子」という異文化要素は付加的な等価方略を用いて「cheap candy shops」とELに翻訳されている。「shops」が付加され、EL訳では明示化されている。この表現はPLに「dakke hā-ye foruš-e tanaqqolāt-e arzān-qeimat」つまり、「安菓子を売る屋台」というように等価方略を用いて翻訳された。PLにおいて「駄菓子」に相当する「hale-hule」という言葉が存在しているが、ELを経た翻訳のため、上記のように翻訳されている。上述のように、SLからEL、またELからPLへの翻訳方略は両方とも受容化方略である。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、SLの原文中の「駄菓子」と「安菓子を売る屋台」というPLの訳文との間には、若干の意味のずれが生じ、デノテーションとは伝達されたが、コノテーションは伝達されなかった。

筆者によって日本語からペルシア語に直接翻訳された訳文は「rānande ke lebās-e zard bā yaqe-ye banafš be tan dāšt az sālon-e entezār-e tabaqe-ye dovvom ke dar ān maqāze-hā hale-hule čīde budand payīn mīāyad」、すなわち「紫の襟の黄色い服を着た運転手はお店が駄菓子を並べた待合所の2階から下りてくる」となっている。「駄菓子」は栄養価のない食べ物、特にスナックに対して使用される「hale-hule」という語に訳されており、このペルシア語は駄菓子に対して等価な語彙だと思われる。したがってこの直訳文で

は、文字通りの意味とともに、そのニュアンスも伝達されたと思われる。

(7) [SL] そして、提燈をひどく振ったことに気づいて。(川端、106)

[EL] Ah!" The lantern was shaking wildly in his hand. (61)

[PL] āh, fānus dar dast-aš be šeddat mīlarzīd.(61)
INTRJ カンテラ PREP 手.PRON.SUF.3SG 激しく.ADV 震える.IND.IMPF.3SG

➤ ああ、カンテラは彼の手に激しく震えていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

u motevajjeh šod ke fanus-e kaqazī rā be šeddat tekān dāde ast.
彼/彼女 気づく.IND.PAST.3SG REL.PRON 紙のカンテラ POSTP.を ひどく 振る.IND.IMPF.3SG

➤ 彼が提灯をひどく振ったことに気付いた。

SLにおける「そして、提燈をひどく振ったことに気づいて」というSLの例文全体は、転移方略、翻案方略、そして付加方略を用いてELに訳されている。「提燈」というSL圏で使用される用具の翻訳には、ELでは「lantern」と翻案の方略がとられている。そのELにおける「lantern」は「fānus」とPLに等価されている。「fānus」というのはPL圏において様々な意味で使用されるが、この場合は、昔使われていた進路を明るくするために、風邪に吹き消されないようにガラスまたは結晶の覆いをかぶせた金属のランプのようなものを意味する。上記の分析結果が示すように、「提燈」という異文化要素の翻訳に際して、SLからELへの翻訳また、ELからPLへの翻訳の両方ともに受容化方略が使用された。その結果、SLにおける「提燈」という表現はPLでは「カンテラ」という表現となり、デノテーションは伝達されたが、コノテーションは伝え損ねたと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された文は「u motevajjeh šod ke fānus-e kāqazī* rā be šeddat tekān dāde ast」、つまり「彼が提灯をひどく振ったことに気付いた」となっている。また、それに脚注を加え「ちょうちん」という言葉を記載する。なぜなら、最近特に中国輸入品が多くなり、提灯というものはイランにおいても見られるようになり、「fānus-

e kāqazī (紙のカンテラ)」として知られているからであり、その日本語の名称を紹介するため、脚注に記載する。このように直接訳のPL文においては、デノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(8) [SL] もぐり込むのも面倒臭そうに掛蒲団の上へ長くなって足をどてらの裾にすっこめ肱枕をする。(川端、106)

[EL] It was too much trouble to burrow under the covers. Stretching himself out on top of the quilt, he would draw his feet up inside the skirt of his padded kimono and rest his head on his elbow. (61)

[PL] zīr-e lahāf raftan barā-yaš xeilī zahmat dāšt.
下.EZ 掛蒲団 行く.INF のため.PRON.SUF.3SG とても 面倒 持つ.IND.PAST.3SG

ruye lahāf kāmelan derāz mīkešīd va pā-hā-yaš
上.EZ 掛蒲団 完全に.ADV 横になる.IND.IMPF.3SG CONJ 脚.PL.PRON.SUF.3SG

rā bālā mībord va az zīr dāxel-e kimono-ye
POSTP.を 上げる.IND.IMPF.3SG CONJ PREP 下 中.EZ 着物.EZ

āstardār-aš mīkard va sar-aš rā
裏地付.PRON.SUF.3SG する.IND.IMPF.3SG CONJ 頭.PRON.SUF.3SG POSTP.を

ham ruye dast-aš mīgozāst. (61)
も 上.EZ 腕.PRON.SUF.3SG 置く.IND.IMPF.3SG

➤ 掛け蒲団の下にもぐるのは彼にはとても面倒くさかった。掛け蒲団の上に完全に横になって、脚を上げて、裏地が付いた着物のなかに入れていて、(彼の) 頭も手の上に置いていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

engār ke zīr-e lahāf raftan barā-yaš zahmat dašte bāšad,
まるで REL.PRON の下.EZ 掛布団 行くこと のため. PRON.SUF.3SG 面倒 持つ.IND.SUBJ.3SG

ruye lahāf derāz mīkešad va pā-ha-yaš rā az zīr

の上.EZ 掛布団 横になる.IND.PRES.3SG CONJ 脚.PL.PRON.SUF3SG POSTP.を PREP 下

dāxel-e sejāf-e doterā*-yaš mīkonad va dast-hā-yaš
の中.EZ 裾.EZ どてら.PRON.SUF3SG する.IND.PRES.3SG CONJ 腕.PL.PRON.SUF3SG

rā zīr-e sar-aš mīgozārad.
POSTP.を の下.EZ 頭.PRON.SUF.3SG 置く.IND.PRES.3SG

- 掛布団の下に潜り込むのは面倒臭そうに、掛布団の上に横になって、その脚を下からどてらの裾の中に入れて彼の腕を頭の下に置く。

SLにおける「掛蒲団」や「どてら」という文化要素は、ELにそれぞれ、「quilt」と「padded kimono」と翻訳されている。前者は翻案方略、後者は等価方略を用いたものであり、またどちらの場合にも受容化方略がとられている。PLでは「quilt」は「lahāf（掛け蒲団）」に相当する。「padded kimono」の翻訳では、「kimono」はそのまま借用されて「kimono」と記され、「padded」は「裏地がついた」のように等価方略で翻訳された結果、「kimono-ye āstardār（裏地が付いた着物）」との表現となった。SLにおける「どてら」という文化要素に相当する言葉はELにもPLにも存在しないため、説明された翻訳となっている。どてらとは丹前と同じようなものであり、厚く綿を入れた広袖の着物であり、冬に使用され、寝具としても使用される場合がある。外国では、どてらは着物の一種として知られている。しかしPL訳文の「裏地が付いた着物」は全く「どてら」のイメージとはかけ離れていると思われる。SLからELへの翻訳方略は受容化方略であり、ELからPLの翻訳は異質化および受容化方略が使用された。これらの方略が相乗的な影響をおよぼした結果、SLの原文とPLの訳文との間には、若干の意味のずれが生じ、デノテーションはある程度伝達されたが、コノテーションは伝達されなかったと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された文は、SLにおける「どてらの裾」は「sejāf-e doterā」、つまり「どてらの裾」となり、脚注に「どてら」について「冬に使用される厚く綿を入れた広袖の着物のことである」との説明がPLで記載された。こうした並記により、読者は最初にどてらという着るものの名称に遭遇し、日本の服の一種であるということが分かる。しかし、実際にはどのようなものか分からないため、詳細は脚注で知るようになる。上述の通り、この直訳文では文字通りの意味とともにその

ニュアンスも伝達されたと思われる。

5. 4. 3. 社会文化、仕事と余暇 (Social culture - work and leisure)

居酒屋、カラオケ、パチンコ、相撲、囲碁、将棋、花札や 百人一首など

- (9) [SL] うどん屋のおじさんはもうのれんを入れるところでとても迷惑そうだったが、どうぞ、といやいや言ってくれたので、歩き疲れてとにかくすわりたかった私は、中に入った。(吉本、18)

[EL] The owner was just about to close up and seemed extremely annoyed to see me, but he grudgingly told me to come in, so I did. I was worn out from walking, and dying to sit down. (11,12)

[PL] sāheb-e maqāze guyā qasd-e ta'tīlī dāšt va
持ち主.EZ お店 のようだ つもり.EZ 閉めること 持つ.IND.PAST.3SG CONJ

dīdan-e man be šeddat āzorde xāter (-aš) kard,
見る.INF.EZ 私 すごく 心を傷つける.IND.PAST.3SG (PRON.SUF.3SG)

valī ba bīmeilī ta'ārof kard ke vāred šavam .
しかし PREP しぶしぶ 招く.IND.PAST.3SG REL.PRON 入る.IND.SUBJ.1SG

vāred šodam. az piāde ravī-e tulānī moddat be šeddat xaste budam
入る.IND.PAST.1SG PREP 散歩.EZ 長時間 すごく 疲れる.IND.PAST.1SG

va āmādegī-e har kārī dāštam tā faqat
CONJ 準備.EZ なんでも 持つ.IND.PAST.1SG REL.PRON だけ

čand lahze benšīnam. (22)
数 秒 座る.IND.SUBJ.1SG

- お店の主人は閉店するつもりで、私を見ると、とても気を悪くしたようだった。しかし、それでもいやいや中へ入るように招いてくれた。中に入った。長時間歩いてとても疲れていて、数秒座るために、何でもやる心づもりがあった。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mard-e udon foruš* ke dīge mīxāst kerkere-ye
男.EZ うどん屋 REL.PRON もう 欲しがる.IND.IMPF.PAST.3SG シャッター.EZ

maqāze-ašo pāyīn bekeše, ba dīdan-e man čehre dar ham kešīd
店.PRON.SUF.3SG おろす.IND.SUBJ.3SG PREP 見る.IND.PAST.3SG 私 顔をしかめる.IND.PAST.3SG

o bā bīmeilī be man goft ”befarmāyīd”. man ke
CONJ(口語) PREP しぶしぶ PREP 私 言う.IND.PAST.3SG どうぞ 私 REL.PRON

az rāh raftan xaste šode budam va faqat
PREP 歩くこと 疲れた.ADJ なる.PAST.PERF.1SG CONJ だけ

mīxāstam jā-yī benšīnam, vāred šodam.
欲しがる.IND.IMPF.PAST.1SG どこか 座る.IND.SUBJ.1SG 入る.IND.PAST.1SG

➤ うどん屋のおじさんはそのお店のシャッターを閉めるところで、私を見ると、顔をしかめて、いやいや私に「どうぞ」と言ってくれた。歩くことに疲れて、どこか座りたかった私は中に入った。

SLにおける「うどん屋のおじさんはもうのれんを入れるところ (...)」はELに「The owner was just about to close up」のように等価、省略および翻案の三種の方略を使用して翻訳されている。まず、「うどん屋のおじさん」は「the owner」と訳されている。「うどん屋」は前の文で、すでに訳注をつけ説明されているので、ここではその説明は省略され、「おじさん」の翻訳には「owner」と調整方略がとられている。「のれんを入れる」という部分に関しては、EL文化圏に「のれん」という事物が存在しないため、「close up」と翻案方略で翻訳されている。続いて、そのELの表現をPLに翻訳するに際しては、「sāheb-e maqāze guya qasd-e ta'tilī dāšt、(お店の主人は閉店するつもりで (...)）」のように、転移および付加方略がとられている。ELにおける「close up」という表現は転移方略を用いて、「qasd-e ta'tilī dāšt」すなわち「閉鎖するつもり...」とPLに訳された。PLにおいては、公文書以外の文書では「持ち主」という語についてはその所有物を明示する慣習がある。そのため、PLのこの部分においては「店の持ち主」という付加方略を用いた表現がなされている。以上の結果、異文化要素の翻訳において、SLからELおよび

EL から PL への翻訳に際して受容化方略がとられている。両文化圏における差異に起因して、「うどん屋のおじさんはもうのれんを入れるところ...」という SL の原文は PL には「お店の主人は閉店するつもりで...」と訳され、「うどん屋」に対する文字通りの意味また、含意は省略されたため、伝達されておらず、読者に与える印象が異なると思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された文は「*mard-e udon foruš*」、つまり「うどん屋のおじさん」となり、脚注をつけ、以下のように、「うどんとは小麦粉を塩水で練り薄く延ばし、細長く切ったものをゆでた麺類の料理の一種である」という説明をつける。最近のイランでは、日本料理または中華料理として流行している麺類は EL 圏の「*noodle*」を使用し、外来語として「*nudel*」と呼ばれるようになってきた。しかし、ここでは日本語からの翻訳であることを考慮して、原文どおりの食品名を紹介した方が好ましいと思われる。上述の通り、直接翻訳によって「うどん屋のおじさん」に対する文字通りの意味また含意はともに伝達されたと思われる。

(10) [SL] 可愛らしい五色の提燈の灯の一団が寂しい田舎の 稲荷祭り のように揺れて

いたからである。(川端、21)

[EL] a bobbing cluster of beautiful varicolored lanterns, such as one might see at a festival in a remote country village.(12)

[PL] čandin fānus-e rangārang-e zībā dāšt tekān tekān mīxord,
いくつかの カンテラ.EZ 色とりどの.EZ 綺麗 ふらふらする. IND.IMPF.3SG

sahne-i ke dar jašn-i dar rustāy-i
風景.iSUF REL.PRON PREP お祭り.iSUF PREP 村.iSUF

dur-oftāde mītavān dīd.(23)
離れた.ADJ 見られる.IND.PRES

➤ 美しい色とりどりのカンテラがゆらゆらとしていた。遠く離れた村の お祭り で見られるような光景。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

yek daste fānus-e kāqazī-e panj-rang-e qašang mānande fānus-hā-ye jašn-e
一 団 カンテラ.EZ 紙の.EZ 五色の.EZ かわいい のよう.EZ カンテラ.PL.EZ 祭り.EZ

inārī* dar yek rustā-ye xalvat dar hāl-e tekān xordan budand.
稲荷(祭り) PREP 一 田舎.EZ さびしい の様子.EZ 揺れること.INF COP.IND.PAST.3PL

➤ 可愛い五色の提灯の一団がさびしい田舎の稲荷祭りのように揺れていた。

SLにおける「稲荷祭り」という表現は省略的な等価方略を用いて、「festival」とELに翻訳されている。「稲荷祭り」とは各地の稲荷神で行う祭りのことであり、ELにおける対訳が存在せず、また英語圏では知られていないので、そのまま省略され、「お祭り」という一般化された形で、翻訳されている。このELの表現は等価方略を使用して「jašn(お祭り)」とPLに翻訳された。上記のように、SLからELへの翻訳およびELからPLへの翻訳における方略はともに受容化であった。こうした方略の結果PLの表現は、SLの文字通りの意味を伝えようとしているが、祭りの名前など微妙な言外の意味までは伝えきれていないと考えられる。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「yek daste fānus-e kāqazī-e panj-rang-e qašang mānande fānus-hā-ye jašn-e inārī dar yek rustā-ye xalvat dar hāl-e tekān xordan budand」すなわち「可愛い五色の提灯の一団がさびしい田舎の稲荷祭りのように揺れていた」となり、脚注において「稲荷祭り」と記載したうえ、それに関する説明を以下のように紹介する。「稲荷祭りは主に京都の伏見稲荷などから勧請された各地の稲荷神で行う祭りのことである」。ここでは、たんなる「祭り」ではなく「稲荷祭り」という言葉を使用したことに、著者である川端のなんらかの意図がこめられていると思われる、そのまま「稲荷祭り」という語を使用した。上記の分析が示すように、直訳により得られたPL文では、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されたと考えられる。

5. 4. 4. 組織、風習、活動、手順、概念 (Organisations, customs, activities, procedures, concepts)

歴史や国際的な言葉も含まれる。平安時代など

- (ア) 政治・行政 (Political and administrative) 農林水産省、復興庁
- (イ) 宗教 (Religious) 神道、神社など
- (ウ) 芸術 (Artistic) 生け花、折り紙など

(11) [SL] 山寺の和尚と碁を打っていた。(川端、102)

[EL] He was playing go with the priest of the mountain temple. (58)

[PL] bā kešīš-e ma'bad-e kuhestānī go bāzī mīkard. (57)
 CONJ 和尚.EZ 寺.EZ 山の.ADJ 碁 遊ぶ.IND.IMPF.3SG

➤ 山のお寺の和尚と碁をやっていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

bā kešīš-e ma'bad-e kuhestānī go bāzī mīkard. (57)
 CONJ 和尚.EZ 寺.EZ 山の.ADJ 碁 遊ぶ.IND.IMPF.3SG

➤ 山のお寺の和尚と碁をやっていた。

「山寺の和尚と碁を打っていた」というSLから翻訳されたELである「He was playing go with the priest of the mountain temple」においては、SLの「碁を打っていた」という表現の翻訳には「playing go」という借用ならびに等価方略が用いられている。このELは、PLに「bā kešīš-e ma'bad-e kuhestānī go bāzī mīkard. (山のお寺の和尚と碁をやっていた)」と翻訳されており、ここでは借用およびほぼ等価方略がとられている。このように、本例における異文化要素の翻訳の際、SLからEL、またELからPLへの翻訳において使用された方略は両方とも受容化および異質化の組み合わせ方略であった。SLにおける「和尚」および「碁」という異文化要素の双方ともELまたPL圏でも知られている概念であるため、「和尚」に対する等価が使用され、「碁」はそのまま借用されて使用されている。このようなプロセスを経て生み出されたPLの訳文は「山のお寺の和尚と碁をやっていた」となり、原文であるSLのデノテーションとともにコノテーションを適切に表していると思われる。

筆者による直接翻訳においても重訳を経たPL訳文と同一な翻訳文となり、重訳と同様にデノテーションの再現に成功し、コノテーションも伝えきれたと思われる。

5. 4. 5. ジェスチャー、習慣 (Gestures and habits)

手を合わせて拝むことや、お葬式の後には塩をまくなどのこと。

(12) [SL] 耳隠しの女が裸で石段を下りて来た。(川端、91)

[EL] A woman whose hair was done in the modern ear-covering style came down the stone stairs, naked. (39)

[PL] zan-i ke mu-hā-yaš rā mod-e ruz
 女.iSUF REL.PRON 髪.PL.PRON.SUF.3SG POSTP.を 現代風

dorost karde bud az pelle -hā-ye sangī
 つくる.IND.PAST.PERF.3SG PREP 階段.PL.EZ 石の.ADJ

pāyīn āmad.(37)
 下りる.IND.PAST.3SG

➤ 髪の毛を近代風にまとめていた女は石の階段を下りて来た。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

zan-e bā model-e mu-ye mīmīkākušī* loxt az
 女の.EZ PREP スタイル.EZ 髪.EZ 耳隠し 裸.ADV PREP の.ADJ

pelle -hā-ye sangī pāyīn āmad.
 階段.PL.EZ 石の.ADJ 下りる.IND.PAST.3SG

➤ 耳隠しの髪型の女は裸で石の階段を下りて来た。

SLの「耳隠しの女(...)」はELでは「A woman whose hair was done in the modern ear-covering style (...)」と、語義借用ならびに付加方略を用いて訳されている。すなわち、「耳隠し」はEL文化圏では知られていないヘア・スタイルなので、語義借用方略で「ear-covering style」と翻訳され、説明がついて受容化されている。そしてELにおけるこの表現は、PLでは「zan-i ke mu-hā-yaš rā mod-e ruz dorost karde bud (...)」すなわち、「髪

- そして不思議なことに女の人の夫もその側に死んでいた。

SLにおける「彼女の夫も枕を並べて死んでいた」という表現は、付加的な等価方略を用いてELに「the woman's husband lay down beside them and died, too」と訳されている。この部分のELからPLへの翻訳には、「šohar-e zan nīz kenār-ešan derāz kešīd va mord (女の人の夫もその側に横になって死んだ)」のように等価方略がとられている。「枕を並べる」という日本語の表現は多くの人が同じところで同じことをする、または同じ場所で倒れる、同じ場所で並んで寝るという意味である。SLからELへの翻訳と同様にELからPLの翻訳にも受容化方略が使用された。ELおよびPLにおいては、SLにおける「枕を並べて」に相当する表現は存在しないが、その含意を捉えて等価な表現に翻訳されている。こうした方略を用いて翻訳された「女の人の夫もその側に横になって死んだ」というPLの文は、「横になる」という表現を付加し、SLの文字通りの意味とともに言外の意味を伝えたとと思われる。

筆者による直接翻訳されたPL文は「va be tarz-e ajībī šohar-e zan nīz dar kenār-e ānhā morde bud」すなわち「そして不思議なことに女の人の夫もその側に死んでいた」となった。この訳文は重訳を経たPL訳文とほぼ同一な翻訳文となり重訳と同様にデノテーションの再現にも成功し、コノテーションも伝えきれたと思われる。

- (14) [SL] もぐり込むのも面倒臭そうに掛蒲団の上へ長くなって足をどてらの裾にすっこめ肱枕をする。(川端、106)

[EL] It was too much trouble to burrow under the covers. Stretching himself out on top of the quilt, he would draw his feet up inside the skirt of his padded kimono and rest his head on his elbow. (61)

[PL] zīr-e lahāf raftan barā-yaš xeilī zahmat dāšt.
 下.EZ 掛蒲団 行く.INF のため.PRON.SUF.3SG とても 面倒 持つ.IND.PAST.3SG

ru-ye lahāf kāmelan derāz mīkešīd va pā-hā-yaš
 上.EZ 掛蒲団 完全に.ADV 横になる.IND.IMPF.3SG CONJ 脚.PL.PRON.SUF.3SG

rā bālā mībord va az zīr dāxel-e kimono-ye
 POSTP.を 上げる.IND.IMPF.3SG CONJ PREP 下 中.EZ 着物.EZ

āstardār-aš mīkard va sar-aš rā
 裏地付.PRON.SUF.3SG する.IND.IMPF.3SG CONJ 頭.PRON.SUF.3SG POSTP.を

ham ru-ye dast-aš mīgozāst. (61)
 も 上.EZ 腕.PRON.SUF.3SG 置く.IND.IMPF.3SG

- 掛け蒲団の下にもぐるのは彼にはとても面倒くさかった。掛け蒲団の上に完全に横になって、脚を上げて、裏地が付いた着物のなかに入れていて、(彼の)頭も手の上に置いていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

engār ke zīr-e lahāf raftan barā-yaš zahmat dašte bāšad,
 まるで REL.PRON の下.EZ 掛布団 行くこと のため. PRON.SUF3SG 面倒 持つ.IND.SUBJ.3SG

ruye lahāf derāz mīkešad va pā-ha-yaš rā az zīr
 の上.EZ 掛布団 横になる.IND.PRES.3SG CONJ 脚.PL.PRON.SUF3SG POSTP.を PREP 下

dāxel-e sejāf-e doterā-yaš mīkonad va dast-hā-yaš
 の中.EZ 裾.EZ どてら. PRON.SUF3SG する.IND.PRES.3SG CONJ 腕.PL.PRON.SUF3SG

rā zīr-e sar-aš mīgozārad.
 POSTP.を の下.EZ 頭.PRON.SUF.3SG 置く.IND.PRES.3SG

- 掛布団の下に潜り込むのは面倒臭そうに、掛布団の上に横になって、その脚を下からどてらの裾の中に入れて彼の腕を頭の下に置く。

SLの「肱枕をする」はELにおいて「rest his head on his elbow」と等価方略を用いて翻訳されている。このELの表現をPLに翻訳する場合には、「sar-aš rā ham ru-ye dast-aš mīgozāst. (その頭も腕の上に置いていた。)」のように等価方略がとられている。SLにおける「肱枕をする」という表現は自分の肘を曲げて枕代わりにして横になることを表す。PL圏にも同じ動作が存在しているが、それを描写する表現が存在しないため、

このように具体的に行動を説明する訳となる。上記のように、SLからELへの翻訳またELからPLへの翻訳における方略は両方とも受容化である。前の例文と同じように、ELならびにPLにおいて「肱枕をする。」という言い方が存在していないため、文字通りの意味が伝達されていないが、言外の意味が伝達された。このように、「その頭も腕の上に置いていた」というPLの文は、SLのデノテーションとともにコノテーションは伝えた。

筆者による直接翻訳されたPL文は「*va dast-hā-yaš rā zīr-e sar-aš mīgozārad*」すなわち「彼の腕を頭の下に置く」となった。この訳文は重訳を経たPL訳文と転移的に異なるが、意味面から見ると同一の意味を表し、重訳と同様にデノテーションとともにコノテーションも伝えられたと思われる。

表 7. 異文化要素において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			D	C	D	C
1	受	受	○	×	○	○
2	受	受	×	×	○	○
3	受	受	○	○	○	○
4	受	受	×	×	○	○
5	受	受	○	×	○	○
6	受	受	○	×	○	○
7	受	受	○	×	○	○
8	受	受+異	○	×	○	○
9	受	受	×	×	○	○
10	受	受	○	×	○	○
11	受+異	受+異	○	○	○	○
12	受	受	×	×	○	○
13	受	受	○	○	○	○
14	受	受	○	○	○	○

まとめ

異文化要素を対象にSLからELへの翻訳、およびELからPLへの翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べた。SLからELへの翻訳またELからPLへの翻訳における方略はいずれも受容化である例文が全14件中、12件である。

SLからELへの翻訳は受容化方略であるのに、ELからPLへの翻訳は異質化および受容化方略であるのは1件[例(8)]である。SLからELへの翻訳、およびELからPLへの翻訳の両方が受容化ならびに異質化方略であるのは1件[例(11)]である。ただし、例(11)の場合、受容化方略および異質化方略と示すが、実際にはこれらの方略は一つの異文化要素に対してではなく、二つの異文化要素のそれぞれに対して使用された受容化方略と異質化方略のことである。したがって、SLからELへの翻訳またELからPLへの翻訳の両方において受容化方略が使用された例文は14件中13件とみなすことができる。

意味伝達に関しては、SLにおけるデノテーションすなわち文字通りの意味とともにコノテーションつまり言外の意味も伝達された例文は5件[例(3), (4), (11), (13), (14)]であり、そのほとんど生態とジェスチャー・習慣に属している。例えば例3および例4に含まれる異文化要素は植物名であるが、これらは日本独特のものではなくELおよびPL圏にも存在するため、対応する訳語が存在する。また、例11に含まれる異文化要素である「和尚」および「碁」は、広く知られている宗教上の役職およびゲームに関する概念であるため、適切に伝達された。これに加えて、例13および14は習慣として日本語において使用される表現のことであり、ELにおける説明が適切になされているため、PLの訳文におけるデノテーションとコノテーションの両方が伝達された。

デノテーションは伝達されたがコノテーションは伝達されなかった例文は6件[例(1), (5), (6), (7), (8), (10)]であり、最も多かった。デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されなかった例文は4件[例(2), (4), (9), (12)]である。このようにコノテーションは伝達されなかった例文は全14件中10であった。その理由は、次のように推定される。異文化要素は文化に関連している記号であるため、SLにおける語彙に対応する訳語がELやPLに存在しない場合が多い。そのため、翻訳のプロセスにおいて省略または一般化されることによって、文字通りの意味とともに含意も意伝達されないという支障が生じるのであろう。また、目標言語において、類似する文化要素が存在する場合には省略を行わずに翻訳されるため、デノテーションはある程度伝達されるが、コノテーションまたはそのニュアンスが伝達されない。

日本語から直接ペルシア語に翻訳した際には、14例すべてにおいて、意味伝達が成功した。上述の通り、目標言語において起点語に相当する言葉が存在しない場合は、

類似する言葉に翻訳することによってニュアンスが伝達されない。そのため、筆者による直接翻訳では、ヴェヌティが取り上げた異質化方略を使用し、起点言語の文化要素を紹介するために、異文化要素をそのまま述べ、その説明を脚注に記載した。こうした手法を取り入れることによって文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されるため、原文のメッセージが伝達されたと考えられる。重訳を経てニュアンスが消えた10例文における異文化要素は、生態、物質的文化および社会文化の要素はほとんどであった。一方、重訳によっても意味伝達がなされた例文における異文化要素は、説明がほぼ可能な表現および三文化圏において共通して存在する要素であった。

上記の分析からわかるように、異文化要素の翻訳においては、起点言語における当該要素が目標言語ならびに文化に存在するか否か、もしくは存在しなくても知られているか否かが翻訳の成否の分かれ目となることが多い。さらに重訳においては、第一目標言語への翻訳と第二目標言語への翻訳のそれぞれの過程における一般化や省略ならびに三文化圏間の相違が相まって、目標言語に存在しない要素に対する等価な翻訳は最も難しいことが上記の分析により明示された。一方、本章に記載した筆者による直接翻訳では、文字通りの意味（すなわちデノテーション）と言外の意味（すなわちコノテーション）が共に適切に伝達された。したがって上記の問題を克服する手段として、本稿では筆者による直接翻訳で用いられた、異質化方略による翻訳に脚注等での説明を加えるという方法を提唱する。

5. 5. 著者特有の表現

本章では、本論文における分類には含まれない川端の特徴がみられる表現の具体例をいくつか提示し、そこで使用されている翻訳方略と重訳の影響とを調べてみる。また、筆者が原文を直接ペルシア語に翻訳したものを重訳によって翻訳された訳文と比較し、分析と考察を試みる。

吉村貞司は掌の小説における解説に以下のように述べている。

掌の小説に対して、一つの優れた俳句が一つの宇宙をもち、長編の詩に匹敵する内容をもっていると言える。それは短いために、無駄を省いて簡潔であり、直接的となる特色を持っており、コント¹¹とは言えない（川端:495）。

¹¹ コントは小説と言えない笑話であるため、小話のたぐいを連想される恐れがある。

また、吉村によると『川端康成選集』第一巻の「あとがき」に、作者は以下のように述べている。

この巻の作品の大半は二十代に書いた。多くの文学者が若い頃に詩を書くが、私は詩の代わりに掌の小説を書いた。無理にこしらえた作もあるけれども、またおのずから流れ出たよい作も少なくない。今日から見ると、この巻を「僕の標本室」とするには不満はあっても、若い日の詩精神はかなり生きていると思う（川端:495）。

掌の小説における内容の豊かさ、心理の複雑さ、人間性にせまる鋭さなど、あらゆる点で、普通の小説におとるものではない。それに、複雑な反射の作り出す目もあやな光のシンフォニーにたとえられる川端康成という作家のあらゆる要素が含まれていると同時に、作者としての喜びも、悲しみも、悩みも、嫌悪も反射する（同書：496）

上述の通り、掌の小説の大半は川端康成が二十代で書いた作品であり、心理の難しさなど川端の特色が見られるものである。こうした理由により、特に日本と異なる文化をもつ外国語に翻訳しにくいこれらの小説が、どのように捉えられ訳されているかは興味深い。

川端に特有の表現について分析を行う前に、ここでは対比を目的として、まず諺の翻訳についての考察を試みる。諺は多くの言語において存在し、それぞれの国の価値および基準などを表す。その形は確定しており、変えられない。諺は常に短く的確であり、隠喩が多用される。また、多くの諺は、ペルシア語の諺のように詩的でもある。諺には古い伝統があるため、固定概念を使用し、国や民族の典型的な慣習や事象に関するものであると考えられる。諺は修辞学また、文学において、重要な役割を果たし、短い哲学的なものだと言われる。様々な言語には共通の意味を持つ諺が存在し、それらの中には語彙的に類似しているものもあれば、語彙は異なっているが同様な含意を有する場合もある。要するに、同じ内容が異なる単語で表現されるのである。諺はそれぞれの国や民族の文化を反映するため、諺を通してその国の国民性等を知ることができる。諺を翻訳する際、目標言語においても同じ意味を持つ諺がある場合は、その諺に置き換えられるが、目標言語に該当する諺が存在しない場合は、どのような表現を用いてそれを翻訳す

るか重要なことだと思われる。また、起点言語の文化などが知られていない場合は、翻訳がさらに困難になる。特に重訳においては、第一目標言語を通して、第二目標言語に翻訳されるため、起点言語に対する知識不足という問題が生じる場合が多い。次に参照のため、諺の翻訳例を挙げる。

(参照例) [SL] 猫に小判 (川端、18)

[EL] Casting pearls before swine. (66)

[PL] gowhar be garden-e xar bastan.(68)

宝石 PREP 首.EZ ロバ 閉める.INF

➤ ロバの首に宝石 (を閉めること)。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

xar če dānad qeimat-e noql o nabāt.

ロバ 何 知る.IND.PRES.3SG 値段 (価値) 飴

➤ ロバには飴の価値知らず。(ロバに飴)

SLにおける「猫に小判」という諺は等価方略を用いて「Casting pearls before swine.」と EL に翻訳されている。この EL 訳は同様に等価方略を使用した結果「gowhar be garden-e xar bastan」すなわち「ロバの首に宝石」と PL に翻訳された。これは豚に真珠ということわざにきわめて類似しているが、一般的に使用される諺、または表現ではない。上記の分析から明らかなように、SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略は両方とも受容化であり、こうして生み出された PL の訳文は原文である SL の表現どおりの文意を適切に表しており、字義上の意味は伝達されてはいないが、言外の意味は伝達されたと思われる。

筆者によって直接 SL から PL に翻訳された訳文は、一般によく知られた諺という形で翻訳されている。PL 圏における諺や表現には詩的なものが多い。上記の例文の場合には受容化翻訳方略を使用し、「猫に小判」を有名な詩人の詩の一部を使用し、同じ場合に通用される「xar če dānad qeimat-e noql o nabāt.」、すなわち、「ロバに飴の価値知らず」に翻訳した。この PL 訳文では、文字通りの意味は伝達されていないが、著者が

伝えようとした言外の意味が伝達されたと考えられる。諺の翻訳においては、デノテーションつまり字義上の意味の伝達よりも、目標言語における該当する諺などの慣用表現を適切に用いることにより、コノテーションすなわち言外の意味の伝達が重視されるべきだと思われる。

本章で採り上げる著者特有の表現の翻訳は、諺よりも困難であると思われる。なぜなら、諺は日常生活において古くから用いられ定着しており、それに類似したものは他言語にも存在する場合が多いため、比較的容易に翻訳できることも多い。一方、著者に特有の表現は諺のように汎用性があるわけではないため、その翻訳には困難が伴う。また、上記の諺の場合と同様に、こうした表現の翻訳においても、字義上の意味よりも著者が意図する言外の意味の伝達を優先させるべき状況も起こり得る。以下に、川端に特有の表現の具体例をいくつか提示し、重訳の影響や翻訳方略の分析ならびに著者による直接翻訳との比較などの考察を試みる。

- (1) [SL] 彼は奈良漬けの瓜のような顔をした散髪屋に顔を剃らせながら、松の木の話を聞いている。 (川端、90)

[EL] As he was being shaved by the barber, who had a face like a pickled cucumber seasoned in sake lees, he asked about the pine tree.

[PL] vaqtī salmānī – ke qiāfe-aš _____ mesl-e xiār-ī
 とき 散髪屋 REL.PRON 顔つき.PRON.SUF.3SG のよう.EZ キュウリ.iSUF

bud _____ ke _____ dar sākī xābānde
 COP.IND.PAST.3SG REL.PRON PREP 酒 寝かせる.PTCPL

bāšand – _____ dāšt eslāh(aš) mīkard, _____ ettelā'āt-i rajē' be
 COP.IND.SUBJ.PRES.3PL 剃る.IND.IMPF.3SG(PRON.SUF.3SG) 情報.iSUF について

deraxt-e kāj az u gereft.
 木.EZ 松 PREP 彼/彼女 取る.IND.PAST.3SG

- 酒漬けのキュウリの顔付きをした散髪屋が彼の顔を剃っているときに、松の木について情報を得た。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

dar hālī ke salmānī ke surat-aš be rang-e sīr-toršī-e
のとき 散髪屋 REL.PRON 顔.PRON.SUF.3SG PREP 色.EZ ニンニク漬け.EZ

kohne* bud surat-e u rā eslāh mīkard be
古い COP.IND.PAST.3SG 顔.EZ 彼/彼女 POSTP.を 剃る.IND.IMPF.3SG PERP

dāstān-e deraxt-e kāj guš mīkard.
話.EZ 木.EZ 松 聞く.IND.IMPF.3SG

- 古いニンニク漬け*の顔付きをした散髪屋が彼の顔を剃っているときに、彼は松の木の話を聞いていた。

脚注：原文においては「奈良漬」、すなわちもともと奈良地方で作られていた主に瓜の野菜を塩水や酒粕に漬けた茶色の食物のこと。

SLの「彼は奈良漬の瓜のような顔をした(...)」はELに「who had a face like a pickled cucumber seasoned in sake lees, (...)」と訳されており、ここでは翻案ならびに省略という方略が取られている。奈良漬の瓜はシロウリ、キュウリ、ナス、ダイコンなどウリ類を主とした野菜を塩で2ヵ月ほど下漬し、同量程度の酒粕に数ヵ月漬ける漬物のことである。奈良地方で発達したので、この名がある。まず、「瓜」に相当する「gourd」という訳語が存在するにもかかわらず、seasoned「cucumber」と訳されている。その理由は、おそらくEL文化圏では「瓜」の漬物よりも「キュウリ」の漬物の方が知られているので、翻案方略がとられ、さらに奈良という言葉が省略されたのであろう。そしてELの「who had a face like a pickled cucumber seasoned in sake lees, (...)」はPLに「qiāfe-aš mesl-e xiār-i bud ke dar sākī xābānde bāšand (...)」つまり、「酒漬のキュウリの顔付きをした(...)」と転移方略ならびに借用に調整方略を用いて訳されている。イランでは普段、漬物をつくるのに、キュウリや野菜などを酒ではなく、酢や塩水に漬ける習慣がある。ここでは、訳者はそのまます酒漬けと異質化方略を取って、説明しているが、「酒」は少し調整された借用で「sākī」に変わっている。このように、SLからELへの訳方略は受容化方略であるのに対して、ELからPLの訳には受容化と異質化方略を合

せた方略が用いられた。両文化圏における差異に起因して、「奈良漬けの瓜のような顔をした」という SL の原文は PL には「酒漬けのキュウリの顔付きをした」と訳され、文字通りの意味とともに内包される意味は伝達されず、読者に与える印象が大きく異なる結果となった。しかし、このような表現の翻訳において、文字通りの翻訳よりも、著者がどういう意図を持って使用したかがより重要であると思われる。面白いことに、日本語を第一言語とする読み手に「奈良漬の瓜の顔、という表現からどのような印象を受けるか？」と尋ねたところ、その6人全てが違う返答をした。ある者は「シャキッとした顔」つまり褒め言葉、ある人は「シワシワの顔」つまり老人のような顔の形容、また違うものは「茶色い顔」つまり暗い人格の現れ、またある者は「しょっぱい顔」つまり悪口であると答えた。この箇所はまさに序文でバルトが述べたような文学におけるコノテーション作用の分かりやすい例で、SL においても意味は決定出来ないのだ。そのため、翻訳で重んじるべきは原語通りの表現ではなく、このように多様な解釈の出来る例への置き換えだ。そのため日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「*dar hālī ke salmānī ke surat-aš be rang-e sīr-toršī-e bud surat-e u rā eslāh mīkard be dāstān-e deraxt-e kāj guš mīkard*」、ようするに「古いニンニク漬け*の顔付きをした散髪屋が彼の顔を剃っているときに、松の木の話聞いていた」とここでは訳した。PL においては酒漬けの瓜が存在していないが、漬物としてはそれに似ている酢や塩水につけた野菜などのキュウリがよく使用される。著者が使用した漬物はまず奈良漬であり、普通の漬物ではないため、瓜の形よりも奈良漬で特別に茶色になった瓜のことを意味したのではないかと思った。PL 圏においてまず漬物で、そして茶色の漬物は酢につけた長くかかったニンニクのことである。このように同様な印象を与えるために、字義通りではなく、漬物である事実およびその色を中心に翻訳した。

そのうえで、原文の食文化を読者に紹介するために、脚注に説明を付加した。その結果、読者に自然でわかりやすい翻訳である上に、原文に忠実である翻訳となったのではないかと思われる。この直接翻訳においては、訳文および脚注の組み合わせでコノテーションとともにデノテーションも伝達されたと思われる。

(2) [SL] 湯がげらげら黄色く笑った。(川端、2)

[EL] The spring snickered yellowly. (40)

[PL] češme yavāšakī labxand zad.(38)

源 こっそり.AD 微笑む.IND.PAST.3SG

➤ 温泉はこっそり微笑んだ。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

češme qahqahe-ye talx-i sar dād.
源 ゲラゲラ笑うこと.EZ 苦い.iSUF 始める.IND.PAST.3SG

➤ 温泉はげらげら苦笑いをした。

SLの「湯がげらげら黄色く笑った。」はELに「The spring snickered yellowly」と訳されており、ここでは省略および等価方略がとられている。まず「湯」は「hot spring」のことであるが、テキスト内に何回も繰り返されているので、省略された形で「spring」と訳され、「げらげら笑う」という擬音語を訳すのに「snicker」という等価方略がとられた。最後に、「黄色く笑った」という表現は、元々フランス語の慣用句であり、「苦笑いをする」、「うまくいっていないことを隠す為に笑う」という意味を持つ。この慣用句は、ELにおいても知られている表現であるので、そのまま

「snickered yellowly」と等価方略が取られて翻訳された。しかし、この慣用句はPL文化圏では使用されないため、省略され、等価方略がとられた。その結果、この部分はPLでは、「češme yavāšakī labxand zad」、すなわち「温泉はこっそり微笑んだ」と訳された。SLからELへの翻訳またELからPLへの翻訳における方略は両方とも受容化である。上記の結果、PLの訳文は「温泉がこっそり微笑んだ」となり、「湯がげらげら黄色く笑った」というデノテーションとコノテーションがともに伝達されず、SLの原文とはかなりかけ離れた意味を持つようになってしまった。

筆者によって日本語からペルシア語に直接翻訳された訳文は「češme qahqahe-ye talx-i sar dād」、すなわち「温泉はげらげら苦笑をした」となっている。この訳文では「げらげら笑う」という擬音語がPLにも存在しているため、これを使用した。「黄色く（笑う）」という表現は文字通りの意味も伝達されたとともに、「苦笑い」を意味する慣用句のニュアンスも伝達されたと思われる。

(3) [SL] 啄木鳥のように頭を下げていさぎよく敬礼する。(川端、112)

[EL] he bowed his head like a woodpecker, graciously, in greeting. (42)

[PL] sar-aš rā mesl-e dārkub, moaddabāne
頭.PRON.SUF.3SG POSTP.を のよう.EZ 啄木鳥 丁寧に.ADV

tekān dad.(40)

振る.IND.PAST.3SG

➤ (彼/彼女は) 頭を啄木鳥のように丁寧に振った。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

mānand-e dārkubī ke sar-aš rā pāyīn mī-āvarad,
のよう.EZ 啄木鳥-iSUF REL PRON 頭.PRON.SUF.3SG POSTP.を 下げる.IND.PRES.3SG

sar-e xod rā be nešāne-ye salām bā-nezākat fōrud āvard.
頭.EZ 自ら POSTP.を PREP しるし.EZ 挨拶 いさぎよく 下げる.IND.PAST.3SG

➤ 頭を下げる啄木鳥のように、自分の頭を挨拶の印としていさぎよく下げた。

SLにおける「啄木鳥」という語は等価方略を用いて「woodpecker」とELに翻訳されている。そのELは等しく等価方略を使用し、「dārkub (啄木鳥)」とPLに翻訳された。三文化圏において同じ鳥が存在しているので、この語については意味の伝達が的確になされている。SLにおける「いさぎよく敬礼する」は等価ならびに転移方略が用いられ、「graciously, in greeting」とELに翻訳された。「いさぎよく」というのは「卑怯な点や未練がましいところがなく立派である」という意味であり、「敬礼する」と言うのは「敬意を表して礼をする」ことである。このSL表現はELでは「to give a salute in a good grace」と翻訳できると思われる。Greetingは広義に解釈すれば「敬礼する」という意も含まれ、「graciously」とは「丁寧に優雅な方法で」という意を有するため、EL訳はSLの意味の再現に成功していると言えるだろう。このELの表現は省略的な等価を用いて、PLに翻訳された。「graciously」は「moaddabāne (丁寧に)」と翻訳されているが、「in greeting」は省略されている。上述のとおりSLからEL、またELからPLへの翻訳方略はともに受容化方略である。その結果、SLにおける「啄木鳥のように頭

を下げていさぎよく敬礼する」という原文は「彼/彼女は頭を啄木鳥のように丁寧に振った」という PL 訳文になった。頭を動かして木をつつく啄木鳥は広く知られた鳥であり、頭を下げるお辞儀が一般的な挨拶である。SL 圏においては、イメージしやすい情景と言えるが、その一方、EL および PL の文化圏においては、頭を動かす挨拶はあまり存在しない。また、上記の PL 訳文は、SL においては啄木鳥に対して丁寧なイメージが存在しているような誤解を招く。それにもかかわらず、SL の表現がそのまま EL および PL に翻訳された。その結果、文字通りの意味の伝達も的確にされていないと思われ、著者の意図が理解されていないため、含意も伝わっておらず、読者に与える印象が大きく異なる結果となったと考えられる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された文は「mānand-e dārkubī ke sar-aš rā pāyīn mī-āvarad, sar-e xod rā be nešāne-ye salām bā-nezākat forud āvard」、つまり「頭を下げる啄木鳥のように、自分の頭を挨拶の印としていさぎよく下げた」となっている。ここでは、筆者は SL 圏において頭を下げて敬礼する という一般的な挨拶の仕方を知っているため、読者が最も理解できるような翻訳を試みた。その結果、デノテーションとともにコノテーションも的確に伝達されたのではないかと思われる。

(4) [SL] 安藤さんはライラックより蒼ざめた。(川端、235)

[EL] Ando had turned pale than the lilacs. (105)

[PL] rang-e ru-ye āndo parīde tar az rang-e
色 顔.EZ 安藤 青ざめた.COMP PREP 色.EZ

gol-hā-ye yās šode bud. (108)
花.PL.EZ ライラック になる. IND.PAST.PERF.3SG

➤ 安藤は顔色がライラックの色よりも青ざめていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

rang-e ru-ye āqāye āndo az gač ham sefid-tar šod.
色.EZ 顔.EZ さん.EZ 安藤 PREP 漆喰.EZ も 白い.COMP になる.IND.PAST.3SG

➤ 安藤さんは顔色が漆喰よりも白くなった（青ざめた）。

SLにおける「安藤さんはライラックより蒼ざめた」という表現は等価方略を用いて「Ando had turned pale than the lilacs」とELに翻訳されている。このEL訳は同様に等価方略を使用した結果「rang-e ru-ye āndo parīde tar az rang-e gol-hā-ye yās šode bud」すなわち「安藤は顔色がライラックの色よりも青ざめていた」とPLに翻訳された。ELにおいて「Pale lilac」という色が存在しており、淡紫色を示しているが、「lilac」の色自体には「turning pale」という含意はないと思われる。

「蒼ざめる」という日本語は「青くなる」、「体の衰弱や恐怖などのために血の気がなくなり、青白くなる」という意味である。しかし、この原文において、顔が「青くなる」、または「青白くなる」のはどうしてライラックに例えられたのか。ライラックは色の特徴が沈静色、重量色といった効果があるが、中間的な色または中性色なので、周辺の色によってイメージ効果は左右されると言われる。その紫の色は赤紫から青紫まで幅広い色域と認識され、青と赤が混ざり合い、多様な色合いが生み出される。静の青および動の赤という相反する色が共存しているため、「高貴と下品」「神秘と不安」など二面性をもっている。しかし、場面によって色の性格が変わる場合もあるため、複雑な色と言われる。ライラックの花言葉は楽しい青春、恋の始まり、初恋の思い出または絆を意味しているようである。またその色に応じて花言葉が異なり、紫のライラックは恋の始まり、初恋の感激、白のライラックは楽しい青春、純粹、若かりし日の思い出、ピンクのライラックは初恋の思い出という意味がある。

「恋の始まり、初恋の思い出」などという花言葉の由来はトルストイの、ライラックにまつわる恋物語、また、葉っぱがハート形であるためである。しかし、川端がライラックの花言葉、または色の意味などのどちらかを考えて、「ライラックより蒼ざめた」という表現を使用したのか、不明である。上述のとおりSLからEL、またELからPLへの翻訳方略はともに受容化方略である。PLに翻訳された訳文はSLにおける文字通りの意味が伝達されてはいるが、表現のニュアンス、すなわち言外の意味伝達がないと思われる。

その一方筆者によって直接SLからPLに翻訳された場合は、そのPL訳文は「rang-e ru-ye āqāye āndo az gač ham sefid-tar šod」、すなわち「安藤さんは顔色が漆喰よりも白くなった（青ざめた）」と表現される。原文の文脈を考慮すると、ここで用いられているライラックという表現の選択においては、初恋など花言葉はかかわっていないと思わ

れる。紫は赤と青色の混じり合いからできている色であり、赤や青の濃さ、または薄さによって紫の濃さも異なってくる。ライラックは明るい紫色の花が多く青に近いため、「蒼ざめる」という表現に使用されたと思われる。

PL 圏においてライラックに 関して蒼ざめるというイメージが存在しないため、この表現は文字通りにペルシア語に翻訳されれば、意味が通じないと思われる。

SL における「蒼ざめる」は PL では「rang parīdan (色が飛ぶ)」となる。人間の顔色に関する表現も存在しているが、青くなる、または青白くなるのではなく、黄色くなると言われる。PL 圏の国民はもともと肌が白いため、青になると、「痣ができた」という意味になる。ペルシア語では「漆喰のように白くなる」という表現が「蒼ざめた」という意味で使用される。すなわち、この表現は健康的なピンクがかった頬の(顔)色から漆喰のような真っ白な(顔)色へと変化することを示している。このように、SL から直接 PL に翻訳された訳文においては、参照例に挙げた諺「猫に小判」の翻訳と同様に、「ライラック」という SL で用いられた語にこだわらずに、PL 圏の読者にイメージしやすい「漆喰」という語を選択した。これにより、字義通りの意味とともに、表現の言外の意味、言い換えれば著者の意図も適切に伝えられたと言えるよう。

(5) [SL] 浅田さんは額に安藤さんの視線の痛さを感じた。(川端、235-236)

[EL] Asada felt Ando's gaze burning in to his forehead. (105)

[PL] negāh-e āndo hamčon neize-i pīšānī-aš
視線.EZ 安藤 このように 槍.iSUF 額.PRON.SUF.3SG

rā šekāft.(108)
POSTP.を 裂ける. IND.PAST.3SG

➤ 安藤さんの視線はまるで槍のようにその額に突き刺した。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

tīr-e negāh-e āqāye āndo pīšānī-e āqāye āsādā rā be dard āvard.
矢.EZ 視線.EZ さん.EZ 安藤 額.EZ さん 浅田 POSTP.を 痛みを与える.IND.PAST.3SG

➤ 安藤さんの視線は槍のように浅田さんの額を痛めた。

SLにおける「浅田さんは額に安藤さんの視線の痛さを感じた。」という表現は等価方略を用いて、「Asada felt Ando's gaze burning in to his forehead.」と EL に翻訳されている。EL 訳文においてはまず、「浅田さん」および「安藤さん」の「さん」という呼称が省かれている。また、「額に～の視線の痛さを感じる」という表現は「feeling ~ gaze burning to his forehead」となった。このような表現は PL には存在していないが、上記の訳し方によって意味が通じると思われる。この EL 表現は付加的な等価方略を用いて「negāh-e āndo hamčon neyze-i pišānī-aš rā šekāft」すなわち「安藤さんの視線はまるで槍のようにその額に突き刺した」と PL に翻訳されている。EL と同様に、PL にもこのような表現が存在していないが、視線は槍に例えられ、「burning」は「突き刺す」と翻訳された。「額」はそのまま残っている。

SL において、「視線が痛い」という表現が存在している。それは人からキツイ目つきで睨まれるような感じ、またはバカにしたあきれたような目で見つめられることなどを示す。またその視線は心に刺さる、とげのある、刺すような目つきで見られるという意味もある。ペルシア語には「sangīnī e negāh rā hes kardan」、すなわち、「視線の重さを感じる（誰かに見られる）」という表現が存在するが、悪意のある目つきの場合はほとんど視線が槍に例えられ、額ではなく、心に突き刺すような表現が存在する。EL を通じた SL からの PL 翻訳は、「安藤さんの視線はまるで槍のようにその額に突き刺した。」となり、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はともに受容化であった。SL における表現の文字通りの意味は伝達され、表現の言外に関しても、重要な意味伝達がなされたと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文は「tīr-e negāh-e āqāye āndo pišānī-e āqāye āsādā rā be dard āvard」すなわち「安藤さんの視線は槍のように浅田さんの額を痛めた」となり、字義通りの意味にも配慮して翻訳することにより原文のデノテーションの再現にも成功し、コノテーションも伝えきれたと思われる。

(6) [SL] 庭のつつじは悪魔の血のように腐っていた。(川端、236)

[EL] The azaleas in the garden were dark with decay, like a demon's blood. (104)

[PL] āzāle-hā-ye darun-e bāqče siāh o xošk šode va

つつじ.PL.EZ の中.EZ 庭 黒い CONJ 枯れた になる.PTCPLE CONJ

be rang-e xun-e dīv dar āmade budand.(108)
PREP 色.EZ 血.EZ 悪魔 変わる.IND.PAST.PERF.3PL

➤ 庭のつつじは黒く枯れて、悪魔の血の色に変わっていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

āzāle-ha-ye bāqče mesl-e lajan gyandīde budand.
つつじ.PL.EZ 庭 のよう.EZ 黒泥 腐る.IND.PAST.PERF.3PL

➤ 庭のつつじは黒泥のように腐っていた。

SLにおける「庭のつつじは悪魔の血のように腐っていた」は付加的な等価方略を用いて「The azaleas in the garden were dark with decay, like a demon's blood」とELに翻訳された。「腐る」は「were dark with decay」と翻訳された。その理由は、原文においては、「腐る」は「悪魔の血」に例えられているためと考えられる。このように、悪魔の血また腐るという表現においては「dark」というイメージが生じる。このELの表現は付加的等価方略を用いて「āzāle-hā-ye darun-e bāqče siāh o xošk šode va be rang-e xun-e dīv dar āmade budand」すなわち「庭のつつじは黒く枯れて、悪魔の血の色に変わっていた」とPLに翻訳されている。花や木などに対しては、「根が腐る」という言い方が存在しているが、花や木自体には「腐る」という動詞よりも、枯れるという動詞を用いるのは一般的だと思われる。このように、ELに対する「were bad with decay」は「siāh o xošk šode (黒く枯れて)」というPL訳文となっており、色彩的な印象が強い。「悪魔の血のように」という表現はSLおよびELと同様にPL訳文においても使用されている。しかし川端がつつじに対して「枯れる」ではなく「腐る」という動詞を使用し、それを悪魔の血に例えた意図がその色または形状のいずれに由来するのかわ不明である。

上記の分析が示すようにSLからELへの翻訳と等しくELからPLへの翻訳においても受容化方略が使用されている。このように、SLの「庭のつつじは悪魔の血のように腐っていた」という文は「庭のつつじは黒く枯れて、悪魔の血の色に変わっていた」というPLの訳文となっており、文字通りの意味はほぼ伝達されているが、その含意(コ

ノテーション) までは伝えきれていないと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された場合は、「āzāle-ha-ye bāqče mesl-e lajan gyandīde budand」すなわち「庭のつつじは黒泥のように腐っていた」と表現された。まず、「腐る」および「枯れる」という動詞の意味やニュアンスがそれぞれ異なるため、「腐る」に対して「枯れる」という動詞を使用するのは正しくないとの配慮から、「腐る」そのものを使用した方がいいと考えた。また、「悪魔の血のように腐る」という表現は PL 圏において想像がつかない状況であると思われるため、花や木など植物類に近い概念であり、腐るというイメージも含まれる言葉を探索した結果、適切な訳として「黒泥」を選択した。この PL 訳文では文字通りの意味とともに表現のニュアンスが伝達されたと思われる。

(7) [SL] (...)首筋をぐっと青く剃り上げているので、彼女はうしろにも冷笑する眼を持っていることになるのだった。(川端、233)

[EL] (...) exposed her blue, shaven nape, so that even from the back she seemed to be regarding him derisively. (102)

[PL] pošt-e gardan-e nīlī va tarāšīde-aš namāyān
 後ろ.EZ 首.EZ 藍色 CONJ 彫刻した.PRON.SUF.3SG 目に見える

bud, torī ke hattā az pošt-e sar ham
 COP.IND.PAST.3SG のように REL.PRON できえ PREP 後ろ.EZ 頭 も

be nazar mī-resīd bā ta'ne be u negāh mīkonad.(106)
 見える.IND.PAST.PROG.3SG PREP 皮肉 PREP 彼/彼女 見る.IND.PRES.3SG

➤ 彼女の彫刻のような美しい藍色の首筋が見えていた。頭の後ろからも、皮肉っぽく彼を見ているように見えていた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

pošt-e gardan-aš rā torī tarāšīde bud
 後ろ .EZ 首.PRON.SUF.3SG POSTP.を のように 剃る.IND.PAST.PERF.3SG

ke rang-e ābī gerefte bud, engār pošt-e sar-aš

REL.PRON 色.EZ 青 受ける.IND.PAST.PERF.3SG まるで 後ろ.EZ 頭.PRON.SUF.3SG

ham češmānī barāye tamasxor dāšt.
も 目.PL.iSUF のため 嘲って 持つ.IND.3SG

- その首筋が青色になるほど剃っていたので、まるで頭の後ろにも人を冷笑する眼があるようだ。

SL における「(...) 首筋をぐっと青く剃り上げているので、彼女がうしろにも冷笑する眼を持っていることになるのだった」という表現は省略的な転移方略を用いて「(...) exposed her blue, shaven nape, so that even from the back she seemed to be regarding him derisively」と EL に翻訳されている。「首筋をぐっと剃りあげている(...)」は「exposed her blue shaven nape」となっており、「blue shaven」は「clean-shave」または、「close-shaven」、すなわち「ぐっと青く剃り上げた」という意味であり、適切な翻訳だと思われる。「blue shaven」は EL において「green shaven」とも呼ばれる。「彼女がうしろにも冷笑する眼を持っている」は「even from the back she seemed to be regarding him derisively」と翻訳された。文の前半では、「首筋をぐっと剃り上げる」という表現がある。アップスタイルという髪型にする場合は、うなじの無駄毛が気になる人がいるため剃り上げる。特に昔は M 字型または W 字型のスタイルで剃るのが一般的だった。その結果、うなじの無駄毛、または濃い毛が二つの丸の形でうなじに密集している場合が多く、剃り上げると、剃り跡が青になってしまう傾向があり、目のように見える場合もあると思われる。そのため、EL 訳文において目を使用した方がいいのではないかと思われ、「It looks like as she has derisive eyes even in the back of her head」といった訳が好ましいのではないか。

前者の EL の表現は等価方略を使用して「pošt-e gardan-e nīlī va tarāšīde-aš namāyān bud, torī ke hattā az pošt-e sar ham be nazar mī-resīd bā ta'ne be u negāh mīkonad」すなわち「彼女の彫刻のような藍色の首筋が見えていた。頭の後ろからも、皮肉っぽく彼を見ているように見えていた」と PL に翻訳されている。EL 訳文の「blue shaven nape」は「pošt-e gardan-e nīlī va tarāšīde-aš (彫刻のような藍色の首筋)」という PL 訳文となっている。「tarāšīde」は「tarāšīdan」という動詞の過去分詞である。PL における「tarāšīdan」には様々な意味が存在している。最も使用頻度が高いのは「剃る」という意味であり、「(tarāšīdan-e mu) 髪を剃る」などといわれる。次は、「かんなをかける (木材にかんなをかける、tarāšīdan-e čub)」、または「鉛筆を削る、tarāšīdan-e medād」の場合に用いられる。次に、「刻む」

ことで作るという意味であり、「彫像、彫刻や宝石等を刻む、tarāšīdan-e tandīs, mojassame, javāher」の場合に使用される。最後に「偽造する」、「悪用のためにつくる」との意味で使用され、その例として、「言い訳をつくる、bahāne tarāšīdan」、「正当化する、dalīl tarāšīdan」、「申立人を出す modda'ī tarāšīdan」、「sar-xar tarāšīdan、厄介者または困り者を出す」という表現が挙げられる。しかし、上記の訳文においては、最も多用される「剃る」のかわりに「彫像、彫刻や宝石等を刻む」という表現が使用された。それは宝石や彫像の場合に使用され、比喩的に女性の体や体のある部分が美しいと表現する場合も用いられる。PL 圏において、女性が首筋かうなじを剃ることは全く想像できない行為であるため、EL を経た翻訳であることと、SL の文化に対する知識不足とが重なって、誤って女性の美しい面という意味に捉えられたと思われる。その結果、「blue shaven nape」における「blue」は「nīlī」と、紺碧の意味もあれば、淡青色、空色または藍色という美的な意味のある「青」に翻訳された。

このように、文の前半と後半の意味にも一貫性が見られないことになり、SL における「(...) 首筋をぐっと青く剃り上げているので、彼女はうしろにも冷笑する眼を持っていることになるのだった」は「彼女の彫刻のような藍色の首筋が見えていた。頭の後ろからも、皮肉っぽく彼を見ているように見えていた」と PL に翻訳され、デノテーションとともにコノテーションも伝達されなかったと思われる。

直接日本語からペルシア語に翻訳された PL 訳文は「その首筋が青色になるほど剃っていたので、まるで頭の後ろにも人を冷笑する眼があるようだ」となり、デノテーションとともにコノテーションも伝達されたと思われる。

(8) [SL] 十七歳の花嫁は蒼ざめ、瞼を閉じて濡れた旗のように倒れかかった。
(川端、245)

[EL] The face of my seventeen year-old bride went ashen. She closed her eyes and began to droop like a wet flag.(109)

[PL] rang az roxsār-e 'arus-e hefdah sāle-am pāird.
色 PREP 顔.EZ 花嫁.EZ 17才.PRON.SUF.1SG 飛ぶ.IND.PAST.3SG

češmān-aš rā bast va
目.PL-PRON.SUF.3SG POSTP.を 閉じる.IND.PAST.3SG CONJ

mesl-e	parčam-e	xīs-i	quz kard.(117)
のよう.EZ	旗.EZ	濡れた.iSUF	身をかがめる.IND.PAST.3SG

➤ 十七歳の花嫁の顔色が青ざめた。その目を閉じて、濡れた旗のように身をかがめた。

筆者による直接翻訳 ([SL]→[PL])

rang	az	ruye	‘arus-e	hefdah sāle-am	parīd	va	nazdīk
色	PREP	顔.EZ	花嫁	17歳.PRON.SUF.1SG	飛ぶ.IND.PAST.3SG	CONJ	近い

bud	mānand-e	parčam-i	xīs	o	āvīzān
COP.IND.PAST.3SG	のよう.EZ	旗.iSUF	濡れた	CONJ	ぶら下がっている状態

be	zamīn	bioftad.
PREP	土	倒れる. IND.SUBJ.PRES.3SG

➤ 一十七歳の花嫁の顔色が青ざめ、濡れてぶら下がっている旗のように倒れかかった。

SLにおける「十七歳の花嫁は蒼ざめ、瞼を閉じて濡れた旗のように倒れかかった」は等価方略を用いて「The face of my seventeen year-old bride went ashen. She closed her eyes and began to droop like a wet flag」とELに翻訳された。倒れかかったという言葉は「倒れて物にもたれかかる、また今にも倒れそうである」という意味であり、その同義語もしくは類義語として凭れる、寄りかかる、体を預ける、体をあずける、背をあずける、もたれる、よっかかる、倒れかかる、体重をあずけるなどが挙げられる。SLにおける「倒れかかる」はELにおける「totter, fall, drop」に相当するが、「濡れた旗のように倒れかかった」という表現が使用されたため、そのEL訳文では、元気が衰えて、たれたイメージを持っている「droop」という語が用いられている。「droop」にはうなだれる、たれる、伏し目になる、元気が衰える、弱る、消沈する、しおれるという意味があるため、この文の訳にふさわしいと思われる。濡れていない旗は普段元気よく翻るというイメージがあるため、このELの表現は等価方略を用いて「rang az roxsār-e ‘arus-e hefdah sāle-am parīd. češmān-aš rā bast va mesl-e parčam-e xīs-i quz kard」、すなわち「十七歳の花嫁の顔色が青ざめた。その目を閉じて、濡れた旗のように身をかがめた」とPLに翻訳されている。ELにおける「droop」はPLにおいて「quz

kardan」と翻訳され、「背を丸くする、または背を曲げる」というような意味となっている。PLの翻訳者にはSLが入手できずELからの翻訳となっているため、この部分に関しては誤解が生じたのではないかと思われる。以上の分析を踏まえ、SLからELへの翻訳方略、またELからPLの翻訳方略の両方は受容化方略であり、SLにおける「十七歳の花嫁は蒼ざめ、瞼を閉じて濡れた旗のように倒れかかった」は「十七歳の花嫁の顔色が青ざめた。その目を閉じて、濡れた旗のように身をかがめた」というPL訳文となった。このように、文字通りの意味ならびに内包された意味のいずれも伝達されず、読者に与える印象が大きく異なる結果となった。

日本語から直接ペルシア語に翻訳された訳文は「rang az ruye ‘arus-e hefdah sāle-am parīd va nazdīk bud mānand-e parčam-i xīs o āvīzān be zamīn bioftad」すなわち「一十七歳の花嫁の顔色が青ざめ、濡れてぶら下がっている旗のように倒れかかった」となった。上述のように「倒れかかる」という語は、体重をあずけるなどのイメージを持ち、また濡れた旗にたとえられているため、「āvīzān (ぶら下がっている)」という言葉が付加することで、文字通りの意味 および内包される意味 の両方が伝達されたと思われる。

表8. 著者特有の表現において使用される翻訳方略とメッセージ伝達

	SL → EL	EL → PL	重訳		直接翻訳	
			D	C	D	C
1	受	受+異	×	×	○	○
2	受	受	×	×	○	○
3	受	受	×	×	○	○
4	受	受	○	×	○	○
5	受	受	○	○	○	○
6	受	受	○	×	○	○
7	受	受	×	×	○	○
8	受	受	×	×	○	○

まとめ

著者である川端特有の表現を対象にSLからELへの翻訳、およびELからPLへの

翻訳においてどの翻訳方略が使用されているか調べたところ、SL から EL への翻訳また EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化である例文が全 8 件中、7 件[例(2), (3), (4), (5), (6), (7), (8)]でもっとも多かった。残りの 1 例文は、SL から EL への翻訳方略は受容化方略であるのに対して、EL から PL の翻訳には受容化と異質化方略を合わせた方略が用いられた例 1 のケースであった。デノテーションとコノテーションの双方が伝達された例文は 1 件[例(5)]だけであった。

これに対して、原文の文字通りの意味は伝達されず、語感も失い、読者に与える印象が大きく異なる例文は 5 件[例(1), (2), (3), (7), (8)]であり最も多かった。デノテーションが伝達されているが、コノテーションは捨象されてしまった例文は 8 件のうち 2 件、[例(4), (6)]、である。デノテーションは伝えられなかったが、コノテーションが伝わった例文は一件も見られなかった。上記の分析の結果、著者特有の表現の翻訳においては、文字通りの意味の伝達に成功している例は約 2 割を切り、さらに、コノテーションについては 3 割位しか伝達されなかったことが判明した。

上述の通り、起点言語の表現をできる限り字義的に目標言語に置き換えた翻訳が最も忠実であることは間違いない。さらには、目標語の豊富さも忠実な翻訳の可否の一因となると言われる。現代ペルシア語に存在している多くの表現や慣用句などは、英語やフランス語などからの翻訳を通じてからペルシア語に取り入れられてきた。しかし、起点言語における語彙や表現が目標言語においては異なる意味に捉えられる可能性がある場合は、字義通りの翻訳は好ましくないと思われる。特に、上述の参照例である「猫に小判」のような諺や慣用句など表現における翻訳の場合は、文字通りの翻訳は起点言語と目標言語との間の文化的差異が原因となって、目標言語の読者に理解されない場合が多い。したがって、このようなケースでは、読者がイメージしやすいように翻訳すべきである。また表現やことわざなどそれぞれの目標言語に知られている、または相当する表現やことわざの翻訳は著者独特の表現を翻訳するよりずっと容易である。なぜなら、文学的な言語表現の背後に潜む意味（コノテーション）を分析するのは難しいことであるからである。

上述のように、重訳による翻訳の場合は全 8 件のうち、コノテーション、すなわち著者特有の表現のメッセージが伝達されたと言える例文は 1 件[例(5)]にすぎない。筆者による SL から PL への直接訳において、デノテーションとともにコノテーションも伝達され、すなわち表現のメッセージ伝達された例文は 8 件のうち 8 件であり、遥かに高い。直接翻訳において例文の 4 件[(1), (2), (4), (6)]における翻訳は文字通りではな

い。諺、慣用句、または慣用的な表現の翻訳においては、受容化翻訳方略が最も適するため、文字通りの翻訳よりも含意の伝達がより考慮されるべきである。逆に、字義通りの意味は伝達されているが、文のメッセージが伝達されていない場合は、翻訳が成功していないと考えられる。言い換えれば、このような表現の場合は、コノテーションの伝達に重点を置くべきであると思われる。

このように、重訳における著者特有の表現のメッセージ伝達が1例文に過ぎない理由は次のように考えられる。川端の作品に数多く見られる複雑な心理描写は、原文である日本語で読む場合においてさえも解釈が難しく、しばしば誤解が生じる。こうした表現を外国語に翻訳する際には、さらに困難が生じるのではないかと考えられる。特に日本と大きく異なる文化をもっている他言語への翻訳や、更に重訳を行う場合には、文化の差異も影響し、また翻訳者の解釈のずれも重複するので、コノテーション、すなわち語感を伝えきれないのだろう。一方、筆者による日本語からペルシア語への直接翻訳においては、起点言語である日本語における表現や文化およびその背景などに関する知識を豊富に有する筆者が直接ペルシア語に翻訳するため、重訳の場合と比較するとはるかに適切に翻訳できるのではないか。

第6章 おわりに

本研究においては日本語から英語を経たペルシア語への重訳を対象に、起点言語の日本語が第一の目標言語の英語を通して第二の目標言語のペルシア語にどのように伝えられているかを、ヴェヌティの「受容化翻訳」と「異質化翻訳」に繋がるヴィネイとダルベルネ (Jean-Paul Vinay and Jean Darbelnet) による「直接的翻訳」と「間接翻訳」という観点から分析ならびに考察し、そこで用いられている方略を明らかにした。具体的には SL の日本語とその翻訳の第一目標言語の英語 (EL)、または、英語の翻訳の第二目標言語のペルシア語 (PL) のテキストの全文を対象に、翻訳しにくく、問題のある箇所や誤訳されやすい箇所や実際に誤訳されている箇所を収集し、分類した。そして、分類したそれぞれのカテゴリーに関して、重訳を通して英語訳書とペルシア語訳書における受容化翻訳と異質化翻訳の選択が一致しているか、一貫性が見られるのかを検証した。つまり英語を通して日本語からペルシア語に翻訳された文章がどのように翻訳され、どのように変わっているのか、デノテーションおよびコノテーションが伝達されたかどうかを調査した。さらに、重訳されたものと同じ日本文を筆者が直接日本語からペルシア

語に翻訳し、その翻訳されたペルシア語訳文を、英語を経て重訳されたペルシア語訳文と比較した。

本稿では、文化的な要因が数多く含まれており、翻訳に問題が生じる可能性がある文学作品として、川端康成の『掌の小説』、吉本バナナの『ハードボイルド/ハードラック』とそれらの英語訳とペルシア語訳を対象に選んで分析を行った。

分析する要素として分類したカテゴリーは擬音語・擬態語、色彩語彙、社会言語学的次元の言葉、異文化要素および著者の特有表現といった五つの大きい区分からなる。社会言語学的次元の言葉はさらに挨拶、呼称、一人称代名詞・二人称代名詞、敬語表現といった四つの下位区分を有するので、合わせて八つのカテゴリーとなる。各カテゴリーにおける分析結果は以下のようにまとめられる。

5. 1. 擬音語・擬態語

重訳が擬音語・擬態語の翻訳に及ぼす影響について取り上げた 13 件の例文のすべてにおいて、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化であった。そのうち、デノテーションとともにコノテーションも伝達された例文は全 13 件中 3 件 [例(4), (5), (11)]であり、最も少なかった。デノテーションとともにコノテーションも伝達されなかった例文は 10 件[例(1), (2), (3), (6), (7), (8), (9), (10), (12), (13)]であり、最も多かった。一方、デノテーションは伝達されたが、コノテーションは伝達されなかった例文、またデノテーションは伝達されなかったが、コノテーションは伝達された例文は全く見られなかった。

コノテーションが伝達されたというのは、擬態語の言外の意味も伝達されたということである。擬音語・擬態語は特に動詞に内包される事も多く、そのような例において PL にも同様な訳語が存在する場合には、原文の SL の意味は伝達されると思われる。一方、動詞を強調する擬音語・擬態語については、それに相当する言葉が目標言語に存在しないことも多い。こうした場合、重訳においては、擬音語・擬態語が省略され、さらには、EL への翻訳ならびに PL への翻訳の過程において生じた誤解によって、文字通りの意味ならびに言外の意味がどちらも伝達されなかったことが判明した。

一方、筆者による SL から PL への直接翻訳の場合は、ペルシア語においては擬音語・擬態語が存在するが、日本語ほど多くなく、書き言葉よりも話し言葉、くだけた言葉や幼児向けの小説において用いられる点を念頭に置いた。したがって、目標言語

であるペルシア語に相当する擬音語・擬態語が存在しない場合は、それを省略するのではなく、ふさわしい意味を有する別の表現に置き換える方略を採用した。これにより、重訳の場合と比較すると、より適切な意味伝達に成功した。

5. 2. 色彩語彙

色彩語彙を対象に分析した結果、SL から EL および EL から PL への重訳に使用された翻訳方略は、全例 7 件中いずれも受容化であった。その中で、SL におけるデノテーションおよびコノテーションの両方が伝達された例文は 2 件[例(2), (7)]である。デノテーションは伝達されたが、コノテーションが伝達されなかった例文は 4 件[例(3), (4), (5), (6)]であり最も多い。デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されなかった例文は 1 件[例(1)]であり、最も少ないが、全例でコノテーションが伝達されなかった例文は合わせて 5 例であり、遥かに多い。色彩語彙において SL のコノテーションが伝達されなかったのは、それぞれの言語における色彩語彙に対応する色の認識や、またその色彩語彙がカバーする色の範囲も異なるため、そのニュアンスも伝達されないと言えよう。

しかし、筆者による直接翻訳の場合は省略もなく、色の範囲また SL および PL におけるニュアンスを意識しながら、等価な訳出に努めた。これにより、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達された。

5. 3. 社会言語学的次元の表現

5. 3. 1. 挨拶

挨拶を対象に重訳について分析した結果、SL から PL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略は全例 8 件中いずれも受容化であった。原文の文字通りの意味、すなわちデノテーションが伝達され、さらに言外の意味、つまりコノテーションを含めて適切に翻訳されているのは 2 件[例(1), (4)]だけである。一方、原文のデノテーションが伝達されているが、コノテーションは捨象されてしまった例文は 8 件のうち 2 件、[例(2), (7)]である。デノテーションまたコノテーションの両方が伝達されなかった例文は 4 件[例(3), (5), (6), (8)]であり、最も多かった。言外の意味が伝達されていない理由は、次のように考えられる。挨拶表現とは、多様な対人関係の中で交わされる儀礼的な動作や言葉であり、背景となる文化に大きく依存する。したがって、挨拶表現においては、文化による差異が色濃く表れ、そのまま他の言語に移すことは非常に難

しい。日本語を起点言語(SL)とし、日本語とは大きく異なる文化を有する第一目標語(EL)を通して第二目標語(PL)に翻訳する場合は、両目標言語への翻訳者たちは、母国語では想像のつかない、人と人とが出会ったときや別れるときに交わす儀礼的な言葉、また敬意や親愛の意を示す表現はそのまま等価方略を使用する、あるいは自分が適切であると感じる言葉遣いを選択せざるを得ないため、ニュアンスが伝達されにくい。

筆者による直接翻訳において、意味伝達が高比率で成功した原因としては、英語を経由した場合と比較すると、日本とイランとの間における文化の類似度が高いことも挙げられると推定される。

5. 3. 2. 呼称

呼称についての重訳を分析した結果、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化であるのは全例文 7 件のうち 6 件[(1), (2), (3), (4), (5), (7)]であり、最も多い。SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化および異質化の組み合わせであるのは 1 件[例(6)]であった。デノテーションと同時にコノテーションも伝達されたのは全 7 例文のうち 1 件[例(3)]であり、最も少ない。文字通りの意味つまり、デノテーションが伝達されたが、言外の意味つまり、コノテーションが伝達されなかった例文は全例文 7 件のうち 3 件[(2), (4), (5)]である。次にデノテーションおよびコノテーションの双方が伝達されていない例文は 7 件のうち 3 例文[例(1), (6), (7)]である。上述の通り、SL の日本語における呼称の EL を経た PL への重訳においては、コノテーションが伝達されなかった、すなわち意味伝達が完全になされていないのは 9 割に近い。その理由として、SL における呼称は EL 訳において省略され、配慮されなかったため PL においても反映されなかったことが挙げられる。重訳を経由してニュアンスが伝達されなかった呼称は親族以外の呼称、または英語圏と異なる場面において使用される呼称表現であった。

一方、筆者によって翻訳された直接翻訳においては、約 9 割近くの例文においてデノテーションとともにコノテーションも伝達された。その理由として、呼称の場合、PL においては SL と同様な使用方法があるため、直接翻訳において配慮できる点が挙げられる。ただし、例えば「いとこ」を指す親族名称が、ペルシア語の場合は日本語よりも具体化されている等の相違点も存在するため、若干のニュアンスのずれは避けられない場合もあるのではないかと考えられる。

5. 3. 3. 一人称代名詞・二人称代名詞

一人称代名詞・二人称代名詞の重訳について分析した結果、対象とした全7件の例文すべてにおいてSLからELへの翻訳およびELからPLへの翻訳における方略はいずれも受容化であった。SLにおけるデノテーションとともにコノテーションも伝達され、つまり原文の一人称・二人称代名詞に対するメッセージが適切に伝達された例文は1件[例文(5)]だけである。デノテーションは伝達されたが、コノテーションが伝達されなかった例文は5件[例(1), (2), (3), (4), (6)]であり最も多かった。デノテーションとコノテーションの両方が伝達されなかった例文は1件[例(7)]だけである。その理由は、日本語における一人称・二人称代名詞の数が多く、話し手や聞き手の性差、年齢や立場などによって使い分けられるのに対して、英語、またペルシア語におけるそれらに相当する一人称・二人称代名詞が非常に少ない、さらには文法的に省略される場合も少なくないからであると推定される。こうした状況は直接翻訳においても当てはまるはずである。しかし、筆者による直接翻訳では、デノテーションとともにコノテーションも重訳と比較するとはるかに高い比率で伝達された。その理由として、まず直接翻訳においては、ELへの翻訳の過程で生じる誤解が起きないことが挙げられる。さらに、筆者は人称代名詞に適切な語彙を付加するという手段を用いて、適切なPL訳文の作成を図った。

5. 3. 4. 敬語表現

敬語表現について重訳の影響を分析した結果、対象とした例文8件の中で、SLからELへの翻訳およびELからPLへの翻訳における方略はいずれも受容化であった。SLからELを経たPLへの重訳の結果、文字通りの意味とともに敬意もある程度翻訳された例文は4件[例(3), (5), (6), (7)]である。一方、PL訳においてSLの文字通りの意味が翻訳されているが、敬意は捨象されてしまった例文は3件[例(1), (2), (4)]存在している。SLの文字通りの意味とともに敬意も抜け落ちてしまったPL訳文は1件[例(8)]だけであった。こうした現象が起きたのは、ELには体系的な敬語表現が存在せず、また言材としての敬語の数もきわめて限られているためと考えられる。特に謙譲語が使用された表現の場合は、ELはもちろんのこと、PLにおいても日本語に比べて謙譲語が少ないため、それに相当する特定の謙譲語が不足する。また、EL訳において誤解が生じたため、PL訳においてもニュアンスが大きく異なってしまった例文もあった。

しかし、日本語の敬語表現を意識しながら筆者が直接 PL に翻訳する場合は、SL にそのまま相当する謙譲表現が PL には存在しない場合においても、ペルシア語が豊富に有する尊敬語などを用いることによって、上記に見られるように SL における文字通りの意味とともに敬意も伝達することが可能であった。

5. 4. 異文化要素

異文化要素を対象に取り上げ重訳が及ぼす影響を分析した結果、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化である例文が全 14 件中、13 件である。SL から EL への翻訳は受容化方略であるのに、EL から PL への翻訳は異質化および受容化方略であるのは 1 件[例(8)]である。SL におけるデノテーションすなわち文字通りの意味とともにコノテーションつまり言外の意味も伝達された例文は 5 件[例(3), (4), (11), (13), (14)]であり、そのほとんど生態とジェスチャー・習慣に属している。

デノテーションは伝達されたがコノテーションは伝達されなかった例文は 6 件[例(1), (5), (6), (7), (8), (10)]であり、最も多かった。デノテーションおよびコノテーションの両方が伝達されなかった例文は 4 件[例(2), (4), (9), (12)]である。このようにコノテーションは伝達されなかった例文は全 14 件中 10 であった。異文化要素は文化に関連する記号であるため、SL における語彙に対応する訳語が EL や PL に存在しない場合が多い。そのため、翻訳のプロセスにおいて省略または一般化されることによって、文字通りの意味とともに含意も意伝達されないという支障が生じるのであろう。

一方、筆者が日本語から直接ペルシア語に翻訳した際には、ヴェヌティが取り上げた異質化方略を使用し、起点言語の文化要素を紹介するために、異文化要素をそのまま述べ、その説明を脚注に記載するという手法を用いた。これにより、文字通りの意味とともに言外の意味も伝達されるため、原文のメッセージが伝達されたと考えられる。

5. 5. 著者の特有表現

筆者の特有表現の重訳について分析した結果、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化である例文が全 8 件中、7 件[例(2), (3), (4), (5), (6), (7), (8)]でもっとも多かった。残りの 1 例文は、SL から EL への翻訳方略は受容化方略であるのに対して、EL から PL の翻訳には受容化と異質化方略を合わせた方

略が用いられた例 1 のケースであった。デノテーションとコノテーションの双方が伝達された例文は 1 件[例(5)]だけであった。これに対して、原文の文字通りの意味は伝達されず、語感も失い、読者に与える印象が大きく異なる例文は 5 件[例(1), (2), (3), (7), (8)]であり最も多かった。デノテーションが伝達されているが、コノテーションは捨象されてしまった例文は 8 件のうち 2 件、[例(4), (6)]、である。このようなケースでは、読者がイメージしやすいように翻訳すべきである。川端の作品に数多く見られる複雑な心理描写は、原文である日本語で読む場合においてさえも解釈が難しく、しばしば誤解が生じる。こうした表現は普通に知られている表現と異なるため、それを重訳する場合には、文化の差異も影響し、また翻訳者の解釈のずれも重複するので、目標言語においては異なる意味に捉えられる可能性があり、字義通りの翻訳は目標言語の読者に理解されない場合が多い。こうした状況を考慮し、筆者による日本語からペルシア語への直接翻訳においては、起点言語である日本語における表現や文化およびその背景などを深く考察した。このように日本文化に関する知識を豊富に有する筆者が直接ペルシア語に翻訳したため、重訳の場合と比較するとはるかに適切な PL 文が得られたのではないか。

結論

上記の分析をまとめると、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略がいずれも受容化であったカテゴリは全 77 件中 74 例文であり、そこには擬音語・擬態語、色彩語彙、挨拶表現、一人称代名詞・二人称代名詞および敬語表現に関する例文が含まれる。SL から EL への翻訳方略が受容化方略であるのに対して、EL から PL の翻訳には受容化と異質化を合わせた方略が用いられたのは 2 例文と少なかったが、これらの例文は文化要因ならびに著者の特有表現に関わるものであった。SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化および異質化の組み合わせであるのも 1 例文と非常に少なく、その対象となる要素は呼称表現であった。要約すると、全例文中の約 96%において、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳に受容化方略に至る間接的翻訳が使用されたことが判明した。また SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略がいずれも受容化および異質化の組み合わせであるケースも 1 例存在した。一方、SL から PL への翻訳および EL から PL への翻訳方略は 77 例文中 75 例文において同一であることがわかった。すなわち、受容化方略および異質化方略に繋がる間接的翻訳と直接的翻訳の二つの全体的な翻訳方略観点

からみると、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳方略の間に特に差が見られなかった。ただし、局的な観点からみると、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳のいずれにおいても最も使用された翻訳方略は等価方略であった。

「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」のどちらが用いられたかは、デノテーションまたはコノテーションの伝達への影響はみられなかった。「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」はどちらも等価な訳出を生み出すために重要な方略であり、主に翻訳される起点言語および目標言語の体系、また翻訳者の用いる手法によって異なる。翻訳方略以外に、各カテゴリーにおいて文意のニュアンスが伝達されなかった理由は、重訳によって生じた様々な問題であった。SL から EL に翻訳された際、文化の差異によって相当する訳語が存在しない場合は、SL における要素が省略され、一般化され、あるいは配慮されなかった例が多かった。また、誤解が生じたケースも少なくなった。特に、擬音語・擬態語、一・二人称代名詞ならびに文化要素における翻訳においては省略や一般化または暗示化がなされた。これに加えて、敬語表現においてはさらなる誤解も生じたことがあった。異文化を原因に文意のニュアンスの伝達に支障が起こった例は、色彩語彙、挨拶表現、敬語表現、文化要素および著者の特有表現のカテゴリーにおいて多くみられた。例えば、色彩語彙に対応する色の認識やカバーされる色の範囲も異なるため、そのニュアンスが伝達されない。また挨拶表現の重訳において、文化が日本語とは大きく異なる英語では敬意や親愛の意を示す挨拶表現などはあまり存在しないため、翻訳にそのニュアンスが捨象された結果、PL にも伝達されないという現象が見られた。異文化要素は文化に関連している記号であるため、SL における語彙に対応する訳語が EL や PL に存在しない場合が多く、省略または一般化される、あるいは正確な訳出よりもその分類、または似ているものに翻訳されることによって、含意が伝達されない。呼称の翻訳の際には、親族以外の呼称、または英語圏と異なる場面において使用された呼称の翻訳はすべて文意伝達に支障が生じた。

筆者が直接 SL を PL に翻訳した際には、まず重訳を経たことによって生じる省略または誤解の問題を避けることができた。さらに、日本とイランにおける文化相違を念頭に置いたうえで、両文化圏には類似する表現も多い挨拶表現、呼称また敬語表現の中から、最も適切な訳語を選ぶことができる。また、筆者には日本語に関する知識があるため、色彩語彙、異文化要素、また著者の特有表現を更に適切に翻訳できる。また、擬音語擬態語、一・二人称、敬語表現、また文化要因のように、正確な訳語が存在しないカ

テゴリーにおいても、文脈にふさわしい手段を採用することにより、適切な訳ができたと考えられる。

翻訳では原著の生命が失われるだろうといわれる。特に重訳の場合には、さらに原著の生命が失われる恐れがある。外国語における文学作品の翻訳書を読む読者には、その外国語圏における特有の文化や原著の生命を知りたがっている人が多い。特に川端康成によって書かれた、理解が簡単ではない文学作品の翻訳においては、SLである日本語にとどまらず日本文化圏の知識が深い翻訳者こそがその生命を伝達できるだろう。同じ一つの文学作品の三言語での表現を対象とする本稿における分析から、これらの三言語それぞれの特異性と、その背景にある文化を考察することができた。その結果、筆者は文学研究ではなく翻訳研究でしか見出すことの出来ない単独性というのは、たしかにあるのだとの確信を持つに至った。

イランに生まれ育った筆者は、当然ながらペルシア語を母語としイラン文化を自らの基盤に置くが、これに加えて英語も堪能である。さらに、筆者はテヘラン大学日本語・日本文学科で修士号を取得し、7年間にわたって日本において研究生生活を送っているため、日本語のみならず伝統や風習といった日本文化全体についても、身近に接する経験を重ねてきた。本研究は、このように三地域における言語・文化に精通した筆者の資質に立脚するものであり、だからこそ、これまでに述べてきた貴重な知見を得ることができた。現在、筆者は本稿で採り上げたカテゴリーに加えて、主語、終助詞、授受表現と複合語彙等についても重訳が及ぼす影響を分析する作業に着手している。今後は、翻訳論の研究だけではなく、さらに視野を拡げ、川端康成のような解釈が困難な文章を対象に言語論も組み込む研究に取り組みたいと考えている。

謝辞

本論文を作成するにあたり、有意義なご指導を頂いた論文指導教員の糟谷啓介教授に感謝致します。また副ゼミにおいて優しいご指導を賜りました論文指導委員のイ・ヨンスク教授に感謝の意を表します。

論文全体の日本語のネイティブチェックにおいて、丁寧かつ熱心な示唆をいただいたゼミの同期、論文チューターの吉岡佳子氏に深謝致します。また、論文中の日本語の例文をペルシア語に翻訳するにあたり、ペルシア語チェックにご協力いただいた五十嵐小優粒氏、小林歩み氏に御礼申し上げます。さらに、議論を通じて多くの啓発と知識を頂いた言語社会研究科博士課程院生の青木耕平氏に感謝します。

最後に、協力していただいたすべての皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞とさせていただきます。

参考文献

- アーザルパランド・ソホラーブ(2008)「ペルシア語における敬語表現：素材敬語を中心に」、一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』第2号、pp.438-456
- アーザルパランド・ソホラーブ(2010)「ペルシア語における敬語表現の研究：日本語の敬語表現の特質を視野に入れて」一橋大学大学院言語社会研究科博士論文
- 井出祥子 著 (2006)『わきまえの語用論』大修館書店
- 内田富男 (2014)「コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察—BNC, JEFLL Corpus, CEFR(-J) を用いて—」、明星大学研究紀要—人文学部、査読有、第52号、pp.19-35
- 岡田恵美 (2017)「ペルシア語・日本語間における翻訳の問題点」2017年5月8日テヘラン大学外国語学部における講義の記録（未刊行）
- 河原清志 (2014)「翻訳ストラテジー論の批判的考察」『翻訳研究への招待』No. 12
金城学院大学, pp.121-140
- 木川行央 (2011)「一人称代名詞としての「自分」言語科学研究：神田外語大学大学院
紀要巻17, pp.39-65
- 木藤冬樹 (1991)「コノテーション感・主観のはざままで」東京外国語大学論集第43号、
pp.1-23
- グエン、タンタム (2013)「ベトナムにおける日本文学の重訳—歴史的背景と異文化要素

- の翻訳-」、『通訳翻訳研究』、日本通訳翻訳学会、第 13 号, pp.79-95
- グエン、タンタム (2014) 「異文化対照法としての重訳」、『通訳翻訳研究』、日本通訳翻訳学会、第 14 号, pp. 60-73
- 皇麗梅、川本信幹 (1997) 「日本語・中国語における挨拶語の比較研究-中国における日本語教育の視点から-」、日本体育大学紀要 26 巻 2 号, pp. 247-259
- 国広哲弥 (1990) 「「呼称」の諸問題」、『日本語学』、第 9 号、明治書院
- 斉藤美野 (2010) 「『翻訳学入門』に学ぶ翻訳方略の対概念」『異文化コミュニケーション論集』、第 8 号, pp. 85-92
- 齋藤由美子 (2010) 「重訳の試み—多和田葉子の作品『ボルドーの義兄』分析『れにくさ』現代文芸論研究室、第 2 号, pp.162-180
- 篠原有子 (2013) 「映画『おくりびと』の英語字幕における異文化要素（日本的有標性）の翻訳方略に関する考察」『翻訳研究への招待』第 9 号, pp. 81-97
- セペフリバディ・アザム (2012) 「現代ペルシア語における人称表現の使用実態：親族間の会話における呼格的用法と代名詞的用法の対称詞」一橋大学大学院言語社会研究科紀要編集委員会 編『言語社会』、第 6 号, pp. 282-298
- 蘇紅 (2014) 「色彩語の日中対照研究 -赤・黄・黒・白の四色を例として対照する場合 -」愛知大学中日大辞典編纂所『日中語彙研究』、第 3 号, pp. 47-62
- 鈴木孝夫 (1982) 「日本語の自称詞と対称詞」『現代のエスプリ-日本人の間柄』、178 (5)、pp. 121-126, ぎょうせい
- 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』、大修館書店
- 滝浦真人 (2011) 「敬語と言語主体 -敬意・主観性・モダリティ」、澤田治美編『主観性と主体性』ひつじ書房, pp.231-249
- 滝川桂子 (1995) 言語の背景—翻訳における違和感—名古屋 文理短期大学紀要 第 20 号, pp.143-151

- 丹野眞智俊 (2007) 『オノマトペ “擬音語・擬態語”をいかす—クオリアの言語心理学』、
あいら出版
- 林知情(2001)「日本語と韓国語における呼称の対照」、研究序論広島大学大学院国際協力
研究科『国際協力研究誌』第7巻第1号, pp. 107-121
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理』大修館書店
- 王 輝 (2003) 「言語と文化的背景 -言葉から見た中、日文化-」 *Language and Its
Cultural* , NUCB JLCC, 5, 2, pp.67-79
- マンデイ、J. (著), 鳥飼玖美子監訳 (2009) 『翻訳学入門』みすず書房 [原著 :
Munday, J. (2008). *Introducing translation studies: Theories and applications*. (2nd ed.)
London: Routledge].
- 三上京子 (2004) 「多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み -「ごろごろ」「ば
たばた」を例として-」、小出記念日本語教育研究会 『論文集』第12号, pp.63-77
- 皆島博 (2006) 『実験音声学と一般言語学 (分担執筆：日英語の基礎色彩語彙)』東京堂
出版
- 三輪正 (2005) 『一人称二人称と対話』、人文書院
- 南不二男(1987) 『敬語』岩波新書
- モガッドムキヤ R.、ホセイニ S.A.、ジャヘドザーデー A.(2009) 「イランにおける日本
研究に関する出版物についての統計分析調査」大阪大学外国語学部外国語学科ペル
シア語専攻編 『イラン研究』第5号, pp.291-317.
- モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ(編)(2013)、『翻訳研究のキーワード』藤濤
文子、伊原紀子、田辺希久子訳、研究社
- 矢田陽子 (2013) 「日西・映像翻訳方略定義の記号学的検証」『翻訳研究への招待』
No.9, pp.19-36
- 吉枝聡子 (1992) 「ペルシア語の擬態語と擬声語」東京外国語大学アジア・アフリカ言

- 語文化研究所『アジア・アフリカ言語文化研究』、44 卷, pp. 95-117
- 吉枝聡子 (1998) 「現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究-テヘランの場合-」(東京外国語大学博士論文)
- 吉枝聡子(2000) 「ペルシア語の敬語行動-イラン式おつきあいの知恵」『鈴木孝夫著作集』岩波書店, pp.3-6
- 吉枝聡子 (2013) 「ペルシア語の所有・存在表現」東京外国語大学『語学研究所論集』第 18 号, pp. 362-378
- 渡辺友左 (1977) 「あいさつ」佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院, pp. 198
- Abdolhamidi, Fatemeh (2012) The strategies used for translation of culture specific concepts: three Persian translations of “Pride and Prejudice”, Proceedings of the 7th Malaysia International Conference on Languages, Literatures and Cultures.
- Afkhami, Ali& Ghasemi, Seyyed Ziyauddin (2010) Language Styles in Persian and Their Literary Representation foreign language studies, no.55, pp.5-17.
- Aghagolzadeh, Ferdows (2011) A Critical Discourse Analysis on Terms of Address in Persian, Intl. J. Humanities, Vol. 18(1): pp. 565–575.
- Aixelá, J. F. (1996) Culture specific items in translation” In R. Alvarez & M. Carmen-Africa Vidal (eds.), *Translation, Power, Subversion*, pp. 52-78, Clevedon: Multilingual Matters.
- Azerang, Abdolhosein (2015) Tarix-e Tarjome dar Iran, *chap-e qoqmus*.
- Baker, M. (1992/2011) *In other words*. London/New York: Routledge.
- Berlin, Brent & Paul Kay (1969); (1991) *Basic Color Terms*. Berkeley: CSLI Publications.
- Barthes, Roland (1972) *Mythologies* (A. Lavers TraCs.), The Coonday Press.
- Bastin, G.L.(1998) Adaptation in M. Baker (eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. pp. 5-8, London and New York: Routledge.
- Berlin, B. & Kay, P.(1969) *Basic Color Terms: Their universality and evolution*. CA: University

of California Press.

Brown and Gilman (1960) The Pronouns of Power and Solidarity. in Sebeok, T. A. (ed.),

Style in Language, pp.253-276. Cambridge, Mass: MIT Press

Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*,

Cambridge: Cambridge University Press

Catford, J.C. (1965) A linguistic theory of translation. Oxford: OUP.

Hosseini, Ayat. (2016). "A Review of Tsuneo Kuroyanagi's Modern Persian-Japanese and

Japanese-Persian Bilingual Dictionary". *Critical Journal of literature and humanities programs*, 16(40), pp.99-120.

House, J. (1977) A model for translation quality assessment. Tübingen: TBL Verlag

Gunter Narr.

Jakobson, Roman (1959) On linguistic aspects of translation. R.A. Brower (Ed.), On

Translation, Harvard University Press, Cambridge, MA, pp.232-239.

Jahangard, Faranak (2011) Negahi enteqadi be sarneveshte tarjome-ye manteqolhemar

e' temadolsaltane adabiate parsi e moaser, *pazhuheshgahe olume ensani va motaleat farhangi*, pp.21-38.

Joos, M. (1961) The five clocks. New York: Harcourt Brace.

Keshavarz, Mohammad-Hosseini (1988) Forms of Address in Post-Revolutionary Iranian Persian.

A Sociolinguistic Analysis. *Language in Society*, 17: pp. 565-575.

Koller, W. (1979/1989) Equivalence in translation theory. Translated from the German by

Chesterman, A. In A. Chesterman, (Ed.). (2004). pp.99-104. Cambridge: Cambridge University Press.

Magdalena Paluszkiewicz- Misiaczek (2005) Strategies and Methods in Dealing with Culture

Specific Expressions on the Basis of Polish-English Translations of Certain Administrative

- and Institutional Terms, Theory and Practice” in *English Studies 3 Proceedings from the Eighth Conference of British, American and Canadian Studies*. Brno: Masarykova univerzita.
- Mark Mc Ielland and Romit Dasgupta (2005) *Genders, Transgenders and sexualities in Japan* London & New York: Routledge.
- Munday, Jeremy (2008) *Introducing Translation Studies*, New York: Routledge.
- Muranaga, Yukio (2010) Translation of [Exploring Translation Theories by Anthony Pym] 修士論文.
- Newmark, Peter (1981) *Approaches to Translation* Oxford Pergamon Press.
- (1988) *A Textbook of Translation*. pp.94, London: Prentice Hall.
- Nida, E. A. (1964) *Toward a Science of Translating*. Leiden: Brill Archive.
- Nida, E. A. & Taber, C. R. (1969) *The theory and practice of translation*. Leiden: E. J. Brill.
- Palumbo, G. (2009) *Key terms in translation studies*. London & New York: Continuum.
- Pedersen, J. (2011) *Subtitling norms for television*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Pym, Anthony (1992) *Translation and Text Transfer. An Essay on the Principles of Intercultural Communication*, New York: Peter Lang.
- (2010) *Exploring translation theories*. London/New York: Routledge.
- (2011) Translation research terms: A tentative glossary for moments of perplexity and dispute. In A. Pym (eds.) *Translation Research Projects 3*, pp. 75-110 Tarragona: Intercultural Studies Group.
- Rajabzadeh, Hashem and Kinji, eura (2005) Travels of Nobuyoshi Furukawa member of the general staff the deputy of and first embassy of Japan to Persia”, *Anjomane asaro mafakher farhang*.
- Ringmar, M. (2007) Roundabouts routes: Some remarks on indirect translations , [Online] <http://www.arts.kuleuven.be/info/bestanden-div/RINGMAR.pdf>

- Schleiermacher, F. (2004) On the Different Methods of Translating, In L. Venuti (eds.) *The*
- St André, J. (2009) 'Relay', in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp. 230-232 *Translation Studies Reader* (2nd ed.) pp. 43-63, London & New York: Routledge.
- Schumann, J. H. (1976) Social distance as a factor in second language acquisition. *Language Learning*, 26, pp.135-143.
- Snell-Hornby, M. (1988) *Translation studies: An integrated approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Toury, Gideon (1980) *In Search of a Theory of Translation*, Tel Aviv: Porter Institute.
- (1995) *Descriptive Translation Studies and beyond*. Amsterdam and Philadelphia, PA: John Benjamins.
- Venuti, Lawrence (1995) *The Translator's Invisibility A history of translation*, New York : Routledge.
- (2008) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London and New York: Routledge.
- Vinay, Jean-Paul (1995) *Comparative Stylistics of French and English A methodology for translation*, Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins Publishing Company.
- Vinay, J. P. & Darbelnet, J. (1958/2000) *A Methodology for Translation*. Translated by Sager and Hamel In L. Venuti (eds.) *The Translation Studies Reader*, pp. 128-137, London & New York: Routledge.
- Wilss, Wolfram (1982) *The Science of Translation*. Tübingen: Gunter Narr.
- Zare-Behtash, Esmail and Firoozkoobi, Sepideh (2009) A Diachronic Study of Domestication and Foreignization Strategies of Culture-Specific Items, in *English-Persian Translations of Six of Hemingway's Works* *World Applied Sciences Journal* 7 (12): pp. 1576-1582.

Zilberdik, Nan Jacques (2004) Relay Translation in Subtitling, Perspectives: *Studies in Transology* 12 (1): pp.31-53.

辞典

『擬音語・擬態語辞典』(1978) 浅野鶴子 編、金田一春彦 解説角川書店

『大辞林』(1999) 松村明 (集編) 第二版新装版、三省堂

『大辞林』(2006) 松村明 (集編) 第三版、三省堂

研究対象書物

SL版：川端康成 (1971) 『掌の小説』、新潮文庫

EL版：Yasunari Kawabata (2006) *Palm -of -the- Hand Stories*, Translated by Lane Dunlop & J. Martin Holman, Farrar, Straus and Giroux. New York.

PL版：Yasunari Kawabata (2013) *Dastan-ha-ye kafe-dasti*, Translated by Mohammad reza qelich khani, *chap-e qazal*.

SL版：吉本ばなな (2001) 『ハードボイルド/ハードラック』幻冬舎文庫

EL版：Banan Yoshimoto (2006) *Hardboild & Hard Luck*, Translated by Michael Emmerich, M. Grove Press

PL版：Benana Yoshimoto (2012) *Sarsaxt, Kam baxt*, Translated by Alborz Gharib, *Herfeh Nevisandeh*

略語一覧

SL 日本語

EL 英語

PL ペルシア語

D デノテーション

C コノテーション

異 異質化

ADJ 形容詞	NEG 否定
ADV 副詞	PASV 受動態
AUX 助動詞	PAST 過去
CAUS 使役形	PERF 完了
REL.PRON 關係詞	PL 複数
COMP 比較級	PREP 前置詞
COMPD 複合	PRES 現在
COP コピュラ	PRON.SUF 接尾辞形人称代名詞
EZ エザーフェ	PTCPL 分詞
IMPER 命令形	SG 単数
IMPF 未完了	SUF 接尾辞
IND 直説法	SUPRL 最上級
INTRJ 間投詞	
受 受容化	
INF 不定詞	